

始



30.12.22

176
2



校註

日本圖書印

文學大系

第二卷

大正
14. 8. 13
購求

在原業平畫像

傳藤原信實筆

文學博士 笹川種郎

伊勢物語は多くの畫題を提供し、工藝品に題材を供給すること少からずと雖も、物語を主題とせる優秀なる繪卷に至りては、絶えてこれを見ず。筆者不知の二卷、淺草文庫に摹本のみ留めたりと云へる三卷、住吉如慶筆と稱する二卷等のことは、物の本に見ゆれど、蓋し上乘なる畫品に非ざるが如し。

在原業平の畫像は、南都の近郊なる不退寺にあるもの、名あり 不退寺は俗に在原寺と稱す。此の畫、業平自ら描く所なりと傳ふるも、信ずべからず。然れども其の筆致優れ、神采奕々たるものは、藤原信實畫、畧傳及び和歌、後京極良經筆と稱せらるゝ三十六歌仙卷物、二卷中の一幀を推して白眉となさざるを得ず。固より架空の描寫にして、恐らくは何等の典據あるものに非ずと雖も、眉目清秀、溫潤玉の如く、人をして在五中將を羨慕せしむ。此の卷物は、もと佐竹侯爵家の藏なりしが、近時割裁せられ、好事者の分藏に歸し、世の知る所なり。

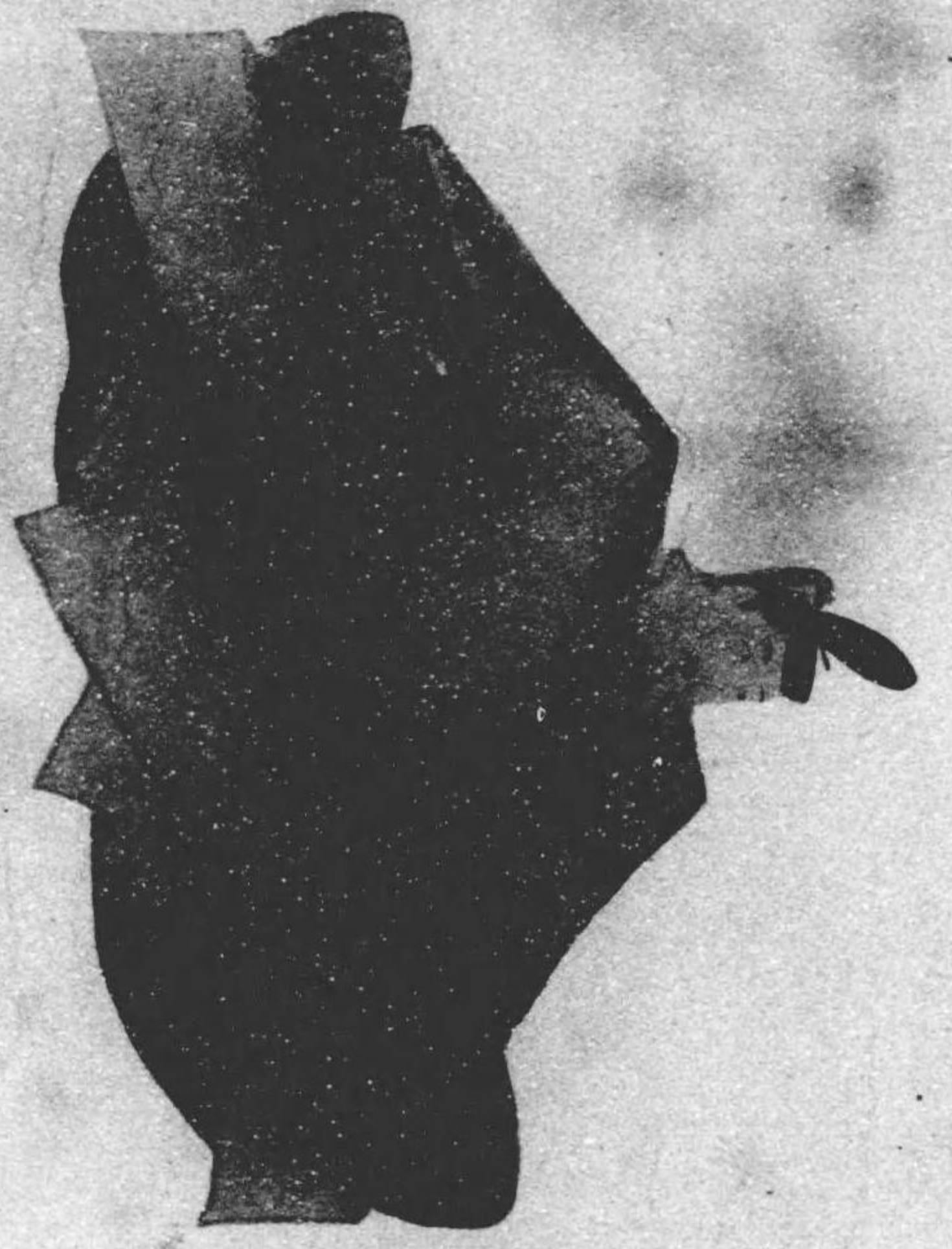
の巻は二。

巻目、もろもろの書物の類を記し、其書物の分類に
類のものに非ずと雖も、目録表、出題正の類、人をして其書中程を考へしむ。其
二巻中の一巻を附して白紙とせざるを得ず。固より其書の性質にして、其のうらなひの
流々たるもの、教訓的性質、各書及び其書、其書其書と稱せざるに三十六種の間、
す。其の書、業平自ら著しおぼせしもの、計三十五冊。然れども其の書数は、其書
出題業平の遺稿に、雨晴の紙吹雪の不長幸のものと、亦あり。不長幸の書は、其書と稱
止ぬる書に非ざるを得ず。

の巻目及びその三巻、其書成業平と稱する二巻等のことは、其の本に具せしむ、蓋し
題とする書名は書名に準りて、其の書名を以てしむ。其書成業平の二巻、其書成業平の書名を
其書成業平の書名に準りて、其の書名を以てしむ。其書成業平の書名を以てしむ。

文學博士 蒲 川 鮮 浪

出題業平遺稿 著者 蒲川鮮浪



Handwritten signature in cursive Japanese calligraphy, likely reading '蒲川鮮浪'.

藏人頭右近衛権中将三右衛門正房業平
平城天皇總御座平河孫頼三三男外行直
親王桓武天皇第(六)

例言

一、本卷には竹取物語、伊勢物語、大和物語、濱松中納言物語、無名草子、とりかへばや物語、堤中納言物語を収めました。

一、竹取物語は石川佐久太郎これを擔當し、解をもととし、二三の異本を参照しました。

一、伊勢物語は佐伯常麿これを擔當し、新釋をもととし、嵯峨本を参照しました。

一、大和物語は佐伯常麿これを擔當し、抄をもととし、虚靜抄、解、冠註等を参照しました。

一、濱松中納言物語は石川佐久太郎これを擔當し、尾上八郎博士所藏の寫本をもととし、一三三の異本を参照しました。

一、無名草子は金子彦二郎これを擔當し、羣書類従本によりました。

一、とりかへばや物語は沼波守これを擔當し、關根正直博士所藏岡本保孝の「とりかへばや物語考證」を参照しました。

一、堤中納言物語は金子彦二郎これを擔當し、宮内省圖書寮桂宮本をもととし、清水濱臣、小山田與清、伴直方等の手澤本及び松井簡治博士の所藏本その他數種を参照しました。

校註 日本文學大系 第二卷目次

竹取物語	一—三
伊勢物語	三—三二
大和物語	三二—三九
濱松中納言物語	三九—三九八
無名草子	三九八—四六六
とりかへばや物語	四六六—六九二
堤中納言物語	六九二—七五二

解題

文學博士 尾 上 八 郎



物語

平安朝に這入つて、假名の使用が漸次盛となつて來た。從來、何時も漢字を用ゐて、事件の記録、思想の發表をしたのであつたが、これは極めて煩雜且つ不便であるので、奈良朝の末ごろから、漢字の點畫を省いて假名を作るやうになつた。それには楷書から來たものもあり、草書から出たものもある。この前者が片假名となり、後者が平假名となつたのであるが、これがために、國語のままに、事柄も感想も記すことが極めて自由になり、遂に小説が現はれる事となつた。

從來浦島子の話とか、夢野の鹿の物語とか、小説の祖と稱すべきものがあつたが、眞に文藝として價値あるものの現はれたのは、平安朝初期であつて、しかも竹取物語である。源氏物語の繪合に、「物語のいできはじめの親なる竹取の翁。」と云つてあるのが、よくこれを證して居る。しか

し、本居宣長は、竹取物語は延喜以後のものであらうと云つて、其の製作の時代を下して居る。これも或は信すべきであらうが、源氏物語に、この物語の繪は相覽、書は貫之が書いたと云つてあるのを見ると、貫之以前に既に世に流布して居たものと見ることが出来る、源氏物語は假作ではあるが、後の物語を、特にその以前に練り上げて書いて、それに滑稽的興味を持たせるなどの技巧を施さず、極めて眞面目であるから、かう推定しても差支ないであらう。さうすると、貫之は延喜に榮えた人であるから、この物語は、延喜以前の所作と見なければならぬ。しかし、弘仁中のものとまで云ふ説のあるのは、あまり古きに過ぎて、當らぬ事と思ふ。文體も、大抵單文もしくは重文で、甚だ簡古むしろ古拙であつて、延喜時代の風ではない。これは貫之の土佐日記の文體と對して、よく知れることである。

この物語の作者は、古くは源順と云つて居た。順は天曆時代の人である。延喜以前の所作たることが肯定せらるれば、この作者は、勿論順ではない。この書の出典が、漢籍にもあり佛典にもあるところから、和漢佛に通じた人でなければ出来ない。それは、順ではなからうかと思つて、試みに云つたのが本となつて、この説が出たのであらうと、古人も云つてゐる。しかし、妄なることは云ふまでもない。従つて、何人の所爲であるか、今日では詳にし難い。

竹取といふ題目は、この本の最初に、「今はむかし竹取の翁といふものありけり。」とあるので名づけたのである。この物語の主人公は竹取の翁ではなく、竹から出た女のかぐや姫であるから、それを以て名づけるべきであるが、單に竹取と云つたのは、古人の命名の無造作なのを、よく現はしてゐる。「かぐや姫の物語」とも、源氏物語の蓬生に見えて居るから、しかも呼んだのであらうが、繪合には、また竹取の翁と云つてあること、前述の通りであるし、また一般に、しか呼んでゐるのであるから、それに據るべきであらう。これもまた、「たかとり」と呼ぶべきであると、顯昭は論じてゐるが、猶これも多數に従つて、「たけとり」と云つて置いてよからうと思ふ。

この物語の内容は、殆んど云ふ必要もないほど、世に知られてゐるが、全く知らない人のために少しく云つて見ると、昔竹を取る翁があつた。野山に入つて竹を取つて居ると、本光る竹を發見した。その中に、少女の玉の如きものが居る。それを持つて歸つて養ふと、光かやくまでの女となつた。これをかぐや姫といふ。それを聞き傳へて妻にと望むものが多くあつた。その中にことに熱心なのが五人あつた。それは、石作皇子、車持皇子、阿部御主人、大伴御行、石上麻呂である。姫はそれらの人に五つの難題を云ひかけて、それが出来たらば會はうと云ふ。乃ち石作皇子には天竺の佛の御石の鉢、車持皇子には蓬萊の玉の枝、阿部御主人には火鼠の裘、大伴御行

には龍の首にある五色の玉、石上麻呂には燕の子安具を持つて来いと云ふのであつた。人々はいづれも、それを得ようと苦心する。しかし石作皇子は、山寺の賓頭盧の前の鉢、車持皇子は、工匠に作らせた玉の枝を持つて来るが、いづれも姫に看破せられる。阿部御主人は火鼠の裘の贋物を得て、知らずに持つて行つて焼かれてしまふ。大伴御行は、龍を得ようとして乗り出したが、難風に逢うて大困難をする。石上麻呂は燕の子安具を得むとして卻つて負傷をして、皆姫に會ふことが出来なかつた。この事が帝の御耳に達する。召さうとして敕使を賜はつたが、姫はこれも御辭退申し上げた。その中に、姫は楽しまない風を生じて、月夜に泣くことを始める。翁夫婦が不審がつて尋ねると、姫は實は自分は月の都のもので、罪を得てこの地上に下つて来たのであるが、これが満ちたので、この中秋の夜には迎を得て、月に還るのだと云ふ。夫婦は悲傷遣る方なく、帝にも申し上げると、迎の者を拒けとて、護衛の兵士を御遣しになる。しかしその夜になると、人々の警衛も更にかひなく、姫は迎の人とともに、天に去つてしまふ。その記念にとて、不死の藥を奉つて行く。帝は、姫がなくては何にもならないとて、その藥を、天に近い不二山で焼かせられた。その煙が今も立上ると云ふのである。

以上の如く、この物語は著しく浪漫的であるが、その由來するところが種々ある。それを學者

が考證して、竹の中に人の居るのは寶樓閣經、佛の御石の鉢は西域記、蓬萊の玉の枝は列子、洞冥記、火鼠の裘は神異記、龍の首の玉は莊子、月宮殿は起世經、不死の藥は張衡靈憲志、またその外の佛典漢籍から來てるといふのであるが、作者が、一々これらの書を讀破して書いたのではあるまい。見集め聞き集めして、適宜に配置し利用したので、そこに作者の手腕があるのであらう。ことに五人の人々が、姫の命じた品物を得ようとして失敗するのを寫して、各その態を異にせしめたのは巧みである。智あるものは智に破れ、財あるものは、或は財に、或は力に破れる。その事が意想外なのに、甚しく興味を湧かす。それに一々こじつけながら、「はぢをすつ」とか、「かひなし」とか、異なつた洒落を加へ、更に不死の藥を焼いたので、「不死の山」といふ洒落を以て終結して、放笑一番せしめるのは、後の黄表紙などの趣とよく似通つて、洒脫なる國民思想の一面を窺はしめる。この滑稽は、從來地名等の解釋に、眞面目な意味で使はれてゐたのであるが、これを引續いで、興味の中心としたのは、よほどの巧慧機智の所有者の所爲であらねばならぬ。この點に於いても、この物語は見る價值がある。況んや浪漫的物語の最初のものであるに於てをやである。

伊勢物語

奈良朝末期から衰頹した歌は、平安朝に這入つて、清和、文徳二帝の頃から、勢を回復しはじめた。その製作が盛になると共に、それに關する逸話も發生した。歌を傳へると一緒に、それをも傳へる必要がある。こゝに、歌と、その逸話を書いた散文と、兩者を兼ね備へた一體が起つて來た。伊勢物語は、その一である。しかも現存してゐる中で、最初のものである。

伊勢物語は、完全した一説話ではない。個々連絡のない別趣の小話から成り立つてゐる。しかし、大抵その各項の冒頭の、「昔男ありけり」の男は、孰れも多情多感で、多くの女に對して一々温情を有つて、いかなる人にも、「そのけぢめ見せぬ心」を示して居る。従つてその人は、自づから一貫した一人の主人公となつて居る。その主人公が、種々の場合に應じて作つた歌が、説話の中心となり、それに入る道程を示したものが、散文となつて居るのである。

この主人公は何人であらうか。何等の明記がそこにはないのであるから、推測するに止まるのであるが、在原業平の歌が多くあるので、古來業平であるとせられて居る。が業平の作でなくて、

萬葉集その他にある歌もあるのを見ると、全部の歌が業平のものらしくて、さうでない。従つてその人は、必ず業平であるとは云はれなくなる。しかしその間に輕重はあつて、業平の歌を本として書いた説話が主で、他はそれを補足して作つた客にあたるものであるとは云へると思ふ。

この物語の作者は何人であらうか。この人が、「昔ありける」男と一致するであらうか、乃ち在原業平であるであらうか。それが古來の疑問であつて、様々の學者が研究して居る。その(一)は全部業平の書いた者とするものである。その徵證としては、(イ)謙退の詞が文中に屢見える。(ロ)かたる翁「だの、」の歌のきたなげさよ」だのがそれである。(ハ)男女間の祕事が記されてある。二條の後の事などがそれである。(ニ)顯昭の袖中抄に、朱雀院の塗籠に、業平自筆のこの物語があると云ふ。作者の自筆本があれば、これより勝つた證據はないわけである。しかし書中に、前に述べた如く、萬葉集中の歌もあり、業平歿後の、芹川の行幸の時の歌もあるから、業平としても、全部その人の書いたものとは云はれない。この故に、(二)は業平の書いたのを、伊勢が補つたとする。その徵證としては、伊勢の家集の文體が、この物語の文體と似て居るところがあるのを擧げる。これがいつしか進んで、伊勢が、七條の後温子に上つたものであるといふにも到つた。

以上の説には、種々の非難が起つた。それは、(イ)の謙退の詞のあるのは、業平の作といふ證據

にはならない。何となれば、自分がその人でなくても、密事めくことを身を遜つて書くのは、物語として當然である。(ロ)の秘事を記してあると云ふのも、業平の自記といふ證とはならない。何となれば、誰も自分の法を犯した事を書いて、子孫にさがない事を傳へ、世に罪得る業をするものではない。(ハ)の顯昭の云ふ朱雀院の業平自筆の本があれば結構であるが、これは極めて曖昧である。随つて、業平の作といふ證據にはならない。

伊勢の補筆と云ふのをかしい。この物語の文體は、男の手で書いたことを證するのみで、女の筆に成つたものとは思はれない。況んや、伊勢が十三で書いたとさへ云ふのであるが、伊勢は宇多天皇の御時に榮えたのであるのに、この物語の中には、延喜、承平、更に天曆の頃の人の歌も載せてある。また伊勢が、七條の后に上つたと云ふが、七條の后は基經の女、二條の后は基經の妹で、七條の后には叔母に當つてゐる。その七條の后に仕へてゐる伊勢が、その叔母君の密事を書いて上つるといふ事があるべきであらうか。この事は妄である。況んや、十三などといふのは論外であるといふのである。

しかし、この物語を通覽すると、(イ)の、謙退の詞のあるのは、やはり本人の記した一證となるであらう。他人でも出来るかも知れないが、本人が云ふとする方が自然である。(ロ)の、秘事

を自分で書くのは、不自然であるともいへるが、當時の情勢から考へて見れば、當然であると思はれる。それは、當時は感情中心の時代であつて、戀愛關係及びそれから起る葛藤などを書くのは、決して不面目とも何とも考へなかつたのである。乃ちこれも、本人の自記でないといふ證據にはならない。(ハ)の、業平自筆本は曖昧であるとしても、なほ業平の歌が澤山あるのであるから、大體その人の自記といつても差支はないであらう。而して業平歿後の芹川行幸等の事は、勿論伊勢ではあるまいが、何人かが補作したのであらう。

顯號の伊勢物語といふのは、何故であらうか。それには、(一)伊勢は「えせ」に通じるから、僻言物語といふ意からつけたのである。(二)伊勢齋宮のことを書いてあるから、その儘伊勢とつけたのであるといふ二説がある。この(一)は、いはゆる懸詞からつけたもので、當時の他の物語が、竹取とか、宇津保とか、落窪とか、率直にやつた一般の命名法の如く簡易でない。(二)は、伊勢の齋宮の事があるにはあるが、これが全篇の主となる程、重要な物語ではない。それよりも、猶他に全體の命名の因縁となるべきものがあると思はれる。かやうに否定して來ると、伊勢の意義は全く分らなくなるのであるが、古來、和泉式部の本と傳へられるこの物語があるといふ。それには、開卷第一に、伊勢の齋宮の條があるといふ。今の本には、開卷第一には初冠の條がある。

それに引いてあるのは「しのぶもぢずり」の歌で、源融の作である。融は業平よりも後れて死んだ人であるから、或はこれは後に補つた一節であるまいか。さう考へて來ると、今日の本は、順序も説話も原本とは違ふ。挿入がいつしか出來たのではなからうかと云ふ念が生じて來る。こゝで、和泉式部の本といふのに回頭すると、この本の初冠の條を初頭とせず、伊勢の齋宮の條をしてあるのは、原本か、或はそれに近い本で、伊勢物語の命名も、それから出てゐるのであらうかと考へられる。後に、種々の説話もあるが、まづ最初に、伊勢齋宮の事があるから、重要であるかないかは問はず、すぐに伊勢物語と名づけたのであらう。さうすると、當時の一般の命名法とも違はず、極めて自然に考へられて來る。これを定家は、伊行の所爲だと云つてゐるが、卻つてそれが疑はれる。

この物語の文體は、單文或は重文が主であること竹取の如くで、それ以上、複雑に進んでゐない。従つて簡潔で、雄健で、素朴である。しかし事實が紛糾すべき性質のある戀愛關係であるから、云ひ足らぬところ、陳べ盡さぬところに憾みが少なからずある。この爲、餘韻があり、餘情がある事ともなつてゐるが、猶文の到れるものとは云ひ難いであらう。が、これが、業平の歌の意餘りありて語足らずと云はれた處と類似してゐるから、或は業平の自記であるといふ傍證にな

るかも知れない。文體はかくの如く簡素であるが、一々の内容は、よほど複雑してゐる。事實を改作して、その眞の辿られぬやうにしたり、小説を事實と思はせるやうに眞面目を装つたり、舊い歌を變改して新しいもののやうに見せたり、二首の歌を一首に接合したりして、知らぬ顔を作つて居る。これから多くの洒落味、滑稽味が生じて來る。これらも竹取の如く、多くの巧慧機智を要する。この巧慧機智が現はれながら、厭味を伴つてゐないのは、古文である爲かも知れないが、後世のこの類のものよりも、よほど垢抜のしたところがあるためと考へられる。これも業平の歌と相通じる點ではあるまいか。

大和物語

伊勢物語によつて開かれた、歌とその逸話とを記した一體は、漸次進んで大和物語を出さしめた。大和物語は上下二卷、伊勢物語の如く、個々連絡のない多くの歌及びそれに關する説話を集めたものである。伊勢物語には、冒頭に大抵、「昔男ありけり」とあつて、主人公は何人であるか表面は不明であること、猶古今和歌集の贈答の歌の、一方が大抵、「よみ人しらす」であるのと同

様である。しかるにこの物語では、それらが大抵明かに記されてある。乃ち男の名と、そこに關係ある女の名とが、明瞭に分ることになつてゐる。ちやうど、後撰和歌集に、贈答の歌のいづれにも、作者の名が記されてあると共通してゐる。全體贈答の歌は、戀愛關係から出来る場合が多いのであるから、この場合には、人に知られぬ事を希望するのが通例である。この故に、伊勢物語にも、古今和歌集にも、なるべく省畧したものと見える。然るに時がたつて、感情中心生活が高潮して來ると、内密にした戀愛物語も、露骨にいひ交はされるやうになり、それに多大の興味をもつと共に、その贈答の歌も、あはれ深いものと感じられて來る。従つて、その作者を没するのは残念であるといふやうな具合で、憚りなく、その名を發表するやうになつた。であるから、この時代には、戀愛の事實が主となり、歌がむしろ従となつた形勢である。大和物語は、これをよく示してゐると思ふ。

大和物語の作者に就いては、二つの説がある。その(一)は、在原滋春の作であると云ふ。(二)は、花山院の御撰であると云ふ。この兩説ともに非難がある。それは、(一)の滋春の作と云ふのには確證がない。滋春は業平の子である。この物語の中に、この人の事があり、更に「かりそめのゆきかひぢとぞ思ひ來し」の歌があつて、これを詠んで死んだと書いてある。伊勢物語にも、業平

の「つひにゆく道とはかねて聞きしかど」の歌が最末にある。これは「心地しぬべくおほえければ」と云ふので、死んだのではない。であるから、伊勢物語は、猶業平の自記であるとも考へられるが、これは死んでしまつたのであるから、滋春の自筆と云ふことは出来ないのである。また別に、平安朝の物語には、後の源氏物語を紫式部が作つたから、子の大貳三位が狭衣物語を作つたと云ふ如き、親子相傳の云ひ傳へがある。これと同様に、或はその模範として、父の業平が伊勢物語を作つたから、子の滋春が大和物語を書いたと云ふならば、一層理由のない事である。(二)の花山院の御撰と云ふのも、確證がない。院は佛道を御修行になつた。それで、この物語の初めに、亭子の院の御讓位の事、次に御落飾の事、御修行の事を載せ、終りに遍照の「うつつし染の麻のけさなり」を記してある。これが、御心を籠められた御所爲であるであらうといふが、推測のみで徵證がない。従つて、(三)右の兩者を折衷して、先づ滋春が書き、次に花山院が補筆せられたと云ふのも、曖昧の言である。何か確然たるものが發見せられない限り、今日この作者の何人であるかは決定せらるべくもない。

然しこの物語製作の時代は、大畧推定せられる。それは篇中の人物の官位その他に據るのである。袋草紙に、先帝は延喜の帝であり、太政大臣は忠平であり、その外に兼盛、檜垣の姫等の歌

があるから、朱雀院の御時天慶の始め頃に出来たものと云ふ。北村季吟は、忠平は、朱雀天皇の承平六年に太政大臣になり、兼盛は、後撰集の頃から花山院の頃まで生存し、檜垣の姫は、天慶四年純友の騒の頃迄も居る。實頼も、文中に、「今の左大臣」とある。この人は、天慶年中に左大臣に任せられたのであるから、この物語は、その頃に出来たものであらうと云ふ。然るに賀茂真淵は、それに反対して、この物語の文は條々異なつてゐて、古へなのも後なのも交つてゐる。その時に従つて、「今の左大臣」などと書く事が常であるから、それによつて、製作の時代を極める事は出来ない。しかし、兼盛は天暦の頃に見え、花山院の時までも生存して居たであらうし、また文の詞も、歌も、圓融、花山、または一條の始め頃までの様に見えるから、製作はその頃であらうと云つて居る。この事も否定し難いのであるが、更に考へるのに、「今の左大臣」といふ實頼は、天慶十年四月に左大臣になり、天慶はその四月廿二日に改まつて、天暦となつたのであるから、「今の」の語は、天暦の領分に入るわけである。また文中に、師尹を「今の左兵衛督」と云つて居る。これも、天暦七年まで左兵衛督であつたのである。また藤原清蔭を「故大納言」と云つて居る。この人は、天暦四年になくなつたのであるから、これらを推して、この物語は、大抵天暦年中に出来たものであらうと思はれる。さうすると、花山院の御撰といふことは、自然

に消滅するわけである。

大和といふ名は、何に據つたのであるか。それには、從來三説ある。(一)は、大和は日本の總名であるから、日本の物語と云ふ意である。(二)は、大和とは大和歌の意で、大和はその畧であるから、歌物語といふ意である。(三)は、山城その他の事もあつたが、大和の事が多いから、かく名づけたのであると云ふ。これらを較べて見ると、(一)は支那に對して述べたので、日本書記等の如く對外的の意味にとれるが、正史は別として、はかないすさびの歌物語を、しか稱することがあるであらうか。(二)の大和歌の物語と言ふのは、或は當を得たものではあるまいか。「大和歌は人の心を種として」と貫之が書いてから、一般的にさういふ事となつたのであらう。(三)の大和國の物語といふのは、伊勢物語の如く、最初に大和の事が書いてある本があれば格別、特に重きを置くべくもない大和にあつた事件を本として、全體の名とするのはどうであらうか。これらによつて自分は(二)に據つて、大和歌物語の意に取りたいと思ふのである。

文體から見ると、單文が漸次重文になつてゐるので、この物語の文は、伊勢物語に比して著しく優雅になり。時にはその爲に冗漫に陥つてゐる。それは、伊勢物語にあるのと同じの説話を、また書いてあるのを比較して見れば、直ちに知れる。伊勢の直截的で、しかも含蓄的であるのに

對して、これの、演繹的で、説明的であるのは、著しい事實である。これは、恰も業平時代の歌と、後撰集及び拾遺集時代のそれらとの相違と、よく一致して居ると思ふ。

濱松中納言物語

濱松中納言物語は、菅原孝標の女の作と傳へられてゐる。これは更級日記の奥に、「常陸守菅原孝標の女の日記なり。母は倫寧朝臣の女、傳の殿の母上の姪なり。夜はのねざめ、みつの濱松、みづから悔ゆる、あさくらなどは、この日記の人の作られたるとぞ。」とあるその「みつの濱松」は、乃ちこの「濱松中納言物語」であつて、その名は「日の本のみつの濱松こよひこそわれを戀ふらし夢に見えつれ」から名づけたものと思はれる。

菅原孝標は、道眞の曾孫資忠の長男、孝標の女は乃ちその人の子である。孝標に妻は二人あつた。その一人が藤原倫寧の女で、かけるふ日記の著者乃ち藤原兼家の妻で、傳殿で通つてゐる道綱の母、及び歌人で名がある長能の兄弟である。道綱の母に大著があり、長能に秀吟がある關係から、その母の子である孝標の女にも、この作があるに到つたのであらう。しかし實際この物語

はこの人の作であるかといふのは研究に値するのであるが、故藤岡作太郎先生は、(一)作中に夢物語の多い事が、更級日記の夢の多いのと通じて居り、(二)源氏物語の摸倣の多いことが、孝標の女が、幼時源氏物語を耽讀して、その中の浮舟の山里にあるが如くなりたいと願つたなどと相通じてゐる。孝標の女がこの書の作者である證據はこゝにあるとせられてゐるのは、確實であらう。猶その上に、更級日記と同じく、感の極まつては、「後の位も何にかはせむ」と云つてゐるところなど、筆癖の類似さへ見えてゐるから、いよゝ／＼さうであらう。

この書は四卷あるが完本ではあるまい。その缺けたのは最初の二卷であらう。それを述べたのは黒川春村である。その理由は、今の本の發端は發端らしく思はれない。あまりに唐突な書振である。その上に拾遺百番歌合に載せてあるこの本の中の歌十五首の中、十三首は今の本にあるが二首は無い。(本書の終に、在他書缺物語歌とある中の「かきくらす涙は袖に」の歌と「愛しとだに思ひ出でじと」の歌とである。)その二首の詞書は、前のは「渡唐の舟に乗るとて都へ」であり、後のは「中納言唐に渡りて後さま／＼思ひくだけて」であるから、これは今の第一卷より以前の事であると思はれる。また風葉集に載せてある二十八首の中、十九首は今の本にあるが、九首はない。(本書の終に載せた他書にある歌の中の「いかばかり涙にくれて」から「ひとりしもあかさ

じと思ふ」の歌までののである。更にまた卷下に、「よし野よりいでて侍りける頃花のちるを見て濱松の帥宮中君」とあつて歌の缺けてゐるものもある。これは今の第四卷の中のみかと思はれるが、それらしいものもないから、猶最初の卷にあるべきであらう。これによつても、この書はもとは五卷で、第一卷は缺けて、今の本は完本ではあるまいと云ふのである。

以上に加へて、藤岡作太郎先生は、猶この本は第一卷のみならず、終の卷も、また散佚したのであらうと云はれてゐる。その理由は、無名草子にこの物語の事を述べて、「吉野山の姫君も、いとをしき人なり。式部卿宮にぬすまれて思ひあまるにや。中納言に告げさせ給へといへるこそ淺ましくいとをしけれ。」とあるのを見ると、古は、別に吉野の山の姫君が盗み去られたことを書いた末の卷があつたに違ひない。風葉集にある歌（卷末の在他書缺物語歌の中の「人を行方しらすなして歎き侍りけるころ尾花の風になびくを見て。濱松中納言『尋ねべき方しなければ』」云々のと、「何となく見なれ侍りける女を行方しらすなして侍りけるところにて月を見て。濱松中納言『思ひいづる人しもあらじ故郷に』」云々の歌を云ふ。）によつても、この事は考へられる。また「吉野よりいで侍りける頃花の散るを見て」とあるのも、末の卷の事らしく思はれる。これを首卷の中であらうと云つた春村の説は首肯せられないと云ふのである。

以上によると、今の本は首卷も缺け、また末の卷も缺けてゐるので、もとは六卷であつたのであらう。自分は無名草子に、「父官唐の親王に生れたる夢を見たる曉、宰相中將たづね来て『獨りしもあかさじと思ふ床のうらに思ひもかけぬ波の音かな』といふよりはじめ、唐土にいでたつことどもいといみじ」とあり、また「式部卿官唐の親王に生れ給へるを傳へ聞きて、夢にも見て、中納言唐へ渡るまではいとめでたし。」といふので、中納言の渡唐のことが初にあるのを考へ、また同書に大將の姫君の、

いかにしていかにかすべき歎きわび背けば悲しすめば恨めし

かゝれとてなでざりけむをむばたまのわが黒髪のうき末ぞ憂き

の歌によつて、大將の姫君が落飾した事があるのを考へて、首の卷の存在の傍證とし、また吉野山の姫君の、

しでの山こひわびつゝぞ歸り來し尋ねむ人を待つとせしまに

の歌によつて、姫君が式部卿宮に盗まれて後、死なうとして死に得なかつた事實を考へて、終の卷の存在の傍證としようと思ふ。

この書が六卷であつたとすると、その首の卷は存在しないのであるが、歌その他によつて想像

して見ると、ある宮の設けられた男子が一人ある。幼い頃その宮はなくなられたので、北の方はその子を連れて左大將に嫁せられた。その大將に數人の姫君があつた。これらが共に生長する中に、男は中納言にもなつた。こゝに式部卿官といふのがある。この人が大君を得んと望んだ。左大將はこれを許さうとしたが、北の方は、それを中納言に與へむと考へた。その中に、中納言は大君と遂に戀に落ちた。左大將はこれを憤つた。中納言は居た、まらずして、亡き父宮を戀しがつてゐると、父宮は、今は唐の帝の第三の皇子に生れ變つてゐられるといふ話を聞き、又夢をも見た。それで遂に渡唐の念を起して、三年の暇を乞うて日本を離れた。大君は頼むところを失つて尼となつてしまつた。これが首の巻の大意である。

次は本書中の第一巻にある通りである。乃ち中納言は無事に唐に著いた。朝廷に出ると、第三の皇子は、母后と共に高陽縣にあるといふ。中納言は其處へ尋ねて行く。この母后は、この後の父が、昔使して日本に渡り、時恰も九州に配流せられて薨ぜられた上野宮の姫君に契つて設けた子である。時の一の大臣の女一の後となつて勢が強いので、この母后は、帝の寵愛は深いのであるが、わざと避けて、この高陽縣に居るのである。中納言はこの人を見て、故郷の大君を忘れるほどになり、つひに契を籠めた。それで若君が一人出來た。一の大臣の五の君が中納言を戀しが

つたが、それに氣もとまらず。その中三年の期限が切れたので、中納言は、止むなく若君を伴つて日本に歸つて來た。

次は第二巻で、中納言は京に歸つて來て、大君と共に棲むこととする。左大將の憤りも靜まつてゐて、中納言の情況はよくなつてゐる。中納言は、唐の後から、實は依頼を受けて來てゐる。それは、后は日本の母を戀しがつて、入唐して歸つた聖に音信を傳へたが、返事がないので、更に中納言に手紙を託したのであつた。中納言は、それを果さむがために吉野に向つて行つた。

次は第三巻、渡唐して歸つた聖は、吉野の奥に行つてをり、后の母もそこにあつた。その母は唐の使に別れてから帥の宮に見せられて、女一人を設けた。しかし、遂に尼になつて、この山に籠つたのであつた。中納言はこの人々に面會して、唐土の事を云ふ。尼はその緣故で、姫君の事を中納言に頼んだ。

第四巻に移る。帝は中納言に承香殿女御の腹の姫君を賜はうとせられたが、中納言はこれを辭した。また吉野を訪うて見ると、恰も尼の臨終の時であつた。それで中納言は、姫君を迎へることとした。この時聖は、姫君の二十年になるまで、結婚してはいけぬと云つた。が中納言はともかくも迎へ出して、唐で設けた子を託し、唐の後の事をもこの人に告げた。その後空に聲が聞え

て、高陽縣の後の、この世の縁盡きて天に生れたといふ。間違ひかと聞くと、三度まで同じ聲が聞えたので、いよくそれは事實であると中納言は信じた。

式部卿宮は、大君を得ずして妹の姫君を得てゐたのであつたが、中納言が、山里から若い人を捜し出したと聞いて、どんな人か見たいものだと思つて居ると、恰も吉野の姫君は清水に忍んで籠つた。それを尋ねて宮は遂に見る事を得て、その美に打たれ、遂に率て隠したい氣になつた。

本書にはこゝまであつて後が無い。しかし前に述べたやうに、終の巻があつたに相違ない。それには、姫君は、遂に式部卿宮に隠されて、中納言は自失する、姫君は、死なうとして死に得ずまた煩悶する事となるのであるらしい。しかもまた唐の后が、その姫君の腹に宿るといふ事もあるらしい。それは無名草子に、「又かの后、吉野の宮の腹にやどりぬと夢に見えたるほどなど、みだりがはしく。」とあるので知られるのである。

梗概は以上の如くであるが、これを通覽すると、源氏物語以後の小説の大勢がよく知られる。元來源氏物語はその以前の物語の精粹を集めて大統合をし、それに一味清新の趣を加へたものであるから、この以上に出る事はむづかしくなつて來た。それは趣向に於いても文章に於いても同様である。で趣向としてその上に出るには、種々の變つた場面も作らねばならぬ。といつて、日

本としてのそれらは大方書き盡された。餘すところは外國である。波斯の國の事は、既にうつほが試みて居る。残つて居るのは支那である。考はそこに馳せねばならぬ。こゝを取るとすると、その因由を作らねばならぬ。故に中納言と大君との情事を作り出した。それでも相當の因由とはなるが、なほ輕過ぎる。やゝ重いものはないかと求めると、思ひ得たのは佛教で説く轉生説である。でこゝに、父宮と唐の皇子との關係を考へ出した。更にそれに値をつけるべく、その母后の、實は日本種である事を以てした。これらは中々巧みで後の徳川期の小説家の考へさうな複雑さである。これで場面は變り、舞臺は急に廣くなつた。當時の人は瞠目した事であらう。しかし著者は一度も渡唐しないのであるから、その描寫は極めて拙である。乃ち異國情調は更に現はれず。支那も純然たる日本で、たゞをりく唐めかしたる事があるのみである。中納言の歸朝以來は、ありふれた物語風となる。たゞ吉野の聖と尼とは、多少の異色があるが、これとても源氏の紫上に連なる尼君と聖との變形に過ぎぬ。吉野の姫君も異なつてゐるが、これも源氏の紫上の亞流らしく思はれる。ことに終の方は宇治の浮舟と同様であるかの如く見える。式部卿宮は匂宮を摸し、唐の后も藤壺を偲ばしめる。しかしこれらも全然摸倣でなく、その間に幾多の變化を求めてゐることは、なほ中納言渡唐當時の如くであるのは明かである。それに著者の才は明かに看取

せられる。乃ちこの物語の價値は、第一は場面の擴大、第二は趣向の變化と複雑とにある。然しその擴大も、變化も、複雑も、皆多くの無理を伴なつてゐる。殊に渡唐當時のに甚しい。無名草子に「あまりに唐と日本と一つに亂れあひたるほどまことしからず。」と云つてゐるのは、適評と思はれる。しかしまた同書に「はじめよからぬものは、いかなることも耳にも立たず。いみじきにつけて、はかなき事もかくこそ覺えけれ。」と云つて、それらの缺點も、實はい、から耳に立つのである。畢竟は「ねざめ、さごろもばかり、世の覺えはなかめれど、詞遣ひ有様をはじめ、何事も珍しく、あはれにもいみじくも、すべて物語を作るとならば、かくこそおもひよるべけれど覺ゆるものにて侍れ。」で類の少ない優秀の作であるとするのは、あまりの褒め過ぎである。ただ幼時から物語を耽讀した人の仕業と見えて、決して凡庸の作でなく、源氏物語以後注意すべきものであるといふことは、十分に證據立てられると思ふ。

無名草子

平安朝になつてから物語が多く出て、しかも盛を極めたのであるが、鎌倉時代及びその以後になつても、その餘波として猶續いてゐる。これらの是非巧拙を考へて、比較し評論する事は、必ず起つて來なければならぬ。無名草子は、これによつて出來たものである。

その比較評論は、先づ源氏から始まり、狹衣、ねざめ、みつの濱松(濱松中納言)、と進んで行く。その間に賞讃の辭も多々ある。ことに源氏は、源氏以後には源氏以上のものも出來るであらうが、源氏以前には、源氏にまさるものはない。紫式部の仕業は、凡夫とはおほえぬと云つて居る。しかし、狹衣には、源氏に次いでよいものであるが、とり立てて心に染むばかりの個處がない。ことに、その中、「大將のみかどになられたること、かへすくも見るしく、あさましき事なり。」と云ひ、次いでまた、「何のいたりなき女のしわざといひながら、むげに心おとりこそし侍れ。物語といふもの、いづれもまことしからずといふ中に、これは、殊の外なる事どもにこそあめれ。」と思ひ切つて罵つて居るのは、まことに痛快である。濱松には、「あまりに、唐土と日本と一つに亂れあひたるほど誠しからず。」と云つて居るのも適切である。

とりかへばやが次に來るが、別に云ふ如く、原本のとりかへばやと、今とりかへばやとに就いて精しく説いて居る。それには、「何事も、物まねびは必ず本には劣るわざなるを、これは、いと憎からず、をかしくこそあめれ。」と云つて、今本を賞讃してゐる。次いで、春宮の宣旨、蟹の刈

藻、末葉の露、露のやどり、うぢの河波、こまむかへ、緒絶の沼等に就いて述べてあるが、「なほ寢覺、狭衣、濱松ばかりなるこそ見侍らね。」と云つて、皆一蹴してゐる。次いで、うき波、枕の宮、有明のわかれ、夢路がたり、波路の姫君、淺茅が原の内侍の督もいいが、「いと恐ろしき事どもさしまじりて、何事もさむる心地するこそ、くち惜しけれ。」と云つて非難してゐる。すべて、平安朝以後のものにあまり價値を置いて居ない。

物語の評論は一轉して、歌のそれとなる。最初に萬葉集を擧げて、「心もことばも及び侍らす。」と賞讃してゐる。古今集も、かへすゝ結構である。後撰集は、餘りに神さび凄じいさまで、凡夫の心及び難いと云ふ。拾遺抄、拾遺集に就いても論じてゐる。又轉じて、千載集に入つて、これには、いい歌が多いが、あまりに人に遠慮したためか、つまらぬ歌も這入つてゐると、殘念がつてゐる。

歌集の撰述につけて、從來女の選者がないと云ふのから、女の評論に轉ずる。而して、小町、檜垣の御、清少納言、小式部内侍、和泉式部、宮の宣旨に及び、遡つて伊勢に到る。しかし、歌を詠むのみが能ではない。音楽にも名人がある。兵衛内侍などがそれである。が、盡きせず羨ましくめでたいものは紫式部である。それは、源氏の大著があるためであると云つて、本に返つて

話を終結する。而して、その餘波のやうに、清少納言が仕へた后宮定子、紫式部が仕へた上東門院彰子の御上を評する。次いで、皇太后宮(妍子)、大齋院、皇太后宮(歡子)の御逸事を語つて全體は終る。

かやうに、云ふところは物語、歌、音楽、及び人物の上に及んでゐるが、その主とするところは、物語である。他は、それに連絡のあるから説いたので、従であることは云ふまでもない。この物語の評論は、中々適確なところがあつて、物語を読むものは、必ず参照すべきであるし、また現存しないものも擧げてあるから、それに就いても、考ふべきである。從來歌の評論はあつたが、物語の評論は少ない。物語中に批評は散見するが、纏まつたものとしては、此の書を擧げねばならぬ。この書の作者は、無論分らない。時代は、黒川春村は應永頃であると云つて居るが、猶研究の餘地がありはしまいかと思ふ。

とりかへばや物語

平安朝末期になつて、趣向の變化を重んずる傾向に乗じて出て來た物語の中に、とりかへばや

がある。濱松中納言もこの系統に属するものであるが、これはまた、不思議な構想、不合理な變轉を求めて、讀者をして駭目せしめむとして居る。そのために、不快な感をも抱かせて、主要な人物にも同情を寄せる事が出来なくなるほどであるが、これも、低劣な作者には出来ぬ仕事であるから、必ず才氣縦横な何人かが作つたものであらう。

この作者の何人であるかは、今日では推測も出来ない。また、それに對する論議も聞かない。しかしその内容は、大體左の如くである。

何時の頃か、權大納言で大將を兼ねた人がある。異腹の子が二人ある。その中の一人の男君は女の如く、女のする事を好み、他の一人の女君は男のやうで、男の仕業を嗜む。親はこれを「とりかへばや」と思つたと云ふので、この書名は出来たのである。

その中に、男女の子どもは生長して、男の女君は宣耀殿の尙侍となり、女の男君は、累進して右大將ともなつた。この二人の君の父君の兄に右大臣がある。この人その女の四の君を愛して、婿えらみして、遂に大將を婿にした。大將の舉動は極めて平靜で、月に一度は四五日乳母の家に行く。この頃、朱雀院は女一宮を愛して東宮とし、宣耀殿尙侍を後見とせられたが、尙侍實は男であるので、遂に東宮と通することとなつた。

こゝにまた、式部卿宮の御子に中納言がある。ある時大將を訪ふと、不在であつたので、四の君を挑んで、四の君は爲に懷妊することとなる。大將はこれを知つて、世を憂く思ふやうになると、こゝに、先帝の三の皇子の、渡唐してかの國の一大臣の女の婿となつて、二人の女を設けられたが、妻のなくなつた後に、歸朝したところ、謀叛といふ噂があるので、吉野に隠れて居られたのがある。大將はこゝに尋ねて往つて、しみじみと語り、姫君とも歌の贈答をする。その中に、四の君は女子を生んだ。

中納言は、尙侍をも思ひかけて居た。ある暑い日に、大將に媒を頼むべく尋ねて來ると、大將がすゞしの單衣を着て居るので、始めて女たる事を發見してこれを挑んだ。それで、大將は懷妊することとなる。中納言は、大將に女の装にかへれと勧める。爲に大將は吉野宮に行き、また親四の君、尙侍などに、それとなく別を告げて、中納言の宇治の隠棲に逃れて女の姿になる。大將が失せられた。それは四の君が、中納言と通じたためであると書いて落したものがあつた。母君が見つけて父君に見せる。父君ははじめて知つて、驚いて四の君を勘當する。

大將は女に還つて宇治に居ると、尙侍は、その行方を探さうと、母に告げて男の姿にかへり、吉野に赴く。その途中に宇治を通つて、大將を見る。が、姿が變つたとは思ひかけないので、知

る由もなく、吉野に行つてしまふ。大將は宇治で男子を生んで、手紙を吉野におくる。それを尙侍は讀んで大將の所在を知つた。それで尋ねて行つて、兄妹再會する事となり、こゝに尙侍は大將、大將は尙侍となつて、大將は京に、尙侍は吉野に行く。それを知らず、女が失せてしまつたと中納言は悲歎する。その中、大將は京に歸つて、契を四の君に結ぶ、帝は尙侍と契り給ふ。大將は、吉野の二人の姫君を京に迎へる。而して、中納言にその妹の姫君を與へることにする。東宮は、さきの尙侍の子を生んで女院となられ、尙侍は中宮となり、その生んだ若宮が東宮となられ、人々皆榮達する。

以上は、今日吾人の目に觸れて居るとりかへばや物語の梗概であるが、これが原本のまゝであるかどうかには就いては、疑ひがある。それを述べたのは、先づ無名草子である。それには、とりかへばやは「つゞきもわるく、物恐ろしくおびたゞしき氣したる物さま、中々いと珍しくこそ思ひよりのためれ。」と云つて、餘り賛成してゐないのであるが、反對に、「今とりかへばやとて、いたきものの今の世に出で來たる。」とか「今とりかへばやなどの、もとにまさり侍るさまよ。」などと云つて、今の本のことを云ひ、それを賞美してゐるのである。而して、原本には、「四の君こそいみじけれ、あらまほしくよき人にて侍り。」とか「また内侍のかみの男になりて、後の人がら

こそよけれ。」とか云つてあるが、現行の本では、四の君もいみじくもなく、また尙侍が男になつても、別によくもない。卻つて今の本を評して、「四の君ぞ、これにはにくき。」と云ひ、また「本には、女中納言のありさまいと憎きに、これは何事もいとよくこそあれ。」と云つてあるのに適合するやうである。これらを擧げて來れば猶あるが、大體此の草子の、今とりかへばやの評語を通して見た本と、現行の本とは一致するやうに見える。黒川春村は、風葉集に載せたこの本の歌の有無から考へて、今本の卷の一のはじめの二十葉ばかりは古とりかへばや、その以下は、皆今とりかへばやである事が瞭然であると云ふのであるが、歌の有無のみで、新本古本の判定はし難いであらう。何となれば、時とともに歌の書き落され、また歌と文と共に漏される場合も生ずる。現に今のとりかへばかやには、文のつゞきの悪いところも見えて、脱漏の感のあるのがある。それを考へると、内容にも回頭して、無名草子の評語を本にして見た本と、現行の本との一致によつて、現行の本を今とりかへばやとして誤りはないであらうと思ふ。

此の物語の製作の時代に就いては、春村は「古とりかへばやは、狹衣などにさしつぎて出て來しものか。百番歌合、金葉等に載せたれば、いづれも、鎌倉以前のもところおほゆれ。今とりかへばやは、鎌倉の中頃なるべし。詞づかひの古からぬを見ても、さやうにはおほゆるぞかし。」

と云つて居る。この説は、恐らくは當つて居るであらう。しかし鎌倉の中頃と云ふのは、どうであらうか。猶研究を要するであらう。

堤中納言物語

堤中納言物語は、藤原兼輔の作と傳へられてゐる。兼輔は利基の子で、延長四年に權中納言となり、承平三年に薨じた。歌に巧みであつて、家集が一卷ある。この人の^九策が加茂川の堤のそばにあつたので、世に堤中納言と云つたといふ。しかしこの人が、この書の著者であるといふ徴證はなく、卻つてそれならぬ事實が発見せられる。それはこの書の内容によつてである。

この書は、十種の短篇から出来て居る。が、この十種が各異なつた趣を持つてゐて、他の書に見えぬ味がある。就中花櫻折る少將が、女を取らうとして間違つて老尼を奪うたり、蟲めづる姫君が不氣味な蟲好みをしたり、はいすみの女が狼狽して異様な化粧をしたり、よしなしごとの法師がいろ／＼の異^九つた品を女に注文したりする等は、特に滑稽味の深いものである。滑稽は竹取物語以來諸種の物語に散見するが、短篇の形で數多あるのは、これが始まりであらう。この類

は、恐らくは女のよくせざるところであらう。従つて作者は、多分男であらう。しかし、この男が兼輔であるとは云はれない。

猶これらの短篇は、伊勢物語の作りかへたのもあり、源氏物語から脱化したものもある。故にこれが、源氏物語以後のものたるは明かである。「逢坂越えぬ權中納言」に菖蒲の根合のことがある。この根合は、赤染衛門集にあるのが最初であるらしいから、これも赤染衛門在世後の著を證する。随つてこの書は、寛弘以後の作と考へられる。これによつても、承平年中に薨じた兼輔の手になつたものといふ事は出来ぬ。恐らく院政時代に這入つてからの何人かの作であらう。

猶この書の堤中納言といふ名を冠するに至つた動機は、考へて見る必要がある。これは前に述べた如く、堤中納言の作と傳へては居るが、某々物語といふのは、大抵その人の事跡を、他人が傳へたから起るのである。さうすると、この物語は堤中納言の事跡を書いたものといふ事ともなるであらう。しかしその中納言兼輔には、家集を見ても、すこしも書中にある如き事跡は見當らぬ。従つて、この書名は出さうには思へない。

然るに後撰集に、

女のもとに遣しける

伊尹朝臣

人しれぬ身は急けども年をへてなど越えがたき逢坂の關

かへし

小野好古朝臣女

東路にゆきかふ人にあらぬ身はいつかは越えむ逢坂の關

とある。この伊尹の家集（一條攝政集）には、女と通じて居たのを親のやかましくいふと聞いて、まだ關係はないといふ意を書いてやると云つて、この前の歌があり、次にこれを親の「この事知れる人の見せければ、おもひなほりてかへりごと書かせけり。」と云つて、次の歌がある。更に宇治拾遺物語には、女の母は許したが、父が許さぬので、母が心配して、まだ無關係の意味を書いてくれと云つたので書くとして、前の歌がある。次にそれを父に見せると、父は、さては虚言であつたかと云つて、自分で返歌を書いたと云つて、次の歌がある。これによつて見ると、事柄はすこし違ふが、意味は一つで、ともにこの逢坂を越えぬと云ふ歌が當時の話柄に上つたものと思はせる。この伊尹は後に一條攝政と云はれて有名になつた人であるが、康保四年正月に權中納言になつてゐる。女の親は、家集でも、宇治拾遺物語でも不明であるが、後撰集によると、小野好古である。好古は安和元年に歿してゐる。安和元年は乃ち伊尹が權中納言になつた翌年である。伊尹が、此の人の女に通つたのは、何年か不明であるが、もし康保四年からであるとすると、ちや

うど、好古が在世中、伊尹が權中納言で逢坂を越えぬ歌を詠んだ事となる。しかもそれが有名であるとする、伊尹は異名を「逢坂越えぬ權中納言」といはれたかも知れない。しかし伊尹は、それから官位がどんく昇つて、遂に攝政になり、太政大臣にまでなつたのであるから、この權中納言といふことは、自づから消滅してしまつて、一條攝政の名で喧傳せられたのであらう。

それで「逢坂越えぬ權中納言」の異名は、その持主を失つた形になつてゐる中、遂に貫之らと歌の贈答までした有名な兼輔乃ち堤中納言に附會せられてしまつたのであらう。そして、今の堤中納言物語の十種の短篇中、比較的重要な形をしてゐる「逢坂越えぬ權中納言」の一篇も、その人の事を書いたものと、内容をもよく見ない人が決定してしまつて、遂にこの諸短篇の總名となるに到つたのであらう。この事は極めて當て推量であるが、思ひ附いたまゝを記して、後の考を俟つこととする。

解題 畢

竹
取
物
語

○まじりて 分け入りて。
 ○萬の事につかひけり。色々の器を造れり。
 ○本光る幹の光る。
 ○美しくて 可愛らしくて。
 ○こ 我が子。
 ○よごごに 節と節との間ごごに。
 ○すく／＼と すんすんご。
 ○よきほどなる人 普通の大きさの人。
 ○髪上 童形の放ち髪を改め、髪を結び上げるごご。
 ○さたし 取定め。
 ○裳著 裳を著る儀式。
 ○いつきかしづき養ふ 大切に養育す。
 ○けうら 清ら。

竹取物語

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹を取りつゝ、萬の事につかひけり。名をば讚岐造麻呂となむいひける。その竹の中に、本光る竹ひとすぢありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しく居たり。翁いふやう、「われ朝ごと夕ごとに見る竹の中に、おはするにて知りぬ。こになり給ふべき人なめり。」とて、手にうち入れて家に持ちて來ぬ。妻の姫にあづけて養はす。美しきこと限りなし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。竹取の翁、この子を見つけて後に、竹をとるに、節を隔ててよ毎に、金ある竹を見つくること重りぬ。かくて翁やう／＼豊になり行く。この兒養ふ程に、すく／＼と大きになりまざる。三月ばかりになる程に、よき程なる人になりぬれば、髪上などさだして、髪上させ裳著す。帳の内よりも出さず、齋きかしづき養ふほどに、この兒の容けうらなること世になく、家の内は暗きところなく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しきことも止みぬ。腹立たしきこ

- 勢猛の者 富み榮えて勢ある者。
- 赫映姫 照り輝きて美しき姫。
- うちあけ 酒宴をして。
- かしこく 甚しく。
- 世界 天下。
- 音に聞きめめて 評判に聞き惚れて。
- 居る人 家の人。
- 垣間見 こつそり見る。
- よほひ 呼びの延音。情人に忍び行く。
- 人の物ともせぬ處 人の居らない所。
- 事ともせず 相手にしない。
- おろかなる人 戀心の淡い人。
- よしなかりけり 甲斐なし。
- いひける 言寄る。

とも慰みけり。翁竹をとる事久しくなりぬ。勢猛の者になりけり。この子いと大きになりぬれば、名をば三室戸齋部秋田を呼びつけさす。秋田、なよ竹の赫映姫とつけつ。此のほど三日うちあけ遊ぶ。萬の遊びをぞしける。男女きはす呼び集へて、いとかしこく遊ぶ。

世界の男、貴なるも賤しきも、いかで、この赫映姫を得てしがな見てしがなと、音に聞きめめて惑ふ。そのあたりの垣にも家の外にも居る人だに、容易く見るまじきものを、夜は安き寝もねず、闇の夜に出でても穴を抉り、こゝかしこより覗き垣間見まどひあへり。さる時よりなむ、よばひとはいひける。人の物ともせぬ處に惑ひ歩けども、何の驗あるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はむとて、いひ懸くれども、事ともせず。あたりを離れぬ公達、夜を明し日を暮す人多かり。おろかなる人は、益なき歩行はよしなかりけりとて来ずなりにけり。その中に猶いひけるは、色好といはるゝかぎり五人、思ひ止む時なく、夜晝來けり。その名、一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂、只この人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きては、見まほしうする人々なりければ、赫映姫を見まほ

- たゞすみ うろつき。
- わび歌 侘歌。思ひあまつて作れる歌。
- かへし 返歌。
- 降りこほり 雪の降り水の凍り。
- 照りはたゞく 照りつく。
- さはらず 係らず。
- なさぬ子 生まぬ子。
- 思ひやめむ 姫を慕ふ心を断念せん。
- さりとも 翁は断りしも。
- 男合せ 婿を取る。
- 志を見えありく 自分の深き思を見せ歩く。
- 我子の佛 我子よ。
- 門も廣くなり 一家も繁榮する。
- なでふ なんて。

しうして、物も食はず思ひつゝ、かの家に行きて、竹み歩きけれども、かひあるべくもあらず。文を書きてやれども、返り事もせず、わび歌など書きて遣れども、返しもせず。效なしと思へども、十一月十二月の降りこほり、六月の照りはたゞくにもさはらず來けり。この人々、ある時は竹取を呼び出でて、「娘を我に賜べ。」と伏し拜み、手を擦り宣へど、「己がなさぬ子なれば、心にも従はずなむある。」といひて、月日を過す。かゝれば、この人々家に歸りて物を思ひ、祈をし、願を立て、思ひやめむとすれども止むべくもあらず。さりとも遂に男合せざらむやはと思ひて、頼をかけたたり。強ちに志を見えありく。これを見つけて、翁、赫映姫にいふやう、「我が子の佛變化の人と申しながら、こゝら大きさまで養ひ奉る志疎ならず。翁の申さむ事聞き給ひてむや。」といへば、赫映姫、「何事をか宣はむ事を承らざらむ。變化の者にて侍りけむ身とも知らず、親とこそ思ひ奉れ。」といへば、翁、「嬉しくも宣ふものかな。」といふ。翁、年七十に餘りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女に合ふことをす、女は男に合ふことをす、その後なむ門も廣くなり侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさむ。赫映姫のいはく、「なでふさる事かし侍らむ。」といへば、「變化の人といふとも、女の身もち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいますかりな

○かうても云々 此儘であられようが、死んだ後の事を思へば。
 ○この人々 五人達、一人々々 其の中誰か一人。
 ○よくもあらぬ容美しくもない自分。
 ○深き心云々 男の深志も解らず且不實の心でも起つたらは。
 ○人の志 五人の志。
 ○ゆかしき物 私の見たいと思ふ物。
 ○うけつ 承知せり。
 ○例の 例の如く。
 ○唱歌をし 音楽に合せて歌ひ。
 ○うそを吹き 口笛を吹き。
 ○ものし 来り。
 ○極りたるかしこまりを申す 非常に恐縮に存す。

むかし、この人々の年月を経て、かうのみいましたつ、宣ふ事を思ひ定めて、一人々々にあひ奉り給ひね。」といへば、赫映姫曰く、「よくもあらぬ容を、深き心も知らで、あた心つきなば、後悔しき事もあるべきをと思ふばかりなり。世のかしこき人なりとも、深き志を知らではあひ難しとなむ思ふ。」といふ。翁曰く、「思ひの如くも宣ふかな。そもく如何やうなる志あらむ人にかあはむと思す。かばかり志疎ならぬ人々にこそあめれ。」赫映姫のいはく、「何ばかりの深きを見むといはむ。いさ、かの事なり。人の志ひとしかなり、いかでか中に劣勝は知らむ。五人の人の中にゆかしき物見せたまへらむに、御志勝りたりとて仕うまつらむと、そのおはすらむ人々に申し給へ。」といふ。「よき事なり。」とうけつ。日暮る、ほど、例の集りぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或は唱歌をし、或はうそを吹き、扇をならしなどするに、翁出でて曰く、「辱くもきたなげなる所に、年月を経てもし給ふこと、極りたるかしこまり。」と申す。「翁の命けふ明日とも知らぬを、かく宣ふ君達にも、よく思ひ定めて仕うまつれ。」と申せば、「深き御心を知らでは。」となむ申す。「さ申すも理なり。いづれ劣勝おはしまさねば、ゆかしきもの見せ給へらむに、御志の程は見ゆべし、仕うまつらむ事は、それになむ定むべき。」といふ。「これよき事なり、人の恨

○佛の御石の鉢 南山住持威應傳に「世尊初成道、時四天王奉佛石鉢、唯世尊得用餘人不能持、如来滅後安鷲山、與白毫光共爲利益。」
 ○蓬萊 三神山の一。
 ○火鼠の裘 石綿で作れる衣。
 ○子安貝 たから貝の類。安産に用ふ。
 ○聞ゆるやうに 申上げる様に。
 ○上達部 公卿。
 ○おいらかに云々 こんな難題を課すよりも姫の近所をも歩くなむ程かに宣はぬか。
 ○倦じて うんざりして。
 ○世にあるまじき 生くまじき。
 ○したくみ 計畫。

もあるまじ。」といへば、五人の人々も、「よき事なり。」といへば、翁入りていふ。赫映姫、「石作皇子には、天竺に、佛の御石の鉢といふ物あり、それをとり賜へ。」といふ。「車持皇子には、東の海に蓬萊といふ山あり。それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ。」といふ。「今一人には、唐土にある火鼠の裘を賜へ。大伴大納言には、龍の首に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ。石上中納言には、燕のもたる子安貝一つ取りて賜へ。」といふ。翁、「難き事どもにこそあめれ、此の國にある物にもあらず。かく難き事をばいかに申さむ。」といふ。赫映姫、「何か難からむ。」といへば、翁、「とまれかくまれ申さむ。」とて、出でて、「かくなむ。聞ゆるやうに見せ給へ。」といへば、皇子達、上達部聞きて、「おいらかに、あたりよりだにな歩きそとやは宣はぬ。」といひて、倦じて皆歸りぬ。
 「猶この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物も持て来ぬものかはと思ひめぐらして、石作皇子は心のしたくみある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千萬里のほど行きたりとも、いかでか取るべきとおもひて、赫映姫の許には、今日なむ天竺へ石の鉢とりにまかると聞かせて、三年ばかり経て、大和國十市郡にある山寺に、賓頭盧の

○賓頭盧 白頭長眉、十六羅漢の首。
○ひた黒 眞黒。
○みいしの鉢の云々 石鉢を求めんきて

血涙を流す程苦心す
○螢ばかり 露ばかり。

○小倉山 大和國十市郡にあり。小倉に小暗を掛けて玉に光なきを指す。

○しら山 白山の如き光あるかぐや姫。

○面なきこと あつかましい事。

○心たばかり 思慮。

○公 朝廷。

○筑紫 九州。

○近う仕うまつる限して 近侍の者だけ連れて。

○おはしましぬと 遠く旅立ちしと。

前なる鉢のひた黒に煤づきたるを取りて、錦の袋に入れて、作花の枝につけて、赫映姫の家にもて来て見せければ、赫映姫あやしがりて見るに、鉢のなかに文あり。ひろけて見れば、

海山のみにこゝろをつくしはてみいしの鉢のなみだ流れき
赫映姫、光やあると見るに、螢ばかりの光だになし。

おく露のひかりをだにぞやどさまし小倉山にてなにもとめけむとて、かへし出すを、鉢を門に棄てて、この歌の返しをす。

しら山にあへば光のうするかとはちを棄ててもたのまるゝかな

とよみて入れたり。赫映姫返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、いひ煩ひて歸りぬ。かれ鉢を棄てて又いひけるよりぞ、面なきことをば、はちを棄つとはいひける。

車持皇子は、心たばかりある人にて、公には、筑紫國に湯あみに罷らむとて、暇まうして、赫映姫の家には、玉の枝とりになむまかるといはずして下り給ふに、仕うまつるべき人々、みな難波まで御送しけり。皇子、いと忍びてと宣はせて、人も數多率ておはしまさず、近う仕うまつる限りして出で給ひぬ。御送の人々、見奉り送りて歸りぬ。おはしまし

○漕ぎ歸り 難波へ。
○内匠 宮中の工匠。
○構を三重にしこめて 作りを三重にして其中に家を設け。
○知らせ云々 皇子の知行所十六箇所。
○かみにくごをあけて 悉く入費に用ひての意か。
○かしこくたばかり 上手に工夫して。
○殿 皇子の家。
○優曇華 瑞應。三千年に一回花開く。
○まけぬべし 従はざるべからず。
○いたづらに身は云云 假令我が身を無きものにしても。
○更に 決して。
○これをも 玉の枝は勿論此歌をも。
○あはれ 感心して。

ぬと人に見え給ひて、三日許りありて漕ぎ歸り給ひぬ。かねて事みな仰せたりければ、その時一の工匠なりける内匠六人を召しとりて、容易く人寄り來まじき家を作りて、構を三重にしこめて、工匠等を入れ給ひつゝ、皇子も同じ所に籠り給ひて、知らせ給ひつるかぎり十六所をかみにくごをあけて、玉の枝をつくり給ふ。赫映姫のたまふやうに違はず、つくり出でつ。いとかしこくたばかりて、難波に密にもて出でぬ。船に乗りて歸り來にけりと殿に告げやりて、いといたく苦しげなる様して居給へり。迎へに人多く参りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物覆ひて持ちて参る。いつか聞きけむ、「車持皇子は、優曇華の花持ちてのほり給へり。」とのゝしりけり。これを赫映姫聞きて、我はこの皇子にまけぬべしと、胸つぶれて思ひけり。かゝる程に、門を叩きて、「車持皇子おはしましたり。」と告ぐ。「旅の御姿ながらおはしましたり。」といへば、逢ひ奉る。皇子のたまはく、「命を捨てて、かの玉の枝持ちてきたり。」とて、「赫映姫に見せ奉り給へ。」といへば、翁もちて入りたり。この玉の枝に文をぞつけたりける。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を手折らで更に歸らざらまし
これをも哀れと見て居るに、竹取の翁走り入りていはく、「この皇子に申し給ひし蓬萊の

○何をもちてか云々
何とてこやく申
されようか。
○我が御家 皇子自
身の家。
○頬杖をつきて ほ
ほ杖をついて。思案
する貌。
○何かと かれこれ。
○いふまゝに 言ふ
や否や。
○人さま 皇子の人
柄。
○ひたぶるに ひた
すらに。
○あさましく 意外
にも。
○ねたく 口惜しく。
○闇の内しつらひ
寝室内の用意。
○空しき風 頼みな
き風。
○いかゞはせん 致
方なし。

玉の枝を、一つの所もあやしき處なく、あやまたずもおはしませり。何をもちてか、と
かく申すべきにあらず、旅の御姿ながら、我が御家へも寄り給はずしておはしましたり。
はやこの皇子にあひ仕うまつり給へ。」といふに、物もいはず頬杖をつきて、いみじう歎か
しげに思ひたり。この皇子、今さら何かといふべからずといふまゝに、縁にはひのほり給
ひぬ。翁ことわりに思ふ。「この國に見えぬ玉の枝なり。この度はいかでかいなみ申さむ。
人さまもよき人におはす。」などいひ居たり。赫映姫のいふやう、「親の宣ふ事を、ひたぶる
にいなみ申さむことのいとほしさに、得がたきものをゆかしとは申しつるを、かくあさま
しく持て來ることをなむ、ねたく思ひ侍る。」といへど、なほ翁は闇の内しつらひなどを
翁、皇子に申すやう、「いかなる所にか、この木はさぶらひけむ、怪しく麗しくめでたきも
のにも。」と申す。皇子答へて宣はく、「一昨々年の二月の十日比に、難波より船に乗りて、
海中に出でて、行かむ方も知らず覺えしかど、思ふこと成らでは、世の中に生きて何かせ
むと思ひしかば、たゞ空しき風に任せてありく。命死なばいかゞはせむ、生きてあらむ限
りはかく歩いて、蓬萊といふらむ山にあふやと、浪にたゞよひ漕ぎありきて、我が國の内
を離れて歩き廻りしに、ある時は浪荒れつ、海の底にも入りぬべく、ある時は風につけて

○まぎれむとし 迷
はんとし。
○旅の空に 旅行中。
○むくつけけなるも
の 恐しき者。
○辰の刻 午前八時。
○舟のうちをなむせ
めて見る 舟中より
強ひて見る。
○漂へる 立てる。
○指し廻らして 漕
ぎ廻つて。
○ほうかむるり 寶
嵌瑠璃。
○そはづら 組面。
崖べり。
○宣ひしに 違はまし
かは 御注文に 違つ
たらはわるからうと
思つて。

知らぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で來て殺さむとしき。ある時には來し方
行末も知らず、海にまぎれむとしき。或時には糧盡きて、草の根を食物としき。ある時に
はいはむ方なくむくつけけなるもの來て、食ひかゝらむとしき。ある時には海の貝を取り
て命をつぐ。旅の空に助くべき人もなき所に、いろ／＼の病をして、行方すらも覺えず、
船の行くに任せて、海に漂ひて、五百日といふ辰の刻許に、海の中に遙に山見ゆ。舟のう
ちをなむせめて見る。海の上に漂へる山いと大きにてあり。その山の様高くうるはし。こ
れや我が覓むる山ならむと思へど、さすがに畏しく覺えて、山の圍りを指しめぐらして、
二三日許り見ありくに、天人の粧ひしたる女、山の中より出で來て、銀の鏡をもて水を
汲みありく。これを見て船よりおりて、「この山の名を何とか申す。」と問ふに、女答へて曰
く、「これは蓬萊の山なり。」と答ふ。これを聞くに嬉しき事限りなし。この女に「かく宣ふ
は誰ぞ。」と問ふ。「我が名はほうかむるり。」といひて、ふと山の中に入りぬ。その山を見る
に、更に登るべきやうなし。その山のそばづらをめぐれば、世の中になき花の木ども立て
り。金銀瑠璃色の水流れ出でたり。それにはいろ／＼の玉の橋渡せり。そのあたりに照り
輝く木ども立てり。そのなかに、この取りて持てまうで來たりしは、いとわろかりしかど

○さらに心もさなく
て ひとすりに歸り
たくなつて。
○こち こちらへ。
○うち歎きて 大に
感じて。
○吳竹のよの枕詞。
○よの 永年の間。
○さやはわびしき云
云 皇子の如き苦し
き事を味ひたること
なし。
○こらの日頃 永
の年月。
○わびしさのちぐさ
の數 色々様々の惱
の種。
○文挾 ふづゑ。五
尺位の白木の枝の上
端に金物をつく。
○作物所 養中の調
度等を細工する所。
○けい 妻子。妻子
奴僕達。

も、宣ひしに違はましかばとて、この花を折りてまうできたるなり。山は限りなくおもしろし。世に譬ふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さらに心もとなくて、船に乗りて追風ふきて、四百餘日になむまうで來にし。大願の力にや、難波より昨日なむ都にまうで來つる。さらに潮に濡れたる衣をだに脱ぎかへなでなむ、こちまうで來つる。」と宣へば、翁聞きて、うち歎きてよめる。

吳竹のよのたけとる野山にもさやはわびしき節をのみ見し
これを皇子聞きて、「こらの日比思ひわび侍りつる心は、今日なむ落ち居ぬる。」と宣ひて、かへし、

わが袂けふかわければわびしさのちぐさの數もわすられぬべし
とのたまふ。かゝるほどに、男ども六人連ねて、庭に出できたり。一人の男、文挾に文をはさみて申す。「作物所の寮のたくみ漢部内麻呂まをさく、玉の木を作りて仕うまつりしこと、心を碎きて、千餘日に力を盡したること少からず。しかるに祿いまだたまはらず、これを賜はりて分ちて、けごに賜はせむ。」といひて捧げたり。竹取の翁、この工匠等が申すことは何事ぞと、かたぶきををり、皇子は、われにもあらぬ氣色にて、肝消えぬべき心地し

○かたぶき 不審がつて。
○我にもあらぬ氣色 氣が氣でない様子
○かしこき 大層な。
○これをこの比云々 この頭祿を得ん事に就き考へ居れば。
○御使 御側女。妾。
○要じ 求め。
○この官 姫官。
○賜はるべきなり 戴くべき物なり。
○笑み榮えて 嬉し
けになりて。
○さだかに 確に。
○心ゆきはてて 心
まつはりして。
○さすがに覺え云々 流石に面目なく思
ひて目を閉じてゐた
○はした 具合わる
く。
○うれへ 愁訴。

てゐるたまへり。これを赫映姫聞きて、この奉る文を取れといひて見れば、文に申しけるやう、

皇子君千餘日いやしき工匠等と諸共に、同じ所に隠れ居給ひて、かしこき玉の枝を作らせ給ひて、官も賜はむと仰せ給ひき。これをこの比案するに、御使とおはしますべき赫映姫の要じ給ふべきなりけりと承りて、この宮より賜はらむと申して、賜はるべきなり。

といふを聞きて、赫映姫、暮るゝまゝに思ひわびつる心地笑み榮えて、翁をよび取りていふやう、「誠に蓬萊の木かそこそ思ひつれ。かくあさましき虚事にてありければ、はや疾くかへし給へ。」といへば、翁答ふ、「さだかに造らせたる物と聞きつれば、かへさむこといと易し。」と諸きををり、赫映姫の心ゆきはてて、ありつる歌のかへし、

まことかと聞きて見れば言の葉をかざれる玉の枝にぞありける
といひて、玉の枝も返しつ。竹取の翁さばかり語らひつるが、さすがに覺えて眠りをり。皇子は、立つもはした、居るもはしたにて居たまへり。日の暮れぬれば、すべり出でたまひぬ。かのうれへせし工匠等をば、赫映姫呼びすゑて、嬉しき人どもなりといひて、祿い

○ちようぜさせ 打擲せしめ。
 ○たゞ一所只一人。
 ○官司官家の役人。
 ○御供に云々 世人には無論家来にも恥ぢて身を隠さんにて。
 ○たまさかる 魂離る。茫然たる貌。
 ○家廣き 家族多き。
 ○仕うまつる人の中に 家来の中で。
 ○人をつけて 人に文を託して。
 ○かの浦 筑前博多浦。
 ○とらす 與ふ。
 ○商 商賈。取引。
 ○たまさかた 稀に。
 ○もて渡り 産地から持つて行く。
 ○もし長者の云々 あるべき富豪を訪ねて若し無ければ。
 と多くとらせたまふ。工匠等いみじく喜びて、思ひつる様にもあるかなといひて、かへる道にて、車持皇子血の流るゝまでちようぜさせ給ふ。祿得しかひもなく、皆とり捨てさせ給ひてければ、逃げうせにけり。かくて、この皇子、一生の恥これに過ぐるはあらず。女を得ずなりぬるのみにあらず、天の下の人の見おもはむことの恥かしき事と宣ひて、たゞ一所深き山へ入りたまひぬ。官司さぶらふ人々、皆手を分ちて求め奉れども、身まかりもやし給ひけむ、え見つけ奉らずなりぬ。皇子の御供に隠し給はむとて、年比見え給はざりけるなりけり。是をなむ、たまさかるとはいひ始めける。
 右大臣阿倍御主人は、財豊に家廣き人にぞおはしける。その年わたりける唐土船の王卿といふ者の許に、文を書きて、火鼠の裘といふなるもの買ひておこせよとて、仕うまつる人の中に、心たしかなるを選びて、小野房守といふ人をつけてつかはす。もていたりて、かの浦に居る王卿に金をとらす。王卿文をひろけて見て、返り事かく。
 火鼠の裘、我が國になきものなり。音には聞けども、いまだ見ぬものなり。世にある物ならば、この國にももてまうで來なまし。いと難き商なり。然れども、若し天竺にたまさかにもて渡りなば、もし長者の邊にとぶらひ求めむに、なき物ならば、使

- 使 小野房守。
- まうで來て云々 唐土より歸來して都へ上る。
- あゆみ疾うする馬 早く走る馬。
- 馬に乗りて 房守が。
- この國 唐土。
- 西の山寺 唐土の西方のある山寺。
- 國司 其所の地方官。
- 使 王卿の下使。
- 物 金。
- 質 代物。
- 今金少しの事 金は五十兩さいふも少し位の事。
- 嬉しくして 嬉しくも搜して。
- いろへ 彩色し。
- うべ 道理で。

に添へて金をば返し奉らむ。
 といへり。かの唐土船來けり。小野房守まうで來てまう上るといふことを聞きて、あゆみ疾うする馬をもちて、走らせ迎へさせ給ふ時に、馬に乗りて、筑紫よりたゞ七日に上りまうで來たり。文を見るに、いはく、
 火鼠の裘、辛うじて、人を出して求めて奉る。今の世にも昔の世にも、この皮は容易くなきものなりけり。昔かしこき天竺の聖、この國にもて渡りて侍りける、西の山寺にありと聞き及びて、公に申して、辛うじて買ひ取りて奉る。價の金少しと、國司使に申ししかば、王卿が物加へて買ひたり。今金五十兩たまはるべし。船の歸らむにつけて賜び送れ。もし金賜はぬものならば、裘の質かへしたべ。
 といへることを見て、何おほす、今金少しの事にこそあなれ。かならず送るべき物にこそあなれ。うれしくして遣せたるかなとて、唐土のかたに向ひて伏し拜みたまふ。この裘入れたる箱を見れば、種々のうるはしき瑠璃をいろへて作れり。裘を見れば紺青の色なり。毛の末には金の光かやきたり。けに寶と見え、うるはしきこと比ぶべき物なし。火に焼けぬことよりも、けうらなること比なし。うべ、赫映姫の好しがりたまふにこそあり

○あなかしこ ああ
勿體なし。
○物の枝 花の枝。
○いたくして 甚だ
美しくして。

○やがてとまりなん
其儘の許に泊ら
ん。

○おもひ 思ひのひ
に火を掛く。

○焼けぬ 思ひに胸
が焼く。火に焼けな
い姿を掛く。

○わきて云々 これ
が特に實の皮なりと
も我には解らず。

○人 右大臣。
○やもめ 獨身。
○疑なく思はむ云々
疑なく思はむと翁
は宣へども。

○それさもいはれた
り さういふのも尤
もだ。

けれど宣ひて、あなかしここと、箱に入れたまひて、ものの枝につけて、御身の化粧いと
いたくして、やがてとまりなむものぞと思して、歌よみ加へて持ちていましたり。その歌
は、

限りなきおもひに焼けぬかはごろも袂かわきて今日こそは著め

といへり。家の門に持ていたりて立てり。竹取出で来て取り入れて、赫映姫に見す。赫映
姫、かの姿を見ていはく、「うるはしき皮なめり。わきて眞の皮ならむとも知らず。」竹取
答へていはく、「とまれかくまれ、まづ請じ入れ奉らむ。世の中に見えぬ姿のさまなれば、
これを眞と思ひ給ひね。人ないたくわびさせ奉らせ給ひそ。」といひて、呼びする奉れり。
かく呼びするて、この度は必ずあはむと、姫の心にも思ひをり。この翁は、赫映姫のやも
めなるを歎かしければ、よき人にあはせむと思ひはかれども、切に否といふことなれば、
え強ひぬはことわりなり。赫映姫、翁にいはく、「この姿は、火に焼かむに焼けばこそ
眞ならむと思ひて、人のいふことにもまじめ。世になき物なれば、それをまことと疑ひな
く思はむと宣へ。猶これを焼きて見む。」といふ。翁「それ、さもいはれたり。」といひて、
大臣に「かくなむ申す。」といふ。大臣答へていはく、「この皮は唐土にもなかりけるを、辛

○されはこそ 案の
如く。

○名残なく 悉く。

○おもひの外に 思
の外即ち氣にかけな
いで。火の外を掛
く。

○歸り 右大臣は。

○すみ給ふと 夫
婦の交ひをし給ふと
いふ噂である。

○とゆなき 利氣な
き。氣力なき。

○あへなし 張合な
し。

○男 召使。

○尊し 恐多し。

○この玉 總て玉と
いふ物は。
○この國になき云々
日本に無くして印
度支那にのみある物
にもあらず。

うじて覓め尋ね得たるなり。何の疑ひかあらむ。さは申すとも、はや焼きて見給へ。」とい
へば、火の中にうちくべて焼かせ給ふに、めらくと焼けぬ。「さればこそ異物の皮なりけ
れ。」といふ。大臣これを見給ひて、御顔は草の葉の色して給へり。赫映姫は、あなうれ
しと喜びて居たり。かの詠み給ひける歌の返し、箱に入れて返す。

名残なくもゆと知りせばかは衣おもひの外におきて見ましを

とぞありける。されば歸りましにけり。世の人々、「安倍大臣は、火鼠の姿をもていま
して、赫映姫に住み給ふとな。こゝにやいます。」など問ふ。或人のいはく、「姿は火にく
べて焼きたりしかば、めらくと焼けにしかば、赫映姫あひ給はず。」といひければ、これ
を聞きてぞ、とけなきものをば、あへなしとはいひける。

大伴御行の大納言は、我が家にありとある人を召し集めて、宣はく、「龍の首に五色の光
ある玉あり、それを取りて奉りたらむ人には、願はむ事をかなへむ。」と宣ふ。男ども仰
せの事を承りて申さく、「仰せの事はいと尊し。たゞしこの玉たはやすくえ取らじを、
況んや龍の首の玉はいかゞとらむ。」と申しあへり。大納言宣ふ、「君の使といはむものは、
命を捨てても、己が君の仰せ事をば叶へむとこそ思ふべけれ。この國になき天竺唐土の物

- いかゞはせん 致方なし。
- 汝等君の使云々 それでこそ汝等は君の召使といふ名を獲すものである。
- 食物に 食物の代に。
- いもひ 齋。ものいみ。
- いづちも 何處へなりとも。
- 好事 好色の事。
- つきなきこと 不都合の事。
- 事ゆかぬもの故 母があかないから。
- 例のやう 普通の住居。
- には にては。
- いろ／＼に 色々
- 内々のしつらひ 室内の装飾。

にもあらず。この國の海山より龍は下り上るものなり。いかに思ひてか、汝等難きものも申すべき。」男ども申すやう、「さらばいかゞはせむ。難きものなりとも、仰せ事に従ひて求めにまからむ。」と申す。大納言見笑ひて、「汝等君の使と名を流しつ。君の仰せ事をばいかは背くべき。」と宣ひて、龍の首の玉とりにとて、出し立て給ふ。この人々の道の糧食物に、殿の内の絹・綿・錢など、ある限りとり出でて添へて遣す。「この人々ども、歸るまでいもひをして我は居らむ。この玉とり得では家に歸りくな。」と宣はせけり。おの／＼仰せ承りて罷り出でぬ。龍の首の玉とり得ずば歸り來たと宣へば、いづちも／＼足のむきたらむ方へいなむとす。かゝる好事をし給ふ事と誇りあへり。賜はせたる物はおの／＼分けつ、取り、或は己が家に籠りる、或は己が行かまほしき所へいぬ。親と君と申すとも、かくつきなき事を仰せ給ふ事と、事ゆかぬもの故、大納言を誇りあひたり。赫映姫するむには、例のやうには見にくしとのたまひて、麗しき屋をつくり給ひて、漆を塗り、蒔繪をし、いろへし給ひて、屋の上には絲を染めて、いろ／＼に葺かせて、内々のしつらひには、いふべくもあらぬ綾織物に繪をかきて、間毎に張りたり。もとの妻どもは追ひ拂ひて、赫映姫を必ずあはむとまうけして、獨り明し暮し給ふ。遣しし人は、夜晝待ち給ふに、年越ゆる

- もこの妻 本妻。
- 姫を 姫に。
- 音 たより。
- 心もさながりて 待遠しく思つて。
- 舍人 隨身。
- 召繼 召次。雜事を勤める下官。
- やつれ 身をおこし。
- 人や 家來が。
- をぢなき事する 臆病のこゝをいふ。
- え知らで 我等強き事をよく知らで。
- 遅く来るやつはら 玉取りに行つて歸りの遅い奴達。
- こゝら 多年。
- うたてある さんでもない事をする。
- すゞなる死 不慮の死。
- 高き山 大丈夫。

まで音もせず、心もとながりて、いと忍びて、たゞ舍人二人召繼として、やつれ給ひて、難波の邊におはしまして、問ひ給ふ事は、「大伴大納言の人や、船に乗りて龍殺して、そが首の玉とれるとや聞く。」と問はするに、船人答へていはく、「怪しき事かな。」と笑ひて、「さるわざする船もなし。」と答ふるに、をぢなき事する船人にもあるかな。え知らでかくいふとおほして、「我が弓の力は、龍あらばふと射殺して首の玉は取りてむ、遅く来るやつばらを待たじ。」とのたまひて、船に乗りて、海ごとにありき給ふに、いと遠くて、筑紫の方の海に漕ぎ出で給ひぬ。いかゞしけむ、はやき風吹きて、世界くらがりて、船を吹きもてありく。いづれの方とも知らず、船を海中にまかり出でぬべく吹き廻して、浪は船にうちかけつ、まき入れ、雷は落ちかゝるやうに閃きかゝるに、大納言は惑ひて、「まだかゝるわびしき目は見ず、如何ならむとするぞ。」と宣ふ。楫取答へて申す、「こゝら船に乗りてまかりありくに、まだかくわびしき目を見ず。御船海の底に入らば雷落ちかゝりぬべし。若しさいはひに神の助けあらば、南海に吹かれおはしぬべし。うたてある主の御許に仕へ奉りてすゞなる死をすべかめるかな。」とて、楫取泣く。大納言これを聞きてのたまはく、「船に乗りては楫取の申すことをこそ、高き山とも頼め。など斯くたのもしけなきことを申す

○あをへん なまなましき嘔吐。
 ○神ならねば云々 風波烈しけれ我は神ならねば如何にもする能はず。
 ○楫取の御神 舟の守護神即舟靈。
 ○をぢなく心効く 愚かにも又考淺く。
 ○壽詞 祝詞。
 ○はなちて 大聲に唱へて。
 ○立ち居 立つたり坐つたり。
 ○故。
 ○國 播磨の國司。
 ○風いとおもき人にて 風邪を引く重く煩ふ人。
 ○こなたかなたの目 左右の目。

ぞ。」と、あをへどを吐きて宣ふ。楫取答へて申す、「神ならねば何業をか仕らむ。風吹き浪はけしけれども、雷さへいたゞきに落ちかゝるやうなるは、龍を殺さむと求めたまひ候へば、かくあなり。疾風も龍の吹かするなり。はや神に祈りたまへ。」といへば、よきことなりとて、「楫取の御神聞しめせ、をぢなく心効く龍を殺さむと思ひけり。今より後は毛の末一筋をだに動かし奉らじ。」と、壽詞をはなちて立ち居、泣く／＼呼ばひ給ふ事、千度ばかり申し給ふけにやあらむ、やう／＼雷なりやみぬ。少し明りて、風はなほ早く吹く。楫取のいはく、「これは龍のしわざにこそありけれ。この吹く風はよき方の風なり。あしき方の風にはあらず。よき方に赴きて吹くなり。」といへども、大納言は、これを聞き入れ給はず。三四日ありて吹き返し寄せたり。濱を見れば、播磨の明石の濱なりけり。大納言、南海の濱に吹き寄せられたるにやあらむと思ひて、息つき臥し給へり。船にある男ども、國に告げたれば、國の司まうで訪ふにも、え起きあがり給はで、船底に臥し給へり。松原に御筵敷きておろし奉る。その時にぞ、南海にあらざりけりと思ひて、辛うじて起き上り給へるを見れば、風いとおもき人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、李を二つつけたるやうなり。これを見奉りてぞ、國の司もほゝゑみたる。國に仰せたまひて、腰輿

○腰輿 手で腰の邊までもたけて運ぶ輿。
 ○によぶ 呻吟し。
 ○知り給へれば 今度御主人が御解りになりし故。
 ○勸當 おまがめ。
 ○よくもて来ずなり 龍の玉を持ち来らなかつたのは幸であつた。
 ○こどもなく 雑作なく。
 ○大盗人 罵る詞。
 ○離れ給ひし本の上 離縁した本妻。
 ○腹をきりて 腹すぢをよりて。
 ○鳶鳥の 鳶鳥が。
 ○いましたる 歸られた。
 ○世にあはぬ 世に容れられぬ。

つくらせ給ひて、によぶ／＼荷はれて家に入り給ひぬるを、いかで聞きけむ、遣しし男どもも参りて申すやう、「龍の首の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へもえ参らざりし。玉のとり難かりしことを知り給へればなむ、勸當あらじとて参りつる。」と申す。大納言起き出でてのたまはく、「汝等よくもて来ずなりぬ。龍は鳴神の類にてこそありけれ。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして龍を捕へたらましかば、又こともなく、我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。赫映姫てふ大盗人のやつが、人を殺さむとするなりけり。家のあたりだに今は通らじ。男どももなありきそ。」とて、家に少し残りたりける物どもは、龍の玉とらぬ者どもに賜びつ。これを聞きて、離れ給ひし本の上は、腹をきりて笑ひ給ふ。糸を茸かせて造りし屋は、鳶鳥の巢に皆咋ひもていにけり。世界の人のいひけるは、「大伴大納言は、龍の首の玉や取りておはしたる。」「否さもあらず。御眼二つに李の様なる玉をぞ添へていましたる。」といひければ、「あな堪へがた。」といひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、あなたへがたとはいひ始めける。
 中納言石上麻呂は、家につかはるゝ男どもの許に、「燕の巢くひたらば告げよ。」と宣ふを、うけたまはりて、「何の料にかあらむ。」と申す。答へて宣ふやう、「燕のもたる子安貝と

- 何の料 何の爲。
- もたる 持ちたる。
- はら／＼ ばらはら。
- 大炊寮 官内省の被管、諸國の春米雜穀を收納し諸司に分給する事を掌る。
- つく たるき。束柱。屋の梁より上。
- の 諸説あり。
- ゐてまかりて 連れてまゐつて。
- あぐら 足場。
- さてこそ さうしてから。
- もとも 最も。
- あな／＼ひ あぐら。
- 額を合せて 親しく話し合ひて。
- さては 其方法では。
- おそろ／＼しく 仰山に。

らむ料なり。」と宣ふ。男ども答へて申す、「燕をあまた殺して見るにだにも、腹になきものなり。たゞし子産む時なむいかでか出すらむ、はらくと、人だに見れば失せぬ。」と申す。また人の申すやう、「大炊寮の飯炊ぐ屋の棟の、つくの穴毎に燕は巢くひ侍り。それにまめならむ男どもを率てまかりて、あぐらを結ひて上げて窺はせむに、そこらの燕、子うまざらむやは。さてこそ取らしめ給はめ。」と申す。中納言喜び給ひて、「をかしき事にもあるかな。もともえ知らざりけり。興ある事申したり。」と宣ひて、まめなる男ども二十人ばかり遣して、あな、ひに上げすゑられたり。殿より使暇なくたまはせて、「子安貝とりたるか。」と問はせ給ふ。燕も人の數多のほり居たるにおぢて、巢に上りこず。かゝる由の御返り事を申しければ、聞き給ひて、如何すべきと思しめし煩ふに、かの寮の官人くらつ麻呂と申す翁申すやう、「子安貝とらむと思しめさば、たばかり申さむ。」とて、御前に参りたれば、中納言額を合せてむかひ給へり。くらつ麻呂が申すやう、「この燕の子安貝は、あしくたばかりて取らせ給ふなり。さてはえ取らせたまはじ。あな、ひにおどろ／＼しく二十人の人の上りて侍れば、荒れて寄りまうで来すなむ。せさせ給ふべきやうは、このあな、ひを毀ちて、人みな退きて、まめならむ一人を荒籠に載せすゑて、綱をかまへて、

- 荒れて 恐れ過ぎかる。
- 荒籠 目の荒い籠。
- みそかに 密に。
- 夜を晝になして 晝夜の別なく。
- 使はるゝ人にもなきに くらつ麻呂の事。
- かづけ かづけものに與ふ。
- 更に 改めて。
- 夜さり 夜。
- まうで来 登らせよ。
- 遣しつ 麻呂の家に歸した。
- さ、けて 持ち上げて。
- 誰ばかりおほえむに 誰か之を爲し得べき其の人を思ひあたらぬいから。
- 合せて と共に。
- ひらめる 平たき。

鳥の子産まむ間に綱を釣り上げさせて、ふと子安貝を取らせ給はむなむよかるべき。」と申す。中納言宣ふやう、「いとよきことなり。」とて、あな、ひを毀ちて、人みな歸りまうで来ぬ。中納言、くらつ麻呂に宣はく、「燕はいかなる時にか子を産むと知りて、人をばあぐべき。」と宣ふ。くらつ麻呂申すやう、「燕は子うまむとする時は、尾をさ、けて七度廻りてなむ、産み落すめる。さて七度廻らむ折ひき上げて、その折子安貝は取らせ給へ。」と申す。中納言喜び給ひて、萬の人にも知らせ給はで、みそかに寮にしまして、男どもの中に交りて、夜を晝になして取らしめ給ふ。くらつ麻呂かく申すを、いといたく喜び給ひて宣ふ、「こゝに使はるゝ人にもなきに、願ひをかなふる事の嬉しさ。」と宣ひて、御衣ぬぎて被け給ひつ。「更に夜さりこの寮にまうで来。」とのたまひて遣しつ。日暮れぬれば、かの寮におはして見給ふに、誠に燕巢つくれり。くらつ麻呂申すやうに、尾をさ、けて廻るに、荒籠に人を載せて釣り上げさせて、燕の巢に手をさし入れさせて探るに、「物もなし。」と申すに、中納言、「あしく探ればなきなり。」と腹だちて、「誰ばかりおほえむに。」とて、「我的ほりて探らむ。」と宣ひて、籠にのりて釣られ登りて窺ひ給へるに、燕尾をさ、けていたく廻るに合せて、手を捧げて探り給ふに、手にひらめるものさはる時に、「われ物にぎりた

- 翁 くらつ麻呂よ
- しえたり うまく
- 綱絶ゆる即 綱が切れるや否や。
- やしまの鼎 大炊寮に八鼎ありて各鼎に大八島魂神を祀る
- あさましがりて 事の意外に驚いて。
- しらめ 白眼。
- 息の下 幽かな聲。
- 脂燭 松の木を細く削り油を塗りてこもす。
- 御ぐし 御頭。
- まり 大小便をす。
- かひな 貝無。
- 入れられ 入れて贈られ。
- いはけ 子供らし。
- たゞに 空しく。
- まぶらひ 見舞。
- まつ 松と待つこと。

り。今はおろしてよ。翁しえたり。」とのたまひて、集りて疾くおろさむとて、綱を引き過して、綱絶ゆる即、やしまの鼎の上へのけざまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目はしらめにてふし給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。辛うじて息いで給へるに、また鼎の上より、手とり足とりしてさけおろし奉る。辛うじて「御心地はいかおぼさる。」と問へば、息の下にて「ものは少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど子安貝をふと握りもたれば、嬉しく覺ゆるなり。まづ脂燭さして來。この貝顔みむ。」と、御ぐしもたけて御手をひろげ給へるに、燕のまり置ける古糞をにぎり給へるなりけり。それを見給ひて「あなかひなのわざや。」と宣ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしとはいひける。貝にもあらずと見給ひけるに、御心地もたがひて、唐櫃の蓋に入れられ給ふべくもあらず、御腰は折れにけり。中納言は、いはけたるわざして病むことを、人に聞かせじとし給ひけれど、それを病にていと弱くなり給ひにけり。貝をえ取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はむことを、日にそへて思ひ給ひければ、たゞに病み死ぬるよりも、人ぎ、恥しく覺え給ふなりけり。これを赫映姫聞きて、とぶらひにやる歌、

年を経て浪立ち寄らぬ住の江のまつかひなしと聞くはまことか

- かひ 貝と甲斐。
- すくひやはせぬ 何故救はざるか。
- 絶え入り 絶命し。
- 内侍 掌侍。
- 畏りて 恐入りて。
- 請じ 招き。
- 仰せごごに 勅命によれば。
- 優に しこやかに。
- はや 早く。
- うたても 悪くも。
- 疎 疎累。
- 賢し 忝し。
- うめる子 のやうにはあれど、自分の實子の様に養ひたれど。
- え責めず 催促する事も出来ず。

とあるを讀みて聞かす。いと弱き心地に頭もたけて、人に紙をもたせて、苦しき心地に辛うじて書き給ふ。

かひはかくありけるものをわび果てて死ぬる命をすくひやはせぬと書きはてて絶え入りたまひぬ。これを聞きて、赫映姫少し哀れとおほしけり。それよりなむ少し嬉しきことをば、かひありとはいひける。

さて、赫映姫容世に似ずめでたき事を、帝きこしめして、内侍中臣のふさ子に宣ふ、「おほくの人の身を徒になしてあはざる赫映姫は、いかばかりの女ぞと、罷りて見てまられ。」と宣ふ。ふさ子、承りてまかれり。竹取の家に畏りて請じ入れてあへり。姫に内侍宣ふ、「仰せごごに、赫映姫の容優におはすとなり。よく見て參るべきよし宣はせつるになむ參りつる。」といへば、「さらばかくと申し侍らむ。」といひて入りぬ。赫映姫に、「はやかの御使に對面し給へ。」といへば、赫映姫「よき容にもあらず、いかでか見ゆべき。」といへば、「うたても宣ふかな、帝の御使をばいかでか疎にせむ。」といへば、赫映姫答ふるやう、「帝の召して宣はむこと、賢しとも思はず。」といひて、更に見ゆべくもあらず。うめる子のやうにはあれど、いと心恥しけに、疎なる様にいひければ、心の儘にもえ責めず。姫、

- こはく 頑強。
- まさに とうとうして。
- いはれぬ事 言ふ可からざる事。
- 恥しく 姫が恥入る様に。
- 背かば 背くから。
- 多くの人云々 其の頑強が五人を苦しめた心であるぞよ。
- たいくしく 疎畧に。
- やはならば すべき慣れしむべからず。
- 絶えて 一向に。
- もてわづらひ侍り もて餘してをる。
- おほし立て 養育す。
- 冠 鉞爵。五位に敘せらるること。
- たはせ 賜はせ。
- やは や。疑問詞。

内侍の許に歸り出でて、「口惜しくこの幼き者は、こはく侍るものにて、對面すまじきと申す。」内侍、「必ず見奉りて参れと仰せ事ありつるものを、見奉らではいかでか歸り参らむ。國王の仰せ事を、まさに世に住み給はむ人の、承り給はではありなむや、いはれぬ事なし給ひそ。」と、詞恥しくいひければ、これを聞きて、まして赫映姫聞くべくもあらず。「國王の仰せ事を背かば、はや殺し給ひてよかし。」といふ。この内侍歸り参りて、この由を奏す。帝聞しめして、「多くの人を殺してける心ぞかし。」と宣ひて、止みにけれど、なほ思しめし坐して、この女の謀にやまけむと思しめして、竹取の翁を召して仰せ給ふ。「汝が持て侍る赫映姫を奉れ。顔容よしと聞しめして、御使を賜びしかど、かひなく見えすなりにけり。かくだいしくやはならばすべき。」と仰せらる。翁畏まりて御返り事申すやう。「此の女の童は、絶えて宮仕へつかう奉るべくもあらず侍るを、もてわづらひ侍り。さりと罷りて仰せ給はむ。」と奏す。これを聞し召して仰せ給ふやう、「なか翁の手におほし立てたらむものを、心に任せざらむ。この女もし奉りたるものならば、翁に冠をなとかたばせざらむ。」翁喜びて家に歸りて、赫映姫に語らふやう、「かくなむ帝の仰せ給へる、猶やは仕うまつり給はぬ。」といへば、赫映姫答へて曰く、「専ら左様の宮仕へつかう奉らじと

- もはら 一向。
- いらふる 答ふる。
- 死に給ふやう云々 官仕へしたてて死なれる理由はあるまじ。
- 猶そらごごかご それでも私の言が偽と疑はば。
- 死なずやあるご 死なぬか否か。
- 昨日今日 日未だ淺き。
- 人聞きやさし 外聞も恥し。
- ごありごもかより とも 如何様にありても。
- 仕う 勤め。
- 山本 山麓。
- 御狩 鷹狩。
- 何か心もなく侍らむに 姫の不意の所に。

思ふを、強ひて仕う奉らせ給はば消え失せなむす。御官冠つかう奉りて死ぬばかりなり。」翁いらふるやう、「なし給ひそ、官冠も、我が子を見奉らでは何にかはせむ。さはありともなか宮仕をし給はざらむ。死に給ふやうやはあるべき。」といふ。「猶そらごごかご、仕う奉らせて、死なずやあると見給へ。數多の人の志疎ならざりしを、空しくなしてしこそあれ、昨日今日帝の宣はむ事につかむ、人聞きやさし。」といへば、翁答へて曰く、「天の下の事はとありともか、りとも、御命の危さこそ大きな障りなれ。猶仕う奉るまじき事を参りて申さむ。」とて、参りて申すやう、「仰せの事の畏さに、かの童を参らせむとて仕う奉れば、『宮仕へに出し立てなば死ぬべし。』と申す。造麻呂が手に産せたる子にてもあらず。昔山にて見つけたる。か、れば心ばせも世の人に似ずぞ侍る。」と奏せさす。帝おほせ給はく、「造麻呂が家は山本近かなり。御狩の行幸し給はむやうにて見てむや。」とのたまはず。造麻呂が申すやう、「いとよき事なり。何か心もなく侍らむに、ふと行幸して御覽せられなむ。」と奏すれば、帝俄に日を定めて、御狩に出で給ひて、赫映姫の家に入りたまひて見給ふに、光みちて清らにて居たる人あり。これならむと思して近く寄せ給ふに、逃けて入る袖をとらへ給へば、面をふたぎて候へど、初めよく御覽じつれば、類なくめでたく

- ふたぎ 隠す。
- 使ひ給はめ 使ひ給はめども、然らざる故に。
- ゐておはし 連れて行かれる。
- きこ 俄に。
- あるじ 御馳走。
- いかめしう 盛に。
- たましひを云々 氣ぬけした有様で。
- 奉り 乗り。
- そむきてこまる 心が後へ引かれて姫に心残りがある。
- 菴はふ 下荒れて貧しき家。
- たまのうてな 金殿玉櫛。官中。
- そら 方。
- さりきて さうかきて。
- 常に仕う奉る人 近侍の女官。

「覚えさせ給ひて、『許さじとす。』とて、率ておはしまさむとするに、赫映姫答へて奏す、「おのが身は、この國に生れて侍らばこそ使ひたまはめ。いとるておはし難くや侍らむ。」と奏す。帝、「などかさあらむ、猶率ておはしまさむ。」とて、御輿を寄せ給ふに、この赫映姫、きと影になりぬ。はかなく口惜しと思ひ、けにたゞ人にはあらざりけり、とおほして、「さらば御供には率ていかじ。もとの御形となり給ひね。それを見てだに歸りなむ。」と仰せらるれば、赫映姫もとの形になりぬ。帝、なほめでたく思ひ召さる、事せきとめ難し。かく見せつる造麻呂を悦び給ふ。さて仕うまつる百官の人々に、あるじいかめしう仕う奉る。帝、赫映姫を留めて歸りたまはむ事を、飽かず口惜しく思ひしけれど、たましひを留めたる心地してなむ、歸らせたまひける。御輿に奉りて後に、赫映姫に、

歸るさのみゆき物うくおもほえてそむきてとまるかぐや姫ゆる

御返り事を、
 華はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉のうてなをも見む
 これを帝御覽じて、いと歸り給はむそらもなく思さる。御心は更に立ち歸るべくも思されざりけれど、さりとて夜をあかし給ふべきにもあらねば、かへらせ給ひぬ。常に仕う奉

- こゝ人 他人。
- かれに思し云々 姫に比較すれば。
- よしなくて 無意義にも。
- 御方々 后達。
- 月の顔みるは思む事 物思ひの種を誘へばなり。
- 人聞 人の見ぬ聞。
- 出で居て 縁に出でて。
- 近く使はる、人 姫の近侍の者。
- 例も 平生も。
- たゞ事 通常の有様。
- なでふ心地すれば ぐういふ氣持がして。
- うましき世 うつくしき世。楽しい世。

る人を見たまふに、赫映姫の傍に寄るべくだにあらざりけり。こと人よりは清らなりとおほしける人の、かれに思しあはすれば人にもあらず。赫映姫のみ御心にかゝりて、ただ一人すぐしたまふ。よしなくて御方々にもわたりたまはず。赫映姫の御許にぞ、御文を書きて通はさせ給ふ。御返り事さすがに憎からず聞えかはし給ひて、おもしろき木草につけても、御歌を詠みてつかはす。

かやうにて、御心を互に慰めたまふ程に、三年ばかりありて、春の初より、赫映姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたる様なり。ある人の、月の顔みるは忌む事と制しけれども、ともすれば、人間には月を見ていみじく泣き給ふ。七月のもちの月に出で居て、切にも思へる氣色なり。近く使はる、人々、竹取の翁に告げていはく、「赫映姫も月をあはれがり給ひけれども、この比となりては、たゞ事にも侍らざり、いみじくおほし歎く事あるべし。よく見奉らせたまへ。」といふを聞きて、赫映姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたる様にて月を見給ふぞ。うましき世に。」といふ。赫映姫、「月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。」といふ。赫映姫のある所にいたりて見れば、なほ物思へるけしきなり。これを見て、「あが佛何事を思

○我が佛 我が子の佛。我が守本尊とも頼みて大切にする子。
 ○物なむ心細く覺ゆる 月を見るこ何もなく心細い。
 ○夕暗 宵暗。
 ○人目も云々 人の見るのも憚らず。
 ○さきん 以前。
 ○さのみやは 何時迄も其儘にしておかれぬ。
 ○うち出で 言ひ出づ。
 ○月の都 月宮殿。
 ○昔の契 前世の因縁。
 ○本の國 月界。
 ○まうでこむす 夢り來らむとす。
 ○さらす のがれがたく。是非なく。

ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。」といへば、「思ふ事もなし。物なむ心細く覺ゆる。」といへば、翁一月な見給ひそ。これを見給へば、もの思す氣色はあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ずてはあらむ。」とて、なほ月出づれば、出で居つゝ歎き思へり。夕暗には物思はぬ氣色なり。月の程になりぬれば、猶時々はうち歎き泣きなす。これを、使ふ者ども、「猶もの思す事あるべし。」とさ、やけど、親を始め何事とも知らず。八月十五日ばかりの月に、出で居て、赫映姫といたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ。」と問ひさわぐ。赫映姫泣くく、「いふ。」さきんも申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過し侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔の契ありけるによりてなむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりければ、この月の十五日に、かの本の國より迎へに人々まうでこむす。さらす罷りぬべければ、思し歎かむが悲しき事を、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみじく泣く。翁、「こはなでふ事を宣ふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさはせしを、我が丈たち竝ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや。」といひて、「我

○我が丈たち竝ぶまで 我の背丈と同じ位までに。
 ○迎へ聞えむ 迎へ申さむ。
 ○のゝしる 騒ぐ。
 ○おほえず 忘る。
 ○ならひ 馴れ。
 ○いみじからむ心地 うれしき心地。
 ○己が心ならず 不本意ながら。
 ○心はへ 心たて。
 ○あてやか 上品。
 ○戀しからむ 姫の昇天後の戀しさ。
 ○同じ心 翁夫婦と同じ心地。
 ○尊くはせ給ふ 忝くも御訪問に預る
 ○人々たまはりて 防々人々を載いて。
 ○やりては 遣りては翁が如何思はむ。

こそ死なぬ。」とて、泣きのゝしることいと堪へ難けなり。赫映姫のいはく、「月の都の人に父母あり。片時の間とて、かの國よりまうで來しかども、斯くこの國には、數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の事もおほえず。こゝにはかく久しく遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず罷りなむとする。」といひて、諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も年ごろならひて、たち別れなむことを、心ばへなどあてやかに美しかりつることを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心に歎しがかりけり。この事を帝きこしめして、竹取が家に御使遣させ給ふ。御使に竹取出で逢ひて泣く事限りなし。この事を歎くに、髪も白く、腰も屈り、目も瀾れにけり。翁今年は八十許りなりけれども、物思ひには片時になむ老になりにけると見ゆ。御使、仰せ事とて翁に曰く、「いと心苦しく物思ふなるは、誠にか。」と仰せ給ふ。竹取泣くく申す、「この望になむ、月の都より赫映姫の迎へにまうで來なる。尊くとはせ給ふ。この望には人々たまはりて、月の都の人まうで來ば、捕へさせむ。」と申す。御使かへり参りて、翁のありさま申して、奏しつる事ども申すを、聞き召して宣ふ。「一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、明暮見馴れたる赫映姫をやりては、如何思ふべ

- 司々 六衛府の役所。
- 少將 近衛府の次官。
- 六衛のつかさ 左右近衛、左右兵衛、左右衛門の役人。
- 築地 土壇。
- 家の人々 竹取家の召使達。
- この守る人々も家人達も。
- 母屋 中央の室。
- 塗籠 周囲を壁で塗り、明りとりを附けた室、器財を入れ置く所。
- つゆも 少しでも。
- さらさむ 普く人に示す。
- したくみ 用意。
- つかふ 持つ。
- さが その。
- かき出で 露はす。

き。かの十五の日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人をさして、六衛のつかさ合せて、二千人の人を竹取が家に遣はす。家に罷りて築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々と多かりけるに合せて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帯して居り。母屋の内には女共を番にするて守らす。姫塗籠の内に赫映姫を抱かへて居り。翁も塗籠の戸を鎖して戸口に居り。翁の曰く、「かばかり守る所に、天の人にもまけむや。」といひて、屋の上をる人々に曰く、「つゆも物空にかけらば、ふと射殺し給へ。」守る人々の曰く、「かばかりして守る所に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して外にさらさむと思ひ侍る。」といふ。翁これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞きて、赫映姫は、「鎖し籠めて守り戦ふべきしたくみをしたりと、あの國の人をえ戦はぬなり。弓箭して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば皆あきなむとす。相戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。」翁のいふやう、「御迎へに來む人をば、長き爪して眼をつかみつぶさむ。さが髪をとりてかなぐり落さむ。さが尻をかき出でて、こゝらのおほやけ人に見せて恥見せむ」と腹立ちをり。赫映姫はく、「聲高にな宣ひそ。屋のうへに居る人どもの聞くに、いとまさなし。いますかりつる志どもを思ひも知らで、罷りなむす

- こゝらのおほやけ人 澤山の官人。
- まさなし 宜しからず。見苦し。
- いますかりつる志 これまでの御深切
- ながき契 何時迄も居るべき宿縁。
- かへりみ 情。
- 罷らむ道 昇天の途中。
- 月比も出で居て 幾月も縁に出でて。
- 今年ばかりの暇 本年だけ人界に居ること。
- 思ふこゝ心 心配事。
- いみじく 甚だ嬉しく。
- さばらじ 使が來ても差支なし。
- ねたみ 憤り怒む。
- ある人 傍の人。
- 思ひ起し 憤發し。

る事の口惜しう侍りけり。ながき契のなかりければ、程なく罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。親たちのかへりみを聊かだに仕うまつらで、まからむ道も安くもあるまじきに、月比も出で居て、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許されぬによりてなむ、かく思ひ歎き侍る。御心のみ惑はして去りなむことの悲しく堪へがたく侍るなり。かの都の人はいと清らにて、老いもせずなむ。思ふ事もなく侍るなり。さる所へ罷らむするもいみじくも侍らず、老いおとろへ給へる様を見奉らざらむこそ戀しからめ。」といひて泣く。翁、「胸いたき事なし給ひそ。麗しき姿したる使にもさはらじ。」とねたみ居り。かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさ十合せたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りており來て、地より五尺ばかりあがりたるほどに立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、相戦はむ心もなかりけり。辛うじておもひ起して、弓箭を取りたてむとすれども、手に力もなくなりて、痿え屈りたる中に、心さかしき者、念じて射むとすれども、外さまへいきければ、あれも戦はで、心地たゞしれに守りあへり。立てる人どもは、装束の清らなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さし

- 心さかしき者 氣丈な者。
- 念じてこらへて。
- あれも戦はで、恐れ過ぎかり戦はずて。
- しれにされて 願ほけて。
- 立てる人 天人。
- 羅蓋 薄絹を張れる天蓋。
- 家に 翁の家に向つて。
- をさなき思なる。
- 功德 善業。
- 降し 姫を降し。
- 身をかへたる云々 忽ち汝は金持なる。
- 罪 天界で罪。
- 罪のかぎり 服罪期間。
- 穢き所 人間界。
- 即 忽ち。

たり。その中に王と覺しき人、家に「造磨呂まうで來。」といふに、猛く思ひつる造磨呂も、物に酔ひたる心地してうつぶしに伏せり。いはく、「汝をさなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助けにとて片時の程とて降ししを、そこの年比そこの金たまひて、身をかへたるが如くなりたり。赫映姫は、罪をつくりたまへりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪のかぎりはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き歎く、あたはぬことなり。はや返し奉れ。」といふ。翁答へて申す、「赫映姫を養ひ奉ること二十年あまりになりぬ。片時と宣ふに怪しくなりはべりぬ。また他處に赫映姫と申す人ぞ、おはしますらむ。」といふ。「こゝに御座する赫映姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ。」と申せば、その返り事はなくて、屋の上へ飛ぶ車をよせて、「いざ赫映姫、穢き所にいかでか久しくおはせむ。」といふ。立て籠めたる所の戸、即ちたゞあきを開きぬ。格子どもも人はなくして開きぬ。姫抱きてるたる赫映姫外に出でぬ。え留むまじければ、たゞさし仰ぎて泣きをり。竹取心惑ひて泣き伏せる所に寄りて、赫映姫いふ、「こゝにも心にもあらでかくまかるに、昇らむをだに見送り給へ。」といへども、「何しに悲しきに見送り奉らむ。我をばいかにせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具して率ておはせね。」と泣きて伏せれ

- こゝにも 私も。
- この國に生れ云々 私が人間界の生れならは。
- 侍る 居る。
- 見おこせ 見やり
- 天人の中に 天人の中の或人に。
- 天の羽衣 天人の服。
- 不死の藥 不老不死の仙藥。
- 奉れ 飲み給へ。
- 御衣 天の羽衣。
- 心こまになる 天
- 心もさながら 待ち遠しく思ふ。
- 物知らぬこと 無情なこと。
- おほやけ 帝。
- わづらはしき身 厄介な身。

ば、御心まどひぬ。「文を書き置きてまからむ、戀しからむ折々、とり出でて見たまへ。」とて、うち泣きて書く言は、
この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、返すぐ本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りてまかる空よりも落ちぬべき心地す。
と、書きおく。天人の中にもたせたる筈あり、天の羽衣入れり。又、あるは不死の藥入れり。ひとりの天人いふ、「壺なる御藥奉れ。きたなき所のもの食しめしたれば、御心地あしからむものぞ。」とて、持てよりたれば、聊かなめ給ひて、少しかたみとて、ぬぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人つゝませず、御衣を取り出でて著せむとす。その時に赫映姫、「しばし待て。」といひて、「衣著つる人は心こまになるなり。物一言いひおくべき事あり。」といひて文かく。天人おそしと心もとながり給ふ。赫映姫、「物知らぬことな宣ひそ。」とていみじく静かに、おほやけに御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。
かく數多の人をたまひて留めさせたまへど、許さぬ迎へまうで來て、取り率て罷りぬれば、口惜しく悲しき事、宮仕つかう奉らずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍

○心得ず いぶかし
く。
○心づよく つれな
く。

○なめけなる 無體
なる。

○心にこまり 氣に
かゝり。

○いまはとて 愈々
お別れと思うて。

○頭中將 近衛中將
にて藏人頭を勤む。

○血の涙 血混りの
涙。悲しみの極流す
涙。

○何せむにか 今は
何の爲にか。

○やがて 其のま
ま。

○きこしめさず 召
しあがらず。

○御遊 音楽を奏す
ること。

○上達部 公卿。

れば、心得ずおほしめしつらめども、心づよく承らすなりにし事、なめけなるもの
に思し召し止められぬるなむ、心にとまり侍りぬる。

とて、

いまはとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひ出でぬる

とて、壺の薬そへて、頭中將を呼び寄せて奉らす。中將に、天人とりて傳ふ。中將と
りつれば、ふと天の羽衣うち著せ奉りつれば、翁いとほし悲しと思しつる事も失せぬ。こ
の衣きつる人は、物思ひもなくなりければ、車に乗りて百人許り天人具して昇りぬ。そ
の後翁、血の涙を流して惑へどかひなし。あの書きおきし文を讀みて聞かせけれど、「何
せむにか命も惜しからむ。誰が爲にか何事も益もなし。」とて、薬もくはず、やがて起きも
あがらず病み臥せり。中將人々を引具して歸り参りて、赫映姫をえ戦ひ留めずなりぬる事
をこまかくと奏す。薬の壺に御文そへて参らす。展けて御覽じて、「いといたく哀れがらせ
たまひて、物もきこしめさず、御遊びなどもなかりけり。大臣、上達部を召して、「河れの
山か天に近き。」と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河國にあなる山なむ、この都も近く、天
も近く侍る。」と奏す。是を聞かせ給ひて、

○この都 京都。
○なみた 涙と無し
を掛く。
○具して 添へて。
○ふじの山 不死の
山。

あふここともなみだに浮ぶわが身には死なぬ薬も何にかはせむ
かの奉る不死の薬の壺に、御文具して御使に賜はす。敕使には、調岩笠といふ人を召し
て、駿河國にあなる山の頂にもて行くべきよし仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給
ふ。御文不死の薬の壺竝べて、火をつけてもやすべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、
兵士どもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山をばふじの山とは名づけける。その
煙、いまだ雲の中へたち昇るとぞいひ傳へたる。

伊勢物語

伊勢物語

○初冠 元服、初めて冠を著けるをいふ
○しるよしして 領地があつて。
○はしたなくてあり ければ、不似合に美しかつたので。
○しのぶもぢずり 又信夫摺。陸奥國信夫郡から出た織物。忍草の葉や莖を色々の色に布に摺つた物で、其模様が亂髪らんぱつの如く亂れてゐる所からいふ。
○ついでおもしろき 折柄の風流に古歌の心も思ひ合されてゆかしく思つたらう。
○いちはやし風流 昔の人はかく若い時から戀の戯をした。

〔一〕むかし、男ありけり。初冠して、奈良の京、春日の里にしるよしして、狩にいきけり。その里に、いとなまめきたる女はらから住みけり。かの男かいまみてけり。おもほえず古里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男著たりける狩衣の裾をきて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ著たりける。

春日野のわか紫の摺衣しのぶのみだれかぎり知られず
となむ、おひつぎていひやりける。ついでおもしろき事とや思ひけむ、

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆるにみだれそめにし我ならなくに
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやし風流をなむしける。

〔二〕昔、男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女世の人には勝れりけり。かたちよりは心なむ勝りたりける。獨りのみにもあらざりけらし。それをかのみめ男うち物がたらひて、歸り來て、いかゞ思

○西の京 皇城の正門を朱雀門といひ、朱雀門から羅城門迄の道を朱雀大路といふ。○その東を東の京、西を西の京といふ。○麴りのみにも、想をかけて居る男も一人そこらでは無い。○まめ男 信實な男。○いかゞ思ひけむ 下の「やりける」にかゝる。ごう思つたか次の歌をよんでやつた。○おもひあらは われを思ふ心あらはの意。新編は「おもひなくは」に改む。○ひしきもの 引敷菜物に鹿尾をいひかく。○二條の後 藤原長良の二女、高子。貞観八年、清和天皇の女御となる。○大后宮 五條皇太后順子。藤原冬嗣の女、仁明天皇の御后、文徳天皇の御母。

ひけむ、時は三月のついでたち、雨そほふるにやりける。

おきもせず寝もせで夜をあかしては春のものとして眺め暮しつ

〔二〕 昔、男ありけり。懸想じける女のもとに、鹿尾菜といふ物をやるとて、

おもひあらば葎の宿にねもしなむひしきものには袖をしつゝも

二條後の、まだ帝にも仕うまつり給はで、たゞ人にておはしける時のことなり。

〔四〕 昔、東の五條に、大后宮おはしましたける。西の對にすむ人ありけり。それを本意にはあらで、行きとぶらふ人、志深かりけるを、正月十日ばかりに、ほかに隠れにけり。

あり所は聞けど、人のいき通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつゝなむありける。又の年の正月に、梅の花盛に、去年を思ひ出でて、かの西の對にいきて、立ちて見居て見みれど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月の傾くまでふせりて、去年を戀ひてよめる、

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのくくと明るるに、泣くく歸りにけり。

〔五〕 昔、男ありけり。東の五條わたりにいと忍びていきけり。密なる所なれば、門よ

○本意にはあらで心から此女を慕つてゐるのではなくて。

○密なる所なれば密に通つていい所だから。

○いたうゑんじけり 其歌を人傳てに聞いて、女は、逢はずまいとする人の無情を怨んだ。

○え逢ふまじ 事情があつて逢ふ事の出來なくなつて居た女に。

○年を経て 幾年にもわたつて。

○よほひ 萬葉集に結婚、萬葉記に枕詞の字をあつ。夜延の意より轉じて、女の許に通ふをいふ。

りもえ入らで、童の踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しゆくもあらねど、度重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜毎に人をすゑて守らせければ、彼の男いけどもえ逢はで歸りけり。さてよめる、

人知れぬわがかよひ路の關守はよひくごとくうちも寝ななむ

と詠みけるを聞きて、いといたうゑんじけり。あるじ許してけり。〔二條後に忍びて参りけるを、世の聞えありければ、兄達の守らせ給ひけるとぞ。〕

〔六〕 昔、男ありけり。女のエ逢ふまじかりけるを、年を経てよばひ渡りけるを、辛うじて女の心を合せて盗み出でて、いと暗きに率てゆきけり。芥川といふ河をいきければ、草の上におきたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひけるを、ゆくさきはいと遠く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいとみじう鳴り、雨も痛うふりければ、あばらなる藏のありけるに、女をば奥におし入れて、男は弓胡籜を負ひて、戸口に、はや夜も明けなむと思ひつゝ居たりけるに、鬼、はや女をば一口にくひてけり。あなやといひけれど、神の鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうく夜も明けゆくに、見れば、率て來し女なし。足ずりをして泣けどもかひなし。

○女心を合せて 始より女も男を嫌つて逢はなかつたのではなく、逢ひ難き事情があつて逢はなかつたのだが、終に其情に絆されて、女も今は男に心を合せてに依ていつた。

○藏 公の稻なごを納めて置く倉の荒れ頽れたのがあつたのたらう。郷倉。

○胡蝶 又弓筋の字を馴む。矢を盛つて背に負ふ具。

○あなや 女の悲鳴それも烈しい雷鳴に撞消されて男の耳にははひらなかつた。

○いとこの女御 文徳天皇の女御明子。後に染殿后といふ。

白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へてけなましものを

(これは、二條 后の、いとこの女御の御許に仕うまつるやうにてる給へりけるを、容のいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄堀河大臣、太郎國經大納言、まだ下藤にて内へまゐり給ふ道に、いみじう泣く人ありけるを聞きつけて、留めてとり返しておはしける。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、后の、たゞにおはしけるをりのこととかや。)

〔七〕 昔、男ありけり。京にありわびて、東にいけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいと白くたつを見て、

いとゞしく過ぎ行くかたの戀しきにうらやましくもかへる浪かなとなむ詠めりける。

〔八〕 昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはをらじ、すむべきところもとめむとて、往きけり。信濃國、淺間の嶽に、烟のたつを見て、

信濃なる淺間のたけに立つ煙をち方人の見やはとがめぬもとより友とする人、一人二人して諸共にいきけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。

○堀河大臣 藤原基經。

○いさゞしく 後撰集に「あづまへまかりけるに、過ぎぬるかた戀しく覺えける程に、河をわたりけるに、涙のたちけるを見て、兼平」

○蜘蛛 川が蜘蛛の手のやうに幾筋にも分れて流れるのをいふ。

○餉 乾飯、今の糰。○すゞろなるめ 思ひもかけなかつた辛い目。

○その人 想ふ人。

○つくこいづける。○時しらぬ 五月の下旬に、なほ雪があるからいふ。

三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水の蜘蛛手に流れわかれて、木八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の邊の木陰におり居て、餉くひけり。その澤に燕子花いと面白く咲きたり。それを見てある人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め」といひければ、よめる、

唐衣きつ、馴れにしつましあればはるく來ぬる旅をしぞ思ふと詠めりければ、みな人、餉の上に涙落してほとびにけり。行きくつて駿河國にいたりぬ。宇津の山に至りて、我が入らむとする道は、いと暗う細きに、葛かづらは茂りて、物心ほそく、すゞろなるめを見る事と思ふに、修行者あひたり。「かゝる道には、いかでかおはする」といふに、見れば、見し人なりけり。京にその人の許にとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山邊のうつ、にも夢にも人に逢はぬなりけり富士山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降り。時しらぬ山はふじの嶺いつとてか鹿のこまだらに雪の降るらむその山は、こゝにたとへば、比叡山を二十ばかり重ねあけたらむほどして、なりは鹽尻のやうになむありける。猶行きくつて、武藏國と下總國とのなかに、いと大きな河あり、

○鹽尻 鹽を製するに、潮を汲んで浸した砂を、山の形に積んで日にさらすもの
 ○ありやなしや 生きてゐるか死んだか。
 ○こころにあはせむ 他人に嫁がせよう。
 ○あてなる人に 母は男が貴族であるといふ處から、其の男に娘を嫁がせようとの心の中に思つた。
 ○なほ人 たゞの人 素性の貴からぬ人。
 ○若草のつま 若草は「つま」の訛詞。古くは夫婦を通じて「つま」といつた。
 ○聞ゆれば恥かし 打明けていふのは恥しく、さりどいてはいないさ苦しい。

それを角田河といふ。その河の邊にむれるて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、渡守「はや舟に乗れ、日も暮れなむ」といふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の嘴と脚とあかき、鳴の大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

と詠めりければ、舟こぞりて泣きにけり。

〔九〕昔、男、武藏國まで惑ひ歩きけり。さて、その國にある女をよばひけり。父は、こ

と人にあはせむといひけるを、母なむ、あてなる人にと、心づけたりける。父はなほ人に

て、母なむ藤原なりける。さてなむ、あてなる人にと思ひける。このむこがねに詠みて遣

せたりける。住む處なむ、入間郡みよし野の里なりける。みよし野のたのむの雁もひたぶるに君がかたにぞよると鳴くなるむこがね、かへし、我が方によると鳴くなるみよし野のたのむの雁をいつか忘れむ

○武藏鑑 昔此の國から出した鑑。鑑は馬の兩方の腹にかけ

るからそなたをのみかけて思ふといふ意

を聞かせたのだ。

○音もせずなりにけ

れば それきり消息も絶えてしまつたの

で。

○訪へはいふ 訪へ

はうるさしといふ。

○そこなる女 陸奥

の女。

○せちに 切に。心

に深く。

○死なずは 死なむ

よりは。

○くはこ 置。置は

離れ一つの浦の中に

籠るのがあるから、

それを羨んでいつた

のだ。

○玉の緒ばかり 命

は短くても。

となむ。人の國にても、かゝることは絶えずぞありける。

〔十〕昔、男、東へ行きけるに、友だちに道よりいひおこせける、

忘るなよ程はくもるになりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで

〔十一〕昔、男ありけり。人の女をぬすみて、武藏野へ率て行く程に、盗人なりければ、

國守にからめられにけり。女をば叢の中に隠しおきて逃けにけり。道くる人「この野は

盗人あなり。」とて、火つけむとすれば、女わびて、

武藏野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

と詠むを聞きて、女をば取りて、ともに率ていにけり。

〔十二〕昔、武藏なる男、京なる女の許に、「聞ゆれば恥かし、聞えねば苦し。」と書きて、

表書に武藏鑑と書きて、おこせて後、音もせずなりにければ、京より、女、

武藏鑑さすがかけてたのむには訪はぬもつらし訪ふもうるさし

とあるを見てなむ、堪へがたき心地しける。

訪へばいふ訪はねば恨む武藏鑑かゝる折にや人は死ぬらむ

〔十三〕昔、男、陸奥國にすゝろに行き至りにけり。そこなる女、京の人はめづらかにや

○きつにはめなむ
 きつは水を蓄へる木
 箱。鶏を水に浸して
 腹を冷す。青鳴が
 止む。いふ。こは
 鶏が青鳴をしたのを
 夜が明けたものと思
 つて夫をかへしてし
 まつたのが悲しいか
 ら夜があけたらその
 わるい鶏をきつには
 めようといふのであ
 る。

○栗原のあねは陸
 奥國栗原郡栗原郷姉
 波。こゝに名高い松
 があつたのである。

○思ひけりくご
 男が自分を慕つて
 居ると思つて、喜ん
 でそのことばかりい
 つてゐた。

○なでふ事なき何
 さいふこと無き人、
 つまらないものの
 娘。

○怪しうその女の
 様子が由緒ありけに
 見えただ。

覚えけむ、せちに思へる心なむありける。さて、かの女、
 なかく戀に死なすはくにぞなるべかりける玉の緒ばかり
 歌さへぞ、ひなびたりける。さすがに哀れと思ひけむ、いきて寐にけり。夜ふかく出で
 なければ、女、
 夜も明けばきつにはめなむくだ鶏のまだきに鳴きてせなをやりつる
 といへるに、男、京へなむいぬるとて、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを
 といへりければ、よろこびて、「思ひけりく」とぞいひ居りける。

〔十四〕昔、みちの國にて、なでふ事なき人の女に通ひけるに、怪しうさやうにてあるべ
 き女にはあらず見えければ、
 信夫山しのびてかよふ道もがな人の心のおくもみるべく

女、限りなくめでたしと思へど、さるさかなきえびす所にて、いかゞはせむ。

〔十五〕昔、紀有常といふ人ありけり。三代の帝に仕うまつりて、時に遇ひけれど、後は
 世かはり時移りにければ、世の常の人のこともあらず。人からは心美しう、あてはかな

○さるさかなきこ
 んな娘少女では、
 きても都人の氣には
 入るまいと思つて、
 返事もしなかつた。
 昔は陸奥出羽等は凡
 てえびすといつた。
 ○三代の帝 仁明文
 徳明和。有常十九歳
 仁明天皇に仕へ奉る
 ○時に遇ひけれど、
 妹の腹に文徳の一の
 皇子惟喬親王うまれ
 給ひ、一時世にさき
 めいた。
 ○世の常の人のこと
 時代の變遷と共に
 失脚して世の常の人
 以上に衰へた。
 ○床はなれ 床離れ
 で、夫婦の間の疎く
 なるをいふ。
 ○十といひつ、四
 十年。
 ○夜のもの 夜具。
 ○みけし 御衣又み
 ぞ。
 ○露やまがふ 露か
 んと思ふまで涙が多く
 おちた。

ることを好みて、こと人にも似ず。よのわたらひ心もなく、貧しくても、なほ昔よかりし
 時の心ながらに、世の常のことも知らず。年比あひなれたる妻やうく床はなれて、遂に
 尼になりて、姉の先だちて尼になりけるが許へ行く。男、まことにむつまじき事こそな
 かりけれ。今はとていくを、いとあはれとは思ひけれど、貧しければするわざもなかりけ
 り。思ひわびて、懇に相語らひける友だちの許に、「かうく今はとてまかるを、何事も
 聊かなる事もえせで遣すこと。」と書きて、奥に、

手を折りてあひみしことを數ふれば十といひつ、四は經にけり
 この友だちこれを見て、いと哀れと思ひて、夜ののまで送りて詠める、
 年だにも十とて四は經にけるをいくたび君をたのみきぬらむ
 かくいひ遣りければ、よろこびに添へて、

これやこの天の羽ごろもむべしこそ君がみけしとたてまつりけれ
 よろこびに堪へかねて、又、

秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙の降るにぞありける
 〔十六〕昔、年比おとづれざりける人の、櫻の盛りに見に來たりければ、あるじ、

○年にまれなる一年の内に稀に来る人
○くれなるに 白菊の花もうつろへは紅に匂ふさいふが、それは何處ぞ。

○こを々に たわ、に。挽むばかりに。
○知らずよみに 男はわざと女の心を知らぬ様子に。

○官仕へしける 男がある貴人の北の方に仕へてゐた時分。

○御達 その北の方に仕へてゐる女房。

○かれにけり 別れてしまつた。

○ふる 在り経る。

○風はやみ 風がはやいので。風は他の男をいつたのだ。

○かくこそ秋の春ながらも秋のやうに色深く染めたのは、わが志の深いのを象徴したものだ。

○世のありさま 夫婦間の様子。

○けしう せういふ氣まづい事があつてかういふ事になつた

○男は心づかない。

○何處をはかりともどこをあてさいふどこもないから。

○我やすまひし 我やすみしで、眞心をこめて契つてゐたのの意。

あたなりと名にこそ立てれさくらばな年にまれなる人も待ちけりかへし、

今日こそば明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

〔十七〕 昔、なま心ある女ありけり。男ちかうありけり。女、歌よむ人なりければ、心むとて、菊の花のうつろへるを折りて、男の許へやる、

くれなるに匂ふはいづら白雪の枝もとを、に降るかとも見ゆ男、知らずよみに詠みける、

紅くれなるにほふがうへの白菊は折りける人のそでかとも見ゆ

〔十八〕 昔、男、官仕へしける女の方に、御達なりける人をあひ知りて、程もなくかれにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものにも思ひたらねば、女、

天雲のよそにも人のなりゆくかさすがに目には見ゆるものからと詠めりければ、男、かへし、

ゆきかへりそらにのみしてふることはわが居る山の風はやみなりと詠めりけるは、あまた男ある女になむありける。

〔十九〕 昔、男、大和にある女を見て、よばひてあひにけり。さて程経て、宮つかへする人なりければ、歸りくる道に、三月ばかりに、かへでの紅葉のいとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる、

君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれとてやりたりければ、返り事は、京につきてなむもて來たりける、

いつの間かにうつろふ色のつきぬらむ君がさとはは春なかるらし

〔二十〕 昔、男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるを、いかゞありけむ、いさゝかなる事につけて、世の中をうしと思ひて、出でていなむと思ひつゝ、かかる歌をなむよみて、ものに書きつけける、

いでていなば心軽しといひやせむ世のありさまを人は知らずとよみ置きて出でていにけり。この男かく書きおきたるを見て、けしう心おかるべきことも覺えぬを、何によりてならむと、いといたう泣きて、いづ方に求め行かむと、門に出で

て、とみかうみ見けれど、何處をはかりとも覺えざりければ、歸り入りて、

思ふかひなき世なりけりとし月をあたにちぎりて我やすまひし

○人はいさ 人は女をさす。
 ○玉かづら 女の頭にかけるもの。こゝは女の装をいふ。
 ○念じわびて こらへ兼ねて。
 ○忘るゝ草 忘れ草。共に住む事は出来ずとも、せめて忘れぬ様になりさしたい。
 ○思ひけり 忘れ草を植ゑるさいふことが聞きたい、さうすれば我を思つてゐるといふことがわかるから。
 ○ありしよりけに 別れてゐた時よりもまさつて。
 ○立ちぬる雲の 漂ふ雲の如く。
 ○おのが世に 元通り夫婦となりてわが思ふ儘に一家の事を取り行ふ。
 ○はかなくて これさいふ譯もなくて。

といひてながめ居り。

人はいさ思ひやすらむ玉かづら面影にのみいと見えつゝ、この女いと久しくありて、念じわびてにやありけむ、いひおこせける、今はとて忘るゝ草のたねをだに人の心にまかせずもがな

かへし、

忘れ草植うとだに聞くものならば思ひけりとは知りもしなまし又々ありしよりけにいひかはして、男、

忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しきかへし、

中空なかぞらに立ちぬる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかなとはいひけれど、おのが世になりにければ、うとくなりけり。

〔二十一〕昔むかしはかなくて絶えにける中、なほや忘れざりけむ、女の許もとより、うきながら人をばえしも忘れねばかつうらみつゝなほぞ戀しきといへりければ、さればよと思ひて、男、

逢ひ見ては心ひとつをかは鳥の水の流れて絶えじとぞ思ふ

とはいひけれど、その夜いきてねにけり。いにしへゆくさきの事どもなどいひて、

秋の夜のちよを一夜ひとよになすらへて八千夜しねばや飽く時のあらむかへし、

秋の夜の千夜をひと夜になせりともことば残りて鳥や鳴きなむいにしへよりも、あはれにてなむ通ひける。

〔二十二〕昔むかし田舎いんげわたらししける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、成人おとなになりければ、男も女も、はぢかはしてありけれど、男は、この女をこそ得めと思ひ、女も、この男をこそと思ひつゝ、親おやのあはすることも聞かでないありける。さてこの隣となりの男の許もとよりかくなむ、

筒井筒つづみづつみあづゝにかけしまろがたけおひにけらしなあひ見ざるまに女、かへし、

くらべこしふりわけがみも肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべきかくいひくゝて、遂に本意ほんいの如くあひにけり。さて年ごろふる程に、女の親おやなくなりて、

○さればよ 女が折れて来たと思つたら、一つ戀してやらうといふ氣になつて
 ○心ひきつを 逢ひ見る事はしないで、たがひに思ふばかりでありたい。
 ○なすらへて 輕にさうして。
 ○あはれにてなむ 男は前よりも一層女をかはゆきものと思つて。
 ○親のあはするこゝ 親の勤める結婚の話などは、まるで耳にも入れなかつた。
 ○筒井筒 筒の如く丸く掘つた井を筒といひ、口調を整へる爲に繰返して筒井筒といつたのである。
 ○かけし 子供の時井筒に丈をくらべるをいふ。

○おひにけらしな
成長して丈も高くな
つたらう。おまにな
なつたのだから、今
は夫婦の契りをしよ
うの意。
○ふりわけがみ 髪
を結はないで後に垂
れたるをいふ。
○いふかひなくて
徒らに手を空しうし
て目を暮さうや。
○いきかよふ所 高
安郡へ商賣に出懸け
て往つたが、そこで
或女になじんで、其
女の許に通ふやうに
なつた。
○こころ 他の男に
心を移したのではあ
るまいか。
○いさようけさうじ
て美しう化粧して。
○をさくかよはず
あんまり通はない
○心にくくもつくり
けれ 始の内は奥床
しく化粧してゐた
が。

たよりなくなるまゝに、もろともいふかひなくてあらむやはとて、河内國高安郡にい
きかよふ所いで來にけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へる氣色もなく、出
たててやりければ、男、こと心ありて、かゝるにやあらむと思ひ疑ひて、前裁の中にか
れ居て、河内へいぬる顔にて見れば、この女いとうけさうじて、うち眺めて、

かぜ吹けばおきつしら波たつた山よはにや君がひとり越ゆらむ
とよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へも、をさくかよはずなりにけ
り。さてまれくかの高安に來て見れば、はじめこそ心にくくもつくりけれ、今はうちと
けて、髪を頭にまきあけて、おもながやうなる女の手づから飯匙をとりて、氣子の器に
もりけるを見て、心うがりて行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やり
て、

君があたり見つゝを居らむ生駒山くもなくしそ雨は降るとも
といひて見いだすに、「からうじて大和人來む」といへり。よろこびて待つに、たびく過
ぎぬれば、
君こむといひし夜毎に過ぎぬれば頼まぬものの戀ひつゝぞふる

○飯匙 杓子。
○氣子 飯を盛る器
○見つゝを「を」詠
歎の助詞。
○頼まぬものの頼
まぬながら。
○男すまず 男は通
はない。
○あらたま 年の枕
詞。
○にひまくら 男女
始めて逢ふをいふ。
○梓弓ま弓 神樂歌
に「弓さいへはしな
なきものを梓弓まゆ
みつき弓しなこそあ
るらし。」を本歌とし
て詠んだので、弓に
品々ある如く、我も
種々のうき事どもを
忍んで、年を経てお
前を愛したやうに又
後の夫を愛せよ。

といひけれど、男すまずなりにけり。

〔二十三〕 昔、男、女、片田舎に住みけり。男、宮仕へしにとて、別れを惜みて行きける
まゝに、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、又いと懇にいひける人に、「今宵はあ
はむ」と契りたりけるに、彼の男きたりけり。「この戸あけ給へ。」と叩きけれど、あけて、
歌をなむよみて出したりける、

あらたまの年の三年を待ちわびてたゞ今宵こそにひまくらすれ
といひ出したりければ、

梓弓ま弓つき弓としを経てわがせしがごとうるはしみせよ
といひて、いなむとしければ、女、

梓弓ひけどひかねど昔よりこゝろは君によりにしものを

といひけれど、男歸りにけり。女いと悲しくて、後に立ちて追ひゆけど、え追ひつかで、
清水のある所にふしにけり。そこなる岩に、およびの血して書きつけける、

あひ思はでかれぬる人をとゞめかね我が身は今ぞ消えはてぬめ
と書きて、いたづらになりけり。

○梓弓ひけむ 種々の憂き事を前の歌に弓に喰へていつた所から、こゝにも兎にも角にも心を君に寄せて離れなかつたに見捨て、立ち去るはうらめしい。

○いたづらに 死んでしまつた。

○みるめなき 我が身を見るめなき浦と知らぬはの意で、逢ひ難い我が身と知らないからといふ事をみるめの無い浦に海人がみるめを刈りに来るに譬へたのだ。

○わびたりける 女を手に入れ得ないでわびて居るのを慰める友があつたので。

○袖に湊の 友を唐船に譬へ、心の嬉しさに涙の多く流れ出づるをいつたのだ。

〔二十四〕 昔、男ありけり。逢はじともいはざりける女の、さすがなりけるが許にいひやりける、

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はでぬる夜ぞひぢまさりける
色ごのみなる女、かへし、

みるめなき我が身を浦と知らねばやかれなで蟹の足たゆく来る

〔二十五〕 昔、男、五條わたりなりける女をえ得ずなりにける事と、わびたりける人の返り事に、

おもほえず袖に湊の騒ぐかなもろこしぶねの寄りしばかりに

〔二十六〕 昔、男、女の許に一夜いきて、又もいかすなりにければ、女の親腹立ちて手洗ふ所に、貫簀をとりてなけすてければ、盥の水に泣く影の見えけるを、みづから、

我ばかり物思ふ人はまたもあらじと思へば水の下にもありけり

と詠めりけるを、かの來ざりける男聞きて、

水口にわれや見ゆらむかはづさへ水の底にてもろごゑになく

〔二十七〕 昔、色ごのみなりける女、出でていにければ、いふかひなくて、男、

○貫簀 水の外へ飛び散らぬ様に盥の上にかける簀。

○あひかたみ かたみは竹籠。逢ひ難きを云ひかけ、其水がある所から、水もらさじと續けたのである。

○春宮の女御 春宮の御母女御の意。その女御方の人の賀が花の頃あつたのでかくいつたのである。

○はつかは 儼の儀。男は度々逢ひたくも思ふが、女は稀にし逢はぬのである。

○玉の緒ばかり 逢ふことは玉の緒の短きが如くなるに、なぞなれは我につらき君の心の長く見えるのだらうの意。

などてかくあひかたみともなりぬらむ水漏らさじと契りしものを

〔二十八〕 昔、春宮の女御の御方の花の賀に、召しあけられたりけるに、近衛づかさなりける人、

花に飽かぬ歎きはいつもせしかども今日のこよひに似る時はなし

〔二十九〕 むかし、男、はつかなりける女のもとに、

逢ふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心のながく見ゆらむ

〔三十〕 昔、男、宮の中にて、ある御達の局の前をわたるに、何の仇にか思ひけむ、「よしや草葉のならむさが見む」といひたれば、男、

罪もなき人をうけへばわすれ草おのがうへにぞ生ふといふなる

といふを、ねたう女もおもひけり。

〔三十一〕 昔、男、物いひたる女に、年比ありて、

いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな

といへりけれど、何とも思はずやありけむ。

〔三十二〕 昔、男、津國免原郡に住みける女に通ひける。このたび歸りなば、又は來じと

○こもり江 蘆なご
 でおははれた江。
 ○さして 推測る意
 ざうして推測つて知
 ることが出来ようこ
 んいふ意を、言葉の縁
 から舟さす棹のさし
 てさいつたのだ。
 ○いへばえに いへ
 はえいはぬにの畧で
 口に出して言へば言
 ひ得ないので言はな
 いでゐるこの意。
 ○沫緒 結び方の
 名。よく縛つて沫結
 びに結び堅めた二人
 の中だから、中絶し
 ても又もこの如く逢
 はうこの意。
 ○夕か伊待たぬ 朝
 顔は朝の開だけ咲い
 て夕日の影を待たず
 に凋むから、變り易
 い意にいつたのだ。

思へる氣色を見て、女のうらみたれば、男、
 蘆邊よりみち來るしほのいやましに君に心を思ひますかな
 かへし、

こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき
 田舎人のことばにては、よしやあしや。

〔三十二〕 昔、男、つれなかりける人の許に、

いへばえにいはねば胸の騒がれて心ひとつに歎く頃かな
 おもひくいていへるなるべし。

〔二十四〕 昔、男、心にもあらで、絶えたる人の許に、

玉の緒を沫緒によりてむすべれば絶えての後も逢はむとぞ思ふ

〔二十五〕 昔、男、忘れぬるなめりと問ひ言しける女の許に、

谷せばみ峯まではへる玉かづら絶えむと人をわが思はなくに

〔三十六〕 昔、男、色好みなりける女に逢へりけり。うしろめたくや思ひけむ、
 われならで下紐とくなあさがほの夕か伊待たぬ花にはありとも

かへし、

ふたりして結びし紐をひとりしてあひ見るまでは解かじとぞ思ふ

〔三十七〕 昔、紀有常、ものへいきて、久しう歸らざりけるに、いひやる。

君により思ひならひぬ世の中の人はいふをや戀といふらむ

かへし、

ならばねば世の人ごとに何をかも戀とはいふと問ひし我しも

〔三十八〕 昔、西院の帝と申すみかどおはしましけり。その帝のみこに、崇子と申すいま

そかりけり。その皇子うせたまひて、御葬の夜、その宮の鄰なりける男、御葬見むと

て、女車にあひ乗りて出でたりけり。いと久しうるていで奉らず、うち歎きて止みぬべ

かりける間に、天の下の色好み、源 至といふ人、これも物見るに、この車を女車と

見て、寄り來てとかなまめく間に、かの至、螢をとりて車に入れたりけるを、車なりけ

る人、この螢のともす火にや見ゆらむと思ひて、消ちなむとす。さて乗れる男のよめる、

出でていなばかぎりなるべし燈盡き年経ぬるかとなき聲を聞け

かの至、かへし、

○崇子 承和十五年
 五月十五日薨去、御
 年十九。
 ○るていで奉らず
 輦車の御出門の遅い
 のをいふ。
 ○出でていなば 輦
 車を挽き出でればこ
 れが限りの御門出
 だ。
 ○燈盡き 皇女の薨
 去をいふ。
 ○年経ぬるか 年経
 ぬるかばで、年を経
 給うて御老年の事な
 ら止むを得ぬが、若
 くておかくれになつ
 たのだから、人々の
 悲しみ歎く聲を聞け
 と戯れかゝるのをた
 しなめたのだ。
 ○なほぞありける
 面白くない。平凡だ。

○さかしらする親、
りこうぶる親。若い
男が語らばうとする
女をおひやらうとする
からいふ。

○思ひもぞつく 執
著が出来て離れ難く
なつてはならない。

○人の子なれば 男
は親が、りだから、
強ひて女を留めて置
くだけの力が無い。

○涙川 飽かぬ別れ
の涙を川のやうに流
したからかくいふ。

○いとひては いや
で別れるのなら何で
もないがさうでない
のだから、親が追ひ
出さうとたくんむ時
よりも勝つて今日は
悲しい。

○心苦しかりければ
氣の毒むつたので

いとあはれなくぞ聞ゆる燈火の消ゆるものとも我は知らずな
天の下の色好みの歌にては、なほぞありける。

〔三十九〕 昔、若き男、けしうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞ
つくとして、この女を外へ逐ひやらむとす。さこそいへ、まだ逐ひやらす。人の子なれば、
心の勢ひなくて、え止めず。女もいやしければ、すまふ力なし。さる間に思ひはいやまさ
りにまさる。俄に、親この女を逐ひうつ。男、血の涙を流せども、止むるよしなし。率て
出でていぬ。女、歸る人につけて、

いづこまで送りはしつと人間はばあかぬわかれの涙川まで
男泣くくよめる、

いとひては誰か別れの難からむありしにまさる今日は悲しも
とよみて絶え入りければ、親あわてにけり。なほざりに思ひてこそいひしか、いとかくし
もあらじと思ふに、まことに絶え入りければ、惑ひて願など立てけり。今日の入相ばか
りに絶え入りて、又の日の戌の時ばかりになむ、辛うじて息出でたりける。昔の若人は、
さるすける物思ひをなむしける。今の翁まさに死なむやは。

○緑衫の袍 袍は禮
服の上衣。緑衫は緑
色で、六位の着用。

○紫の色こき時は
妻をいとしく思ふ所
から、そのゆかりま
であはれに思はれて
心苦しい事の聞過し
難く、この袍を送る

○さりさて さうか
といつて今更思ひ切
るこも出来ない。

○出でて來し 出で
來た私の足跡さへま
た消えないのに、今
は誰の通ひ路なる
たらう。

〔四十〕 昔、女、はらから二人ありけり。一人は賤しき男の貧しき、一人はあてなる男の
徳ある持ちたりけり。賤しき男もたる、十二月の晦日に、袍を洗ひて、手づから張りけ
り。志はいたしけれど、さる賤しき業も習はざりければ、袍の肩を張りやりてけり。
せむ方なくてたゞ泣きに泣きけり。これを、かのあてなる男聞きて、いと心苦しかりけれ
ば、いと清らなる緑衫の袍を、たゞ片時に見出でてやるとて、

紫の色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける
武藏野の心なるべし。

〔四十一〕 昔、男、色好みとしるく女を相知れり。されど憎く將あらざりけり。屢い
きけれど猶いと後めたく、さりとて、いかではた得あるまじかりける中なりければ、二日
三日ばかりさはる事ありて、え行かでかくなむ、
出でて來しあとだにいまだかはらじを誰が通ひ路と今はなるらむ
もの疑はしさに詠めるなりけり。

〔四十二〕 昔、賀陽親王と申す皇子おはしましけり。その親王女を思しめして、いとかし
こく恵みつかう給ひけり。いとなまめきてありけるを、わかき人はゆるさざりけり。われ

○けしきをさりとて
女が男の心を迎へて
○名のみたつ 杜鵑
は數多の里を鳴き渡
るこいふ評判が立つ
てゐるがさうではな
い。

○縣へゆく 京より
任地に行く。

○われさへもなく
裳なくに喪なくをい
ひかけ、凡てよから
ぬ事を喪といふ。君
の出發を祝つて、そ
の爲わが身まで禍事
がなくなつたの意。

○人の娘のかしづく
或家の秘藏の娘が
の意。

○宵はあそび居りて
宵は管絃の遊など
で氣が紛れてゐるが

○その事もなく 我
を戀うて死んだのだ
から何さなく悲しい

○めかるれば 目難
るれば、離れて相
逢はぬをいふ。
○おもほえなくに
おもほえぬに、我
は目かるとも覺えぬ
に、さうしてさう
おつしやる、こちら
は忘れる時がないか
らいつも面影に立つ
にの意。

○いかでと思ふ ぐ
うぞして逢ひたいと
思ふ女があつた。
○大幣 祓の時陰陽
師が持つ串にさした
幣で、祓ひ終れば人
人之を引寄せて撫で
るので、その大幣の
引手数多なやうにあ
またの所に通はれる
のだから、戀におつ
しやるのは有難いが
頼みにならないの意

のみと思ひけるを、又人聞きつけて、文やるとて、郭公のかたをつくりて、
ほとゝぎす汝がなく里のあまたあれば猶疎まれぬ思ふものから
といへり。この女、けしきをとりて、

名のみたつしでの田長は今朝ぞなく庵あまたにうとまれぬれば
時は五月になむありける。男、かへし、

いほり多きしでの田長はなほたのむわが住む里に聲し絶えずば

〔四十二〕昔、男ありけり。縣へゆく人に、馬のはなむけせむとて、呼びたりけるに、う
とき人にしあらざりければ、家刀自して杯ささせて、女の装束被けむとす。主の男、歌
よみて裳の腰に結びつけさす。

いでて行く君がためにと脱ぎつればわれさへもなくなりぬべき哉

この歌は、あるが中に面白ければ、心留めてよますば、腹に深き味ひもいでこじ。

〔四十四〕昔、男ありけり。人の娘のかしづく、いかでこの男にもいはむと思ひけり。
うち出でむこと難くやありけむ、物病になりて死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか。」といひ
けるを、親聞きつけて、泣くく告げたりければ、惑ひ來りけれど、死にければ、つれづ

れと籠り居りけり。時は六月の晦日、いと暑きころほひに、宵はあそび居りて、夜ふけて
や、涼しき風吹きけり、螢たかく飛びあがる。この男見ふせりて、

飛ぶ螢雲の上までいぬべくば秋風ふくとかりに告げこせ

暮れ難き夏の日ぐらし眺むればその事となく物ぞ悲しき

〔四十五〕昔、男、いとうるはしき友ありけり。片時去らずあひ思ひけるを、人の國へい
きけるを、いとあはれと思ひて別れけり。月日経ておこせたる文に、

あさましう對面せで、月日経にけること、忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびて
なむ侍る。世の中の人の心は、めかるれば忘れぬべきものにこそあめれ。

といへりければ、よみてやる、

めかるともおもほえなくに忘らるゝ時しなれば面影にたつ

〔四十六〕昔、男、ねんごろにいかでと思ふ女ありけり。されど、この男をあだなりと聞
きて、つれなさのみ増りつゝいへる、

大幣のひく手あまたに聞ゆれば思へどえこそ頼まざりけれ

かへし、男、

○初草の 初草は若草をいふ。若草のやうにの意で、次のめづらしにかゝる。

○うらなく 隔てなくの意。かねてへたてなく思つてゐたが、さういふ心の人と知つたらうらなくは思はないのに、さてさてくやしいの意。

○怨むる人を 怨んでゐる女を却つてこちらから恨み返して
○どりの子 雛卵。十づゝミをは百で、雛卵を百重ねるのは至難の事だが、しかしそれも重ねる術はある、たゞ變り易い人の心はさうするこゝも出来ない。
○このよ 男女の中をいふ。

大幣と名にこそ立てれ流れても遂による瀬はありてふものを
〔四十七〕 昔、男ありけり。馬のはなむけせむとて、人を待ちけるに、來ざりければ、今ぞ知る苦しきものと人待たむ里をばかれず訪ふべかりけり
〔四十八〕 昔、男、妹のいとをかしけなるが、琴ひきけるを見をりて、うら若みねよけに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふかへし、

初草のなど珍しきことの葉ぞうらなく物を思ひけるかな

〔四十九〕 昔、男ありけり。怨むる人をうらみて、

鳥の子を十づゝとをはかさぬともいかゞ頼まむ人の心を

といへりければ、

朝露は消え残りてもありぬべし誰かこの世を頼みはつべき

また、男、

吹く風に去年の櫻は散らすともあな頼みがた人の心は

また、女、かへし、

行く水にかすかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

(また、男、

ゆく水とすぐるよはひと散る花といづれ待ててふことをきくらむ)

あだくらべ、かたみにしける男女の、忍びありきしける事なるべし。

〔五十〕 昔、男、人の前裁に菊うゑけるに、

植ゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

〔五十一〕 昔、男ありけり。人のもとより飾粽をおこせたりける返り事に、

あやめかり君は沼にぞ惑ひけるわれは野に出でて狩るぞわびしき

とて、きじをなむやりける。

〔五十二〕 昔、男、逢ひがたき女に逢ひて、物語などする程に、鳥の鳴きければ、

いかでかはとりの鳴くらむ人しれず思ふ心はまだ夜ぶかきに

〔五十三〕 昔、男、つれなかりける女にいひやりける、

行きやらぬゆめ路をたどるたもには天つ空なる露やおくらむ

〔五十四〕 昔、男、思ひかけたる女のえ得まじうなりての世に、

○飾粽 粽は五月五日の節物。五色の絲で捲き飾つたもの。
○あやめかり 昔は菖蒲で粽を巻みもしたのである。
○逢ひがたき 何か事情があつて中々逢ひ難い女。
○天つ空なる 終夜夢路を辿つて目がさめてみるに涙も覺えぬ程袂がぬれた。さては夢路には空の露がおくのたらう。
○人しれぬ 人にかういひ出されぬ。
○われから 螢の別荘に住む時。及ばぬ戀に、心はもよより我から身をも碎いたこゝろの意で、二三の句は「われから」の序である。

○心つきなき 似合はしからぬ。
 ○長岡 山城乙訓郡
 ○官はら 官たち。
 ○事もなき 難無き。
 ○見をりけるに 田に出て稻刈の見張をしてゐた。
 ○いみじの 色好みの人に不似合の事なので「まあ威心な人だ」と戯れたのだ。
 ○住みけむ人の 男が隠れて見えないのを住む人もなく年を經て荒れたやうに戯れていつたのだ。
 ○すたく 多く集る。女どもの羈り來るをだまへいふ。
 ○うちわびて 世をわびての事なら行かうが、なぶり者になりには行かぬの意。

思はずはありもすらめど言の葉のをりふしごと頼まるゝかな
 〔五十五〕 昔、男、臥して思ひ起きて思ひ、思ひあまりて、わが袖は草の庵にあらねども暮るれば露のやどりなりけり
 〔五十六〕 昔、人しれぬ物思ひする男、つれなき人の許に、戀ひわびぬ蟹の刈る藻に宿るてふわれから身をも碎きつるかな
 〔五十七〕 昔、心つきなき色好みなる男、長岡といふ所に家造りて居りけり。その鄰なりける宮ばらに、事もなき女共ありけり。田舎なりければ、田刈らむとて、この男見をりけるに、「いみじのすき者の所行や。」とて、集りて入り來れば、この男、にけて奥に隠れければ、女、荒れにけりあはれいく世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬといひて、この宮に集り來居てありければ、この男、律おひて荒れたるやどのうれたきはかりにも鬼のすだくなりけり
 うちわびて落穂拾ふときかませば我も田面に行かましものを

○宇佐の使 宇佐八幡宮は古來朝廷の尊崇厚く、御代の始や事ある時には勅使を立てられた。その勅使を馳走する役人を祇承の官人といふ。
 ○肴 魚でも菜でも凡て酒のあはせにする物をなまといふ。こは柑子の實をいつたのだ。
 ○そめ河 筑紫にある河。筑紫に來て染河を渡るに、さうして色に出ぬこゝがあらう、所柄色に出るのは當然だの意。
 ○たはれ島 肥後風流島。たはれといふ名は負うてゐるが更に事實はない。染河も同様、元來君がすきものなのだの意。

〔五十八〕 昔、男、京をいかゞ思ひけむ、東山にすまむと思ひ入りて、住みわびぬ今はかぎりの山里に身を隠すべき宿もとめてむかくて、ものいたく病みて死に入りたりければ、面に水そゝぎなどして、息出でて、わがうへに露ぞおくなる天の河とわたる船の櫂のしづくかとなむいひて、いき出でたりける。
 〔五十九〕 昔、男ありけり。宮仕へいそがはしく、心もまめならざりければ、家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の國へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある國の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ、さらすば飲まじ。」といひければ、かはらけ取りて出したりけるに、肴なりける橘をとりて、さつき待つ花橘の香をかはばむかしの人の袖の香ぞするといひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りける。
 〔六十〕 昔、男、筑紫までいきたりけるに、「これは色好むなり、すきものぞ。」と簾の中なる人のいひけるを聞きて、そめ河を渡らむ人のいかでかは色になるてふことなかるべき

○匂ひはいづらに
ほひやかに美しかつ
た昔の容貌は、ごこ
へ清え失せたのた
らう。

○まさり顔なる
つれなきの勝り顔なる
の意で、これがあの
我を厭うて逢ふ身を
逃れて、年月経ても
思ひなほらず、つれ
なきの勝り顔な人な
のたらの意。

○世ごゝろある女
色好みな女。

○語りけり 夢物語
に託して、それにな
く夢占をさせたの
だ。

○つくも髪 江浦草、
本蘭ともいひ、老女
の髪の短く亂れたの
を喰へていつたの
で、その年の寄つた
のを百年に一年たら
ぬといつたのだ。

女、かへし、

名にしおはばあだにぞあるべきたはれ鳥波のぬれ衣きるといふなり

〔六十一〕昔、男の年ごろ音づれざりける女、心かしくやあらざりけむ、はかなき人のことにつきて、人の國なりける人につかはれて、もと見し人の前にいで来て、物くはせなどしけり。長き髪きぬの袋に入れて、遠山すりの長き襖をぞ著たりける。「夜さりこのありつる人給へ。」と主人にいひければ、遣せたりけり。男、「我をば知らずや。」とて、

いにしへの匂ひはいづら櫻花ちれるがごともなりにけるかな

といふを、いとほづかしく思ひて、答へもせで居たるを、「など答へもせぬ。」といへば、「涙のこぼるゝに目も見えず、ものもいはれず。」といふ。また男、

これやこの我にあふみをのがれつゝ年月ふれどまさり顔なる

といひて、衣脱ぎて取らせけれど、棄てて逃げにけり。いづちいぬらむとも知らず。

〔六十二〕昔、世ごゝろあるおうな、いかでこの情あらむ男にあひ見てしがなと思へど、いひ出でなむもたよりなければ、まことならぬ夢がたりを、むす子三人を呼びあつめて語りけり。二人の子は、情なくいらへて止みぬ。三郎なりける子なむ、「よき御男ぞいで來

○世の中の例として
世間の男は誰しも
思ふ人と思はぬ人と
あるのが習はしであ
るのに、この男は老
と若の別なく情を懸
けてやつた程の物の
哀れを知つた男だつ
た。

○男女密に語らふ
ある男の許へ手紙を
送つた女房があつた
が、その後隠れて逢
ふこともしなかつた
ので、ごこの局に
る女も更にわから
ない。男は不思議で
たまらず、歌をよん
でやつた。

○思ふには 逢はう
と思ふ心と人目を忍
ぶ心が心中に相争
うて、遂に忍ぶ方の
心が負けて、人目を
憚らず毎日逢うた。

む。」とあはするに、このおうな氣色いとよし。こと人はいと情なし。いかでこの在五中將

にあはせてしがなと思ふ心あり。狩し歩きける道にいき逢ひにけり。馬の口をとりて、「かうくなく思ふ。」といひければ、あはれがりていきて寢にけり。さて後、男見えざりければ、おうな、男の家にいきてかいまみけるを、男、ほのかに見て、

百年に一年たらぬつくも髪われを戀ふらしおもかけに見ゆ

といひて、馬に鞍置かせて出で立つけしきを見て、茨唐橘とも知らず、走り惑ひて、家に來てうち臥せり。男、かのおうなのせしやうに、忍びて立てりて見れば、おうなうち歎きて寢とて、

さむしろに衣かたしきこよひもや戀しき人に逢はでわが寢む

とよみけるを、男、哀れと思ひて、その夜は寢にけり。世のなかの例として、思ひ思はぬを、この人は、そのけぢめ見せぬ心なむありける。

〔六十二〕昔、男女密に語らふわざもせざりければ、いづくなりけむ怪しさに詠める。

吹く風にわが身をなさば玉すだれ隙もとめつゝ入らましものを

かへし、

○されは何の女が里へ下つたのを、男はなんのそれを結句い、ことにして。
 ○つぎめて 或日なんか朝早く女の許から歸つて来た處を主殿寮の役人に見付けられたので、あわてて自分で香をぬいで奥へ投げ込んで、宿直した風を装うた。
 ○かたはにしつ、見苦しい程女につきまじうた。
 ○祓の具 祓をするにつけて神に供へる物。
 ○けに 勝つて。
 ○佛の御名を 朝の動行にお出ましになつて、御心に入れて尊い御聲で佛の御名を御唱へになる。

とりとめぬ風にはありとも玉簾誰が許さばか隙もとむべき
 「六十四」昔、帝の時めきつかはせ給ふ女の、色許されたるありけり。大御息所とていますかりけるいとこなりけり。殿上に侍ひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひ知りたりけり。男、女方ゆるされたりければ、女のある所にいきて向ひ居りければ、女、「いとかたはなり、身も亡びなむ、かくなせそ。」といひければ、

思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにし換へばさもあらばあれ
 といひて、曹司におり給へば、いと曹司には、人の見るをもしのばで上り居ければ、この女思ひわびて里へゆく。されば何のよき事と思ひて、いき通ひければ、皆人聞きて笑ひけり。つとめて主殿寮の見るに、香はとりて奥に抛け入れてのほりぬ。斯くかたはにしつ有りわたるに、身も徒らになりぬべければ、遂に亡びぬべしとて、「この男いかにせむ、我がかゝる心やめ給へ。」と佛神にも申しけれど、いや増りにのみ覺えつゝ、猶わりなく戀しうのみ覺えければ、陰陽師、巫よびて、戀せじといふ祓の具してなむいきける。祓へけるまゝに、いと悲しきこと數まさりて、ありしよりけに戀しく覺えければ、
 戀せじと御手洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

○それにぞあなる女は聞き覺えのある男の聲とは思ふが。

○さりともと 自分は藏の中に押込められて、有れども無きが如き身とも知らないうで、かうして毎夜歌を歌ひ又笛を聞けば、女も聞き知つて逢ふたらうと思ふだらう、それが悲しい。
 ○水尾 清和天皇。
 ○みつの浦 三津の浦、數の三つにいひかけ、更に見るにいひかけて、難波津を見るに、三つの浦ごみに舟が澤山ある、これがこの世を渡る有様なのたらう、この海を渡る舟は。
 ○遣返しにあそびに。

といひてなむ往にける。

この帝は、顔貌よくおはしまして、曉には、佛の御名を御心に入れて、御聲はいと尊く申したまふを聞きて、女はいたう泣きけり。かゝる君に仕うまつらで、宿世つたなく悲しきこと、この男にほだされて、とてなむ泣きける。かゝる程に帝聞し召しつけて、この男を流し遣してければ、かの女をばいとこの御息所、まかださせて、藏に籠めてしをり給うければ、藏にこもりて泣く。

海士のかる藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかめ世をば怨みじ
 と泣きをれば、この男、人の國より夜ごとに來つゝ、笛をいとおもしろく吹きて、聲はいとをかして、歌を哀れにうたひける。かゝれば、この女藏に籠りながら、それにぞあなるとは聞けど、あひ見るべきにもあらでなむありける。

さりともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあらぬ身を知らずして
 と思ひ居り。男は女しあはねば、斯くし歩きつゝ、うたふ、

いたづらに行きては來ぬるもの故に見まくほしさに誘はれつゝ、
 (水尾の御時なるべし。大息所も染殿の後なり。五條后とも。)

○かくさふ 隠すの延語。昨日今日雲がたちまひ隠すのは、雪がいと白う木の末に降つたのがまるで花の様に見えるその美しさを人が見はやすのを嫉んでであらう。

○おりるつゝ 馬から下りて。

○雁鳴きて 雁がなき、菊の花も咲いて秋もいゝが、春の海邊には勝らぬ。

○狩の使 勅使として伊勢の國へ狩に遣はされた。

○いひつきにけり 懇に歡待されるうちに、さう／＼女にいひ寄つた。

○われて逢はむ ぐうしても逢はう。

○人しづめて 人を早く寝しづまらせて○齋官のかみかけたる 國守で齋官頭を兼ねたのが。

○酒飲しければ 終夜酒宴を張つて勅使を饗した。

○かち人の 徒歩人。えにしは縁に江をかけたので、たゞ一夜それもほんのかりそめの契りやかやうにわかれるのは、浅い縁だの意。

○續松の炭して 松明の炭で下の句を書きついだの意。

○またあふさかの 又逢ふ時もあらうといふ意に、都に歸つてもまた逢坂の關を越えてこゝに来て逢はうとの意を含ませたのである。

〔六十五〕昔、男、津の國に知る所ありけるに、兄弟友達などひきゐて、難波のかたにい

きけり。渚を見れば、舟どものあるを見て、

難波津をけふこそみつの浦ごとこれや此の世をうみわたる舟

これをあはれがりて、人々かへりにけり。

〔六十六〕昔、男、逍遙しに、思ふどちかい連ねて、和泉國へ二月ばかりにいきけり。河内國生駒山を見れば、曇りみ晴れみ、たちるる雲やまず、朝より曇りて、晝晴れたり。雪いと白う木の末に降りたり。それを見て、かの行く人の中に、たゞ一人よみける。

昨日けふ雲のたちまひかくさふは花のはやしを憂しとなりけり

〔六十七〕昔、男、和泉國へいきけり。津の國住吉郡すみよしの里住吉の濱を行くに、いとおもしろければ、おりるつゝ行く。ある人、「住吉の濱を詠め。」といふに、

雁鳴きて菊の花さく秋はあれど春のうみべにすみよしの濱

とよめりければ、みな人よますなりにけり。

〔六十八〕昔、男ありけり。その男、伊勢國に狩の使にいきけるに、かの齋宮なりける人の親、「常の使よりは、この人、能くいたはれ。」といひやりけり。親のいふことなりけれ

ば、いと懇にいたはりけり。朝には狩にいだし立ててやり、夕さはこゝにかへり來させけり。かく懇にいたはりける程に、いひつきにけり。二日といふ夜、男、「われて逢はむ。」といふ。女も、はた逢はじとも思へらず。されどいと人目繁ければ、え逢はず。使實とある人なれば、遠くも宿さず。女の聞も近くありければ、女、人を鎮めて、子一つ許りに男の許に來りけり。男、はた寝られざりければ、外の方を見出して臥せるに、月の朧なるに、人の影するを見れば、小さき童を先に立てて人立てり。男いと嬉しくて、我が寝る所に牽て入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語りあへぬほどに歸りにけり。男いと悲しくて寝ずなりにけり。つとめて評しけれど、我が人をやるべきにあらねば、いと心もとなくて待ち居れば、明け離れて暫しある程に、女の許より言葉は無くて、君や來し我や行きけむおもほえず夢かうつゝか寝てかさめてか

男、いといたう泣きて詠める、

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとは今宵さだめよ
と詠みてやりて、狩に出でぬ。野にありけど、心はそらにて、今宵だに人しづめて、いと疾く逢はむと思ふに、國守、齋宮のかみかけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜酒飲

○みるめかる いか
にすれば齋宮にお逢
ひ申されるかといふ
事を教へくれよとい
ふ意味を海松にかけ
ていつたのである。
○すきごいひける
女 好色の侍女がら
て、密に歌をよんで
送った。
○いがき 忌垣の約
で、神社の周囲の垣
こゝに神は暗に齋
宮をいつたのである
○神のいさむる 男
女相逢ふといふ事は
神の禁じ給ふ道なら
ねばの意。
○大淀の 松を女に
波を男にたゞへたの
で、古今集に「あふこ
とのなぎさにしよる
涙なればうらみでの
みぞ立歸りける。」

しければ、もはら逢ふこともえせで、明けば尾張國へこさむとすれば、男も女も人知れず
血の涙を流せどえ逢はず。夜やうく明けなむとする程に、女がたより出す杯に、歌を
書き出したり。とりて見れば、
かち人のわたれどぬれぬえにしあれば
と書いて未はなし。その杯のうらに、續松の炭して歌の末を書きつぐ、
またあふさかの關は越えなむ
明くれば尾張國へ越えにけり。
〔六十九〕 昔、男、狩の使より歸り來けるに、大淀のわたりに宿りて、齋宮のわらはべ
にいひかけける、
みるめかるかたやいづこぞ禱さしてわれに教へよ蟹の釣舟
〔七十〕 昔、男、伊勢の齋宮に、内の御使にて參れりければ、彼の宮にすきごといひけ
る女、私事にて、
ちはやぶる神のいがきも越えぬべし大宮人の見まくほしさに
男、かへし、

○月のうちの桂 萬
葉集「目には見て手
にはとられぬ月のう
ちの桂の如き妹をい
かにせむ」和名抄に
兼名苑を引いて「月
中有河、河上有桂
高五百丈。」
○岩根ふみ 萬葉に
「岩根ふみ重なる山
はあらねども逢はぬ
日多み戀ひ渡る哉。」
○大淀の濱に生ふて
ふみるの序で、み
るは見るに海松をか
けたのである。
○袖ぬれて 上の句
はみるの序で、よそ
ながら相見ると逢ふ
として止まうといふ
のは、さて薄情
なこさだの意。
○世に 大層すぐれ
て。

戀しくば來ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに
〔七十一〕 昔、男、伊勢國なりける女に、又もえ逢はで、鄰の國へいくとて、いみじう怨
みければ、女、
大淀の松はつらくもあらなくにうらみでのみもかへる波かな
〔七十二〕 昔、そこにはありと聞けど、消息をだにいふべくもあらぬ女の、あたりをあり
きて男の思ひける、
目には見て手にはとられぬ月のうちの桂の如き君にぞありける
〔七十三〕 昔、男、女をいたう怨みて、
岩根ふみかさなる山は隔てねど逢はぬ日おほく戀ひわたるかな
〔七十四〕 昔、男、伊勢國なる女に、「京に率ていきて逢はむ。」といひければ、女、
大淀の濱に生ふてふみるからに心はなぎぬかたらはねども
といひて、ましてつれなかりければ、男、
袖ぬれて蟹の刈り乾すわたつみのみるを逢ふにて已まむとやする
女、

○をしほの松 松は小鹽山に鎮座まします藤原氏の祖先天兒屋根神をいつたのでかく藤原氏の御息所が御參詣あらせられるのを御覽になつては、氏の御神も、今日は特に神代に天照大神から天孫を輔佐するやうにこの救命を承つた昔の事を思召し出されて満足に思はれるであらうの意で、松を御息所に比して、兼平と關係のあつた當時の事を思ひ出されるであらうといつたのである。

○田村の帝 文徳帝。
○右馬頭 兼平自ら。
○目はたがひながら 捧げ物を山さみちがへて。

岩間より生ふるみるめしつねならば汐干汐満ちかひもありなむ
また、男、

涙にぞ濡れつゝしほる世の人のつらき心は袖の雫か
世に逢ふことかたき女になむ。

〔七十五〕 昔、二條後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさむらひける翁、人々の祿たまはりけるついでに、御車よりたまはりて、詠みて奉りける、

大原やしほの松も今日こそは神代のこともおもひ出づらめ
とて、心にも悲しと思ひけむ、いかゞ思ひけむ知らずかし。

〔七十六〕 昔、田村の帝と申すみかどおはしましけり。その時の女御、多賀幾子と申すいまそかりけり。それ亡せ給ひて後のみわざ、安祥寺にて、やよひのつごもりにしけり。人捧げ物奉りけり。奉りあつめたるもの千捧ばかりありけり。そこばくの捧げ物を木の枝につけて、堂の前に立てたれば、山もさらに堂の前に動き出でたるやうになむ見えける。そのころ、右大將にいまそかりける藤原常行と申すいまそかりて、講の終るほどに、歌よ

む人々を召しあつめて、今日のみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ。右馬頭なりける翁、目はたがひながら詠みける、

山のみな移りて今日に逢ふことは春のわかれをとふとなるべし
と詠みたりけるを、今見ればよくもあらざりけり。そのかみはこれや勝りけむ、あはれがりけり。

〔七十七〕 昔、多賀幾子と申す女御おはしましけり。亡せ給ひて、七々日の御わざ安祥寺にてしけり。右大將藤原常行といふ人いまそかりけり。その御わざにまうで給ひて、かへさに、山科の禪師の親王おはします、その山科の宮に、瀧落し、水走らせなどして、おもしろく造られたるにまうで給ひて、「年比よそには仕う奉れど、近くはいまだ仕うまつらす。今宵はこゝに侍はむ。」と申し給ふ。親王喜び給ひて、夜のおましのまうでせさせたまふ。さるに、かの大將、出でてたばかり給ふやう、「宮仕への初めに、たゞなほやはあるべき。三條の不行幸せし時、紀國の千里の濱にありけるいとおもしろき石奉れりき。不行幸の後奉れりしかば、或人の御曹司の前の溝にすゑたりしを、「島好み給ふ君なり。この石を奉らむ。」と宣ひて、御隨身舎人してとりに遣す。いく程もなく持て來ぬ。この石、聞き

○禪師の親王 法親王。仁明第四の皇子。
○年比よそには 年來よそながら心を寄せてお仕へ申してをりましたが今夜こそお目通り致します。
○夜のおまし 寢所の支度をもおさせになつた。
○出でてたばかり 御前を退出して人々に相談した。
○なほ 黙の字の義で、何もしないで徒らにあるべきの意。
○三條の不行幸 父の西三條の邸への行幸をさす。
○島好み給ふ 庭がお好きであつた。
○氏のなかに 在原氏の中に。

○わが門に 我が門
と一門を掛けてい
ひ、わが一門に親王
がお生れになつて、
氏族の者悉くそのお
蔭を蒙るべきをい
ふ。

○千ひろある竹 千
尋で、丈の高い竹を
いふ。そして梁の孝
王の故事により、親
王を竹に比したので
ある。

○ぬれつゝぞ 三月
の下旬で、残る春は
幾日もないから、雨
の降るのに、強ひて
この藤の花を折つて
差上ゆるの意。

○左大臣 嵯峨第八
の皇子源融。

○千種 紅葉の濃く
薄く様々なるをい
ふ。

○かたる翁 下賤の
翁。かたるは乞食。

しよりは見るは勝れり。これをたゞに奉らばすゝろなるべしとて、人々に歌よませ給ふ。
右馬頭なりける人なむ、青き苔を刻みて、蒔繪のかたに、この歌をつけて奉りける、
あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ
となむよめりける。

〔七十八〕昔、氏のなかに親王うまれ給へりけり。御産屋に人々歌よみけり。御祖父がた
なりける翁の詠める、
わが門に千ひろある竹を植ゑつれば夏冬たれか隠れざるべき

（これは、貞數親王、時の人、中將の子となむいひける。兄の中納言行平の女の腹なり。）
〔七十九〕昔、衰へたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。いと面白う咲けりけり。三月
の晦日に、雨そほふるに、折りて人の許へ奉るとて、詠める、
ぬれつゝぞしひて折りつる藤の花春は幾日もあらじと思へば

〔八十〕昔、左大臣 臣いまそかりけり。賀茂川の邊に、六條わたりに、家をいとおも
しらく造りて住みたまひけり。十月の晦日た、菊の花うつろへるさかり、紅葉の千種に
見ゆる折、親王達おはしませせて、夜ひと夜酒飲しあそびて、夜あけもて行くほどに、こ

の殿のおもしろきを褒むる歌よむ。そこにありけるかたる翁、板敷の下にはひありきて、
人にみな詠ませ果てて詠める、
鹽竈にいつか來にけむ朝なぎに釣する舟はこゝによらなむ

となむ詠みける。陸奥國にいきたりけるに、怪しくおもしろき所々おほかりけり。わがみ
かど六十餘國の中に、鹽竈といふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、かの翁、更にこ
こをめでて、「鹽竈にいつか來にけむ」とはよめりける。

〔八十一〕昔、惟喬親王と申す親王おはしませしけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮
ありけり。年ごとの櫻の花盛には、その宮へなむ坐しける。その時右馬頭なりける人
を、常に率ておはしませしけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩
は懇にもせで酒をのみ飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野の渚の院の
櫻ことにおもしろし。その木の下におり居て、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌
よみけり。馬頭なりける人の詠める、

世のなかに絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし
となむ詠みたりける。また、人の歌、

○惟喬親王 文徳天
皇第一の皇子。母は
紀の名虎の女靜子。
○右馬頭 業平自ら。
○狩 鷹狩。
○おり居て 馬から
おりてゐて。
○うき世になにか久
しかるべき 憂き事
繁きこの世に、なん
でいつまであらう。
早く見きつて散るの
ももつじもたの意。
○大御酒まゐる 大
御酒を獻ずる。
○柵機津女 織女。
○天河原 天上の
天の河原にぎりなし
て、いつそ今日一日
をこゝに狩り暮して
柵機様に今宵の宿を
借らう、歩きまはつ
て幸ひ柵機の居る天
の河原に來たから。

○一とせに 天の河では、一年に一度御出なさる彦星の君を待つのであるから、はかの者が借らうといつても、貸す人は容易にあるまいの意。人は織女をいふ。

○あかなくに 飽かぬに。月の隠れる山の端が脇へ逃げ退いて、月を入れずにあつてほしいとは親王を月に比して、親王のお姿を隠し奉る御簾や御帳がなくなつて、親王をお入れ申さずにあつてほしいとの意。

散ればこそいと、櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべきとて、その木の下は立ちてかへるに、日暮になりぬ。御供なる人、酒をもたせて野より出できたり、この酒を飲みてむとて、よき所をもとめ行くに、天河といふ所に至りぬ。親王に馬頭大御酒まるる。親王の宣ひける、「交野を狩りて天河の邊に至るを題にて、歌よみて杯はさせ。」と宣ひければ、よみて奉りける、

狩りくらし柵機津女に宿からむ天の河原にわれは來にけり
と聞えければ、この歌を親王かへすく誦し給ひて、返し得し給はず。紀有常御供に仕うまつれり。それがかへし、

一とせにひとたび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ
かへりて宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒飲み物語して、あるじの親王、酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬頭のよめる、

あかなくにまだきも月の隠るゝか山の端にけて入れずもあらなむ
親王に代り奉りて、紀有常、
おしなべて峯もたひらになりなむ山の端なくば月も隠れじ

○枕にて 今宵はままりません、かくお止めになるのはつらいの意。

○忘れては あまりの事にふと忘れてはこれは夢ではないかと思ふ。この深い雪を踏みわけて、かやらの山里に來て、君にお目にかゝらうとは、ほんごに思ひも寄らぬことであつたの意。

○母なむ 業平の母伊登内親王。

○いさかなしうし給ひけり 殊に勝れて愛し給うた。

○こみの事にて 急な事といつて御消息があつた。

○こみくはなくて 別にはかの事はな

〔八十二〕昔、水無瀬にかよひ給ひし惟喬親王、例の狩しにおはします。供に馬頭なる翁つかう奉れり。日ごろ經て宮にかへり給ひけり。御送りして疾くいなむと思ふに、大御酒たまひ祿賜はむとて遣さざりけり。この馬頭心もとながりて、

枕とて草ひき結ぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくと詠みける。時は三月の晦日なりけり。親王大殿籠らであかし給ひてけり。かくしつゝ、まうで仕うまつりけるを、思ひの外に御髪おろさせ給ひて、小野といふ所に住み給ひけり。正月にをがみ奉らむとて、まうでたるに、比叡山の麓なれば、雪いと高し。強ひて御室に詣でて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくしておはしましたければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など思ひ出でて聞えさせけり。さても侍ひてしがなと思へど、公事どもありければ、え侍はで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは
とてなむ泣くく來にける。

〔八十三〕昔、男ありけり。身はいやしなながら、母なむみこなりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばく得まうです。

○さらぬ別れ 去り
難く道れ難き別れ即
ち死別をいふ。

○人の子のため 親
を持つ子の爲に「い
ふので、こゝは自分
のこゝをいふ。

○もこの心 最初か
ら惟番親王にお仕へ
申してゐたのだから
親王御出家の後も、
そのはじめの心を失
はないで訪ひ奉り慰
め申した。

○ことたつとて 正
月だから常の月とは
ちがふといふので。
○思へども いつま
でも親王の御側に何
候してゐたいと思ふ
が、宮仕への身には
それも出来ない。

ひと子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さる程に、十二月ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、ことくはなくて、
老いぬればさらぬ別れのありといへばいよく見まくほしき君かな
となむありける。これを見て、馬にも乗りあへず、参るとて、いといたううち泣きて道すがら思ひける。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため

〔八十四〕昔、男ありけり。童より仕うまつりける君、御髪おろし給ひてけり。正月には必すまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、常にはえまうです、されど、もとの心失はでまうでけるになむありける。昔仕う奉りし人、俗なる、禪師なる、あまた参り集りて、正月なればことだつとて、大御酒賜ひけり。雪こほすがごと降りて、終日に止まず。皆人酔ひて、「雪に降り籠められたり。」といふを題にて歌よみけり、

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞ我が心なる

と詠めりければ、親王いといたうあはれがり給うて、御衣脱ぎて賜へりけり。

〔八十五〕昔、いと若き男、若き女をあひいへりけり。おのく親ありければ、つゝみて

いひさして止みにけり。年比へて女の許より、猶この事遂げんといへりければ、男、歌を詠みてやれりけり。いかゞ思ひけむ、

今までに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまく年の経ぬれば

とて止みけり。男女のあひ離れぬ、宮仕へになむ出でにける。

〔八十六〕昔、男、津の國免原郡蘆屋の里にしろよしして、いきて住みけり。昔の歌に、

あしの屋のなだの鹽焼きいとまなみ黄楊の小櫛もさゝす來にけり

と詠みけるは、この里を詠みけるなりけり。こゝをなむ蘆屋の灘とはいひける。この男、なま宮仕へしければ、それを便りにて、衛府佐ども集り來にけり。この男のこのかみも衛府督なりけり。その家の前の海のほとりに遊びありきて、「いざ、この山の上にあるといふ布引の瀧見に登らむ。」といひて登りて見るに、その瀧ものよりことなり。高さ二十丈、廣さ五丈ばかりなる石の面に、白絹に岩を包めらむやうになむありける。さる瀧の上に、わらふだの大ききとしてさし出でたる石あり。その石の上に走りかゝる水は、小柑子、栗の大ききにてこぼれ落つ。そこなる人にみな瀧の歌よます。かの衛府督まづ詠む、

我が世をば今日かあすかと待つかひの涙の玉と何れまされる

○昔の歌に 萬葉集
石川郎女の歌「しか
の雲のめかりしほや
さいまなみ櫛寄の
小櫛もりも見なく
に」といふのを所を
かへ詞をかへてこゝ
の古歌としたのだ。
○なま宮仕へしけれ
は 散位か権官など
で自分の知行所へい
つて遊んでゐたので
衛府佐などが遊びに
集つて來たのだらう
○ものよりことなり
その瀧はほかのこ
ちがつてゐる。
○わらふだ 圓座、
藁で造つた敷物。
○小柑子 今の金柑。
○我が世をば 年を
とつた私の命の、今
日か明日か待つ開
の心細さに、涙が玉
と落ちる。

○はる、夜の あれはきつこわが住む方の螢のたく火であらうの意。

○おほ方は 大概の事には、面白い月も餘り賞翫すまい。なぜなら、この月をめづることかたび重なるも、何時か月日がたつて、人の老さなるものであるからの意。

○勝りたる人 自分よりも地位の高い貴人の女に戀して。

○人知れず 思ふ心を人に知られないで徒らに戀ひ死んだなら、人は神の祟で死んだといふたらう。然らばなき名を神に負はすこととなるが、その無名の罪を負せる神は何れの神たらうの意。

あるじ、次によむ、

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに
と詠めりければ、かたへの人笑ふことにやありけむ、この歌をよみて止みけり。歸り來る道遠くて、うせにし宮内卿もちよしが家の前過ぐるに日暮れぬ。やどりの方を見やれば、海士のいさり火多く見ゆるに、かのあるじの男よむ、

はる、夜の星か河邊の螢かもわが住むかたのあまの焚く火かと詠みて家に歸り來ぬ。その夜、南の風吹きて、名残の波いと高し。つとめて、その家のめのことも出でて、浮海松の波に寄せられたる拾ひて、家の内にもて來ぬ。女がたより、その海松を高坏に盛りて、榎をおほひて出したり。その榎にかくかけり。

わたつみのかざしにさすといはふ藻も君がためには惜しまざりけり
田舎人の歌にては、あまれりやたらすや。

〔八十七〕 昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども、集りて月を見て、それがなかにひとり、

おほかたは月をもめでじこれぞこの積れば人の老いとなるもの

〔八十八〕 昔、賤しからぬ男、我よりは勝りたる人を思ひかけて、年經にけり。

人知れずわれ戀ひ死なばあぢきなく何れの神になき名おふせむ

〔八十九〕 昔、つれなき人をいかでと思ひ戀ひわたりければ、あはれと思ひけむ、「さらば、明日物ごしにてもものばかりをいはむ。」といへりけるを、限りなく嬉しく又疑はしかりければ、おもしろかりける櫻につけて、

櫻花けふこそかくも匂ふらめあな頼みがたあすの夜のこと

といふ心ばへもあるべし。

〔九十〕 昔、月日の行くをさへなけく男、三月の晦日に、

をしめども春のかぎりの今日の日の夕暮にさへなりにけるかな

〔九十一〕 昔、男、戀しさに來つゝかへれど、女に消息をだにえせで詠める、

あしべ漕ぐ棚なし小舟いくそたび行きかへるらむ知る人なしに

〔九十二〕 昔、男、身は賤しくて、いとたかき人を思ひかけたりけり。少し頼みぬべき様にあらずやありけむ、臥して思ひ起きて思ひ、思ひわびて詠める、

おふなく思ひはすべしなぞへなく高き賤しき苦しかりけり

○物ごしに 簾や障子なきを隔てて。

○棚なし小舟 船棚の無い小さい舟。

○おふなく 我が身の分に随つて。

○なぞへなく 比類なくの意で、不釣合の戀は成功せず非常に苦しいものなどの意。

○後に男ありければ 女はその後また外に男が出來たければ。

○女のかたに 「扇にかきにやれりけるを」にかゝる。

○今の男のものす 今の男が來て居る。

○秋の夜は 今の男
を秋に霧に、自分を
過ぎた春に霞にたご
へたのである。

○紅葉も花も 紅葉
も花も共に散り易い
もので、更に頼みに
ならぬといふので、
紅葉を今の男に花を
前の男に喩へたので
ある。

○おほつかなく思ひ
つめたる事を 不安
心に思つてゐた心を
打明けて、胸が晴ら
したいといつてやつ
た。

○彦星に 牽牛星
で、わが戀は、その彦
星に勝つてゐる。彦
星は一年に一度逢ふ
が自分はたま／＼あ
ふにしても、かく物
ごしに逢ふのである
から、彦星の戀より
も勝つてゐるの意。

昔もかゝる事ありけり。世のことわりにやありけむ。

〔九十二〕 昔、男女ありけり。いかゞありけむ、その男棲ますなりにけり。後に男あり
けれど、子ある中なりければ、こまかにこそあらねど、時々ものいひおこせけり。女のか
たに、繪かく人なりければ、扇にかきにやれりけるを、今の男のものすとて、一日二日お
こせざりけり。かの男いとつらくて、「おのが聞ゆる事をば今までして給はねば、ことわり
と思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける。」とて、詠みてやれりける。時は秋
になむありける。

秋の夜は春日わする、ものなれば霞に霧やたちまさるらむ
となむ詠めりける。女、かへし、

千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

〔九十四〕 昔、二條后に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつりけるを、常に見かはして
よばひわたりけり、「いかで物ごしにだに對面して、おほつかなく思ひつめたる事、すこし
はるかさむ。」といひければ、女いと忍びて、物ごしに逢ひにけり。物語などして、男、
彦星に戀はまされり天の河へだつる關を今はやめてよ

○今は何の心もなし
君を思ふより外に

何の心もない。

○口舌 やかましい
こと。

○秋かけて 徒らに
秋のみは来て、木の
葉の散る時節となつ
た。さて、淺く果
敢ない縁であつた。

○天の逆手 上古は
吉事には手を前で打
ち、凶事には後へま
はして打つて、厭禁
としたが、此の頃は
人を呪ふにしたので
あらう。

○人の呪ひ事は 人
を呪ふといふことは
その呪はれた人に果
して禍が来る者かご
うかそれは分らない
が、この男は、今こそ
思ひ知れといつて彼
の女を呪つてゐた。

この歌にめでて、逢ひにけり。

〔九十五〕 昔、男ありけり。女をとかくいふこと月日へにけり。石木にしあらねば、心苦
しとや思ひけむ、やう／＼あはれと思ひけり。その比六月のもちばかりなり。女、身に瘡
一つ二つ出でたりければ、いひおこせたる。「今は何の心もなし、身に瘡も一つ二つ出で來
にけり。時もいと暑し。少し秋風吹き立ちなむ時必ずあはむ。」といへりけり。秋立つころ
ほひ、女の父より、その人の許へ行くべかなる事聞きて、いひの、しり、口舌出で來にけ
り。さりければ、この女の兄、俄にむかへに來りければ、この女、かへでの初紅葉をひろ
はせて、歌を詠みて書きおく、

秋かけていひしなからもあらなくに木の葉降りしくえにこそありけれ

と書きおきて、「かしこより人おこせば、これをやれ。」とていぬ。さて、後つひに、善くて
やあるらむ、悪しくてやあるらむ、いにし所も知らず。かの男は、天の逆手をうちてなむ
呪ひ居るなる。むくつけきこと、人の呪ひ事は、負ふものにやあらむ、負はぬものにやあ
らむ、今こそは見めとぞいふなる。

〔九十六〕 昔、堀河太政大臣と申すいまそかりけり。四十の賀、九條の家にてせられけ

○堀河太政大臣 藤原基經。

○散りかひ曇れ 散り交うて曇れ。

○太政大臣 忠仁公 藤原良房。

○さきしもわかぬ さきしに雉をいひかけたのである。

○知る知らぬ 知るの知らぬの異なる事を仰せられるが、将も無い事で、只深く思ひ給へ、さし給はは、その思ひこそ案内者となつて、お逢ひも出来ませう。

○こは忍ぶなり 人目を忍ぶので中も絶えたのだから、又逢ふ時であらうと心に頼む、又行末も頼まむの意。

○こは忍ぶなり 人目を忍ぶので中も絶えたのだから、又逢ふ時であらうと心に頼む、又行末も頼まむの意。

○こは忍ぶなり 人目を忍ぶので中も絶えたのだから、又逢ふ時であらうと心に頼む、又行末も頼まむの意。

○こは忍ぶなり 人目を忍ぶので中も絶えたのだから、又逢ふ時であらうと心に頼む、又行末も頼まむの意。

○こは忍ぶなり 人目を忍ぶので中も絶えたのだから、又逢ふ時であらうと心に頼む、又行末も頼まむの意。

○こは忍ぶなり 人目を忍ぶので中も絶えたのだから、又逢ふ時であらうと心に頼む、又行末も頼まむの意。

る日、中將なりける翁

さくら花散りかひ曇れ老いらくの來むといふなる道まがふがに

〔九十七〕昔、太政大臣と聞ゆるおはしけり。仕うまつる男、九月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、奉るとて、

我がたのむ君がためにと折る花はときしもわかぬものにぞありける

と詠みて奉りたりければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に祿たまへりけり。

〔九十八〕昔、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の顔の下簾よりほのかに見えければ、中將なりける男の詠みてやりける、

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなく今日やながめ暮さむ

かへし、

知る知らぬ何かあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

後は誰と知りにつけり。

〔九十九〕昔、男、後涼殿のはざまを渡りければ、あるやんごとなき人の御局より、忘れ草を忍ぶ草とやいふとて、さし出ださせ給へりければ、賜はりて、

○主人の同胞 兼平。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○ありしにまさる 藤原氏の愈繁榮するをいふ。藤原氏が愈繁榮するのは、良近のやうな人々がその下にあるからだ。

○深草の帝 仁明帝。

わすれ草生ふる野邊とは見るらめどこはしのぶなり後またのまむ

〔百〕昔、左兵衛督なりける在原平平といふ人ありけり。その人の家によき酒ありと聞き

て、殿上にありける人々、飲まむとて來たりけり。左中辨藤原良近といふ人をなむ、まら

うどさねにて、その日は饗應まうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。そ

の花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ三尺六寸ばかりなむありける。それを

題にて歌よむ。よみはてがたに、主人の同胞なる、あるじまうけし給ふと聞きて來たりけ

れば、とらへて詠ませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、強ひて

詠ませければ、かくなむ、

咲く花のしたにかくる、人多みありしにまさる藤のかけかも

「など、かくしも詠む」といひければ、「太政大臣の榮花の盛りにみまそかりて、藤氏のこ

とに榮ゆるを思ひて詠める。」となむいひける。皆人誇らずなりにけり。

〔百一〕昔、男ありけり。歌はよまざりけれど、世の中を思ひ知りたりけり。あてなる女の尼になりて、世の中を思ひうんじて、京にもあらず、遙なる山里に住みけるもとに、もと親族なりければ、詠みてやりける。

○寝ぬる夜の 昨夜
逢つたあの夢があまりにはかないから、今一度確かに見ようと思つて目をねぶつてみれば、その夢も見られず、愈はかない事になり増る。

○世をうみの 世を
俺みて尼になつたのを海の釜にいひなし海菜食はせに目くほせをきかせたのである。

○しら露は 露を男
にたさへて、消えるなら消えよ、消えなからさいつて、玉と貫いてめづる人もなからう。

○からくれなるに
紅に水を絞り染にするとは、いろ／＼不思議な事あつた神代にも、一向に聞かぬ奇妙な事だの意。

背くとて雲には乗らぬものなれど世の憂き事ぞよそになるてふ

〔百二〕 昔、深草の帝に仕うまつりける男ありけり。いとまめに實様に、あだなる心なかりけり。さるに、心あやまりやしたりけむ、親王たちの使ひ給ひける女をあひしりにけり。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめば彌はかなくもなりまさるかな
となむ詠みてやりける。さる歌のきたなけさよ。

〔百三〕 昔、ことなる事なくて尼になりける人ありけり。形をやつしたれど、物やゆかしかりけむ、賀茂の祭見に出でたりけるを、男、歌よみてやる、

世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよとも頼まる、かな
〔百四〕 昔、男、「かくては死ぬべし」といひやりたりければ、女、

しら露は消なばけなむ消えずとて玉にぬくべき人もあらじを
といへりければ、ねたしと思ひけれど、志はいやまさりけり。

〔百五〕 昔、男、親王たちの逍遙し給ふ所にまうでて、立田川のほとりにて、
ちはやぶる神代も聞かずたつた川からくれなるに水くゝるとは

○御達 この生あて
な人の召仕ふ女。
○ながめ 思ひに沈
んで物を見つめる意
と長雨をかけたの
だ。

○浅みこそ 萬葉集
「廣瀬川袖つくほかり
浅きをや心深めて
我が戀ふるらむ」

○かず／＼に 深切
に私を思つてくれる
かごうか問うたつて
わからない。いつも
體のいゝ事はかりい
つてゐるから。さる
を今降りまさる雨は
眞實私を思ふかごう
かを試すいゝ雨だ。
ぬれて來れば私を思
ふ人、さらずは思は
ぬ人ぞ知らう。

〔百六〕 昔、なまあてなる男の許に御達ありけり。それを内記なりける藤原敏行といふ人よばひけり。此の女顔かたちはよけれど、未だ若ければにや、文もをさ／＼しからず、言葉もいひ知らず、況んや歌は詠まざりければ、かのあるじなる人、案を書きてやりけり。めでまどひにけり。さて、男のよめる、

つれ／＼のながめにまさる涙川袖のみひぢて逢ふよしもなし
かへし、例の男、女にかはりて、
浅みこそ袖はひづらめ涙川身さへ流ると聞かばたのまむ
といへりければ、男いといたうめでて、文箱に入れてもてありくとぞいふなる。

同じ男、あひて後、文おこせたり。「まうでこむとするに、雨の降りぬべきになむ、見わづらひ侍る。身さいはひあらば、この雨は降らじ。」といへりければ、例の男、女に代りて詠みてやらす、

かず／＼に思ひ思はず問ひ難み身をしる雨は降りぞまされる
と詠みてやれりければ、蓑も笠も取りあへで、しとゞに濡れてまどひ來にけり。
〔百七〕 むかし、女、人の心を怨みて、

○夜深く見えは
 なたのうたゝねの夢
 に見えたのは、私の
 魂がうかれ出たので
 せう。猶夜深く見ら
 れたなら、魂結して
 止めて下さいといふ
 ので、當時人魂を
 見たら「魂は見つぬ
 しは誰とも知らねぞ
 も結びぞさむる下が
 への袿」を唱へたさ
 いふことである。

○戀しとは 戀しい
 と殊更に申すことは
 致しません、私の戀
 ふるしるしには、き
 つこあなたの下紐が
 解けませうから、そ
 れこそ度毎に承知
 して下さいといふの
 で、人に戀をされる
 と、下紐が解けるこ
 當時いはれたのであ
 る。

風吹けばとはに浪こす石なれやわが衣手のかわく時なき
 と、常のことぐさにいひけるを、聞きおよびける男、

よひ毎に蛙のあまた鳴く田には水こそまされ雨は降らねど

〔百八〕 昔、男、友だちの人を失へるが許にやりける、

花よりも人こそあだになりにつれ何れをさきに戀ひむとか見し

〔百九〕 昔、男、密に通ふ女ありけり。それが許より、「今宵夢になむ見え給ひつる。」といへりければ、男、

思ひ餘り出でにし魂のあるならむ夜深く見えばたまむすびせよ

〔百十〕 昔、男、やんごとなき女の許に、なくなりける女を申ふやうにて、いひやりける、

古はありもやしけむ今ぞ知るまだ見ぬ人を戀ふるものとは

〔百十一〕 昔、男、つれなかりける人の許に、

戀しとはさらにもいはじ下紐の解けむを人はそれと知らなむかへし、

○ことさまになりに

ければ 心が變つて

ほかの男に契つたの

である。

○仁和の帝 清和天皇。

○おきのゐて 熾火

の著きてで、その

あつく堪へ難いより

も一段悲しく堪へ難

いのはの意。みやこ

しまへは都島邊。

○涙閉より 萬葉集

「涙閉より見ゆる小

島の濱久木ひさしく

なりぬ君に逢はずし

て」上の句は「久し」

の序。

○何事も皆 今迄の

放縦を悔い改めた由

が書き添へてあつた

といふのである。

下紐のしるしとするもあらなくにかゝるがごととはかけずぞあるべき

〔百十二〕 昔、男、懇にいひ契りける女の、ことさまになりにければ、

須磨の蟹の鹽焼くけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

〔百十三〕 昔、男、やもめに居て、

長からぬいのちのほどに忘るゝはいかに短き心なるらむ

〔百十四〕 昔、仁和の帝、芹川に行幸し給ひける時、なま翁の、今はさること似けなく思ひけれど、もとつきにける事なれば、大鷹の鷹飼にてさむらはせたまひける。摺狩衣の袂

に、鶴のかたをつくりて書きつけける。

翁さび人などがめそ狩ごろも今日ばかりとぞ鶴もなくなる

おほやけの御氣色あしかりけり。おのがよはひを思ひけれど、若からぬ人は聞きおひけりとや。

〔百十五〕 昔、陸奥國にて、男女すみけり。男、「都へいなむ。」といふ。この女、いと悲しうて、「馬のはなむけをだにせむ。」とて、沖井、都島といふ所にて、酒飲ませてよめる。

おきのゐて身を焼くよりも悲しきはみやこしまべの別れなりけり

○昔、帝 本居翁は「昔、男、帝の住吉に行幸し給ひける御供に仕うまつりてよめる『我が見ても』云々よめりければ大神云々」を補はれた。

○瑞籬の 久しの枕詞。

○また世經す 男女の中を世さいひ、また男に逢はぬを世經すといつたのだ。

○近江なる 筑摩の祭には、氏子中の女が、その一生の間に逢つた男の數ほ鍋をかづいて詣でる風があつたといふ。祭にかづく鍋の數はさぞ澤山たらうと思へば早く見たいといふのである。

〔百十六〕 昔、男、すゞろに陸奥國まで惑ひいきけり。京に思ふ人にいひやる。

浪間より見ゆる小島の濱ひさぎひさしくなりぬ君に逢ひみで

「何事も皆よくなほりにけり。」となむいひやりける。

〔百十七〕 昔、帝、住吉に行幸し給ひけり。

わが見てもひさしくなりぬ住吉の岸のひめ松いく代へぬらむ

御神現形したまひて、

むつまじと君は知らずや瑞籬の久しき世よりはひそめてき

〔百十八〕 昔、男、久しく音もせで忘る、心もなし。「参り來む。」といへりければ、女、

玉葛はふ木あまたになりぬれば絶えぬころのうれしけもなし

〔百十九〕 昔、女、あだなる男のかたみとて、置きたるものどもを見て、

かたみこそ今はあだなれこれなくば忘る、時もあらましものを

〔百二十〕 昔、男、女のまだ世經すと覺えたるが、人の許にしのびて物聞えて後、ほど經て、

近江なる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋の數見む

〔百二十一〕 昔、男、梅壺より雨に濡れて人のまかり出づるを見て、

鶯の花を縫ふてふ笠もがな濡るめる人に著せてかへさむ

かへし、

鶯の花を縫ふてふ笠はいなおもひをつけよ乾してかへらむ

〔百二十二〕 昔、男、契れることあやまれる人に、

山城の井手のたま水手にむすび頼みしかひもなき世なりけり

といひやれど、答へもせず。

〔百二十三〕 昔、男ありけり。深草に住みける女を、やうくあきがたにや思ひけむ、

かゝる歌を詠みけり、

年を経てすみこし里を出でていなばいと深草野とやなりなむ

女、かへし、

野とならば鶉となりて鳴きをらむ狩にだにやは君はこざらむ

と詠めりけるにめでて、行かむと思ふ心なくなりけり。

〔百二十四〕 昔、男、いかなりけることを思ひける折にか、よめる。

○鶯の 古今集「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるや」と

○おもひをつけよ 花笠はいりません只あなたの思ひをつけられよ、然らば袖を乾して立ち歸りませう。

○野ならは 果して野となつたら、私は鶉になつて鳴いてをりませう、しかし君は狩にさへもおいでではごさいますまい。

○思ふこと 思ふことはいろくあるが、口を噤んで止まら、自分と心と同じうする人は無いんだから。

思ふこといはずでどたぎに止みぬべき我とひとしき人しなければ
〔百二十五〕昔、男、わづらひて、心地死ぬべくおほえければ、
つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

伊勢物語終

大和物語

大和物語

○亭子院 宇多天皇
○おり居 位を退き
○弘徽殿 清涼殿の
北。女御なごの居
所。
○伊勢の御 藤原繼
蔭の女。宇多天皇の
更衣。御は婦人の尊
稱。
○別るれど 自分に
別れを惜しむ者は最
早この宮中に一人だ
つて無いんだから戀
しく思はるべき筈も
ないのに、なぜかう
も別れの惜しく悲し
まれるのだらうの意
○身一つに 御門は
我一人ではないから
次々の御門にもお仕
へ申したら、そんな
に名残惜しい官中も
又立ちかへつて見ら
れよう、見られない
ことは無いの意。

〔一〕 亭子院の帝、今はおり居給ひなむとするころ、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけける、

別るれどあひもをしまぬ百敷を見ざらむことのか悲しきとありければ、帝御覽じて、その傍に書きつけさせ給うける。

身一つにあらぬばかりをおしなべて行き廻りても何か見ざらむとなむありける。

〔二〕 帝おり居給うて、又の年の秋、御髪おろし給ひて、所々山踏し給うて、行ひ給うけり。備前の掾にて、橘良利といひける人、内裏におはしましける時、殿上に候ひて、御髪おろし給うければ、やがて御供に頭おろしてけり。人にも知られ給はで、歩き給ひける御供に、これなむ後れ奉らで候ひける。かゝる御ありきしたまふ、いと悪しきことなりとて、内裏より少將、中將など、此彼候へとて、奉らせ給ひけれど、違ひつゝ歩きたまふ。

○違ひつ、内裏よりの恩召に違うて。
 ○故郷の故郷を出てからもう久しうなるが、まだ一度も安否を尋ねないから、うちの者は恨んでゐるだらう、それで旅寢の夢に見たのだから。たびねのひねに日根をかけたのだ。
 ○故源大納言 源清藤。陽成天皇の御子
 ○京極御息所 宇多の後孫子。時平の女。
 ○鬚籠 竹の端を編み残して鬚の様にしたものだ。
 ○俊子 大江玉淵の女、藤原千兼の妻。
 ○敷物の織物 鬚籠なごに敷く織物。
 ○よりくみ 鬚籠なごを板に結び付ける紐。

和泉國に至り給うて、日根といふ所におはします夜あり。いと心細うかすかにておはします事を思つて悲しかりけり。さて日根といふことを、歌に詠めと仰せ事ありければ、この良利大徳、

故郷のたびねの夢に見えつるは怨みやすらむまたと問はねばとありけるに、皆人泣きてえ詠ますなりにけり。その名をなむ、寛蓮大徳といひて、後までもさぶらひける。

〔三〕 故源大納言宰相におはしける時、京極御息所より、亭子院の御賀仕うまつり給ふとて、「かゝる事をなむせむと思ふ。捧物、一枝二枝せさせて賜へ。」と聞え給うければ、鬚籠を數多せさせたまうて、俊子に色々に染めさせ給うけり。敷物の織物ども、色々に染め、よりくみ何かと皆預けてせさせ給うけり。そのものどもを、九月晦日に、皆いそぎはててけり。さてその十月朔日、この物、いそぎ給ひける人の許におこせたりける、千々の色にいそぎし秋は過ぎにけり今は時雨に何を染めまし

その物急ぎ給うける時は、まもなく、此よりも彼よりも云ひかはし給うけるを、それより後は、その事とやなかりけむ、消息もいはで、十二月の晦日になりければ、

かたかけの船にや乗りし白浪の騒ぐ時のみ思ひ出づる君

となむいへりけるを、そのかへしをもせで、年越えにけり。さて二月ばかりに、柳のしなひ、物よりけに長きなむ、この家にありけるを折りて、

青柳の絲うちはへて長閑なる春日しもこそ思ひ出でけれとてなむ、遣り給へりければ、いと二なく愛でて、後までなむ語りける。

〔四〕 野大貳、純友が騒ぎの時、討手の使にさされて、少將にて下りけり。公にも仕うまつり、四位にもなりぬべき年に當りければ、正月の加階賜りの事、いと床しう覺えけれど、京より下る人もをさく聞えず。或人に問へど、四位になりたりともいふ。或人はさもあらずといふ。定かなる事いかで聞かむと思ふ程に、京の便りあるに、近江守公忠君の文をなむ持て來たりける。いとゆかしう嬉しうて、あけて見れば、萬の事ども書きもていきて、月日などかきて、奥に、

玉櫛笥ふたとせ逢はぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひしこれを見て、限りなく悲しくてなむ泣きける。四位にならぬよし、文の詞にはなくて、只かくなむありける。

○かたかけの 上の句は騒ぐの序で、營みいそぎ時のみ君は思ひ給ふよの意。
 ○物よりけに 他の物よりも勝つて。
 ○青柳の 柳の絲のうちにはへ長きを春の日の打續き長閑なのにいひかけ、さてその長い春の日にさへ思ひ出すのを、騒ぐ時のみとはさうして仰せられたの意。
 ○野大貳 太宰大貳小野好古。天慶三年藤原純友が反した時追捕使として下つた。
 ○正月の加階 正月の除目に位階の昇進を希望したが。
 ○あけながら 開けに五位の袍の赤をよみかけたのである。

○前坊 前皇太子保明親王。延長元年薨。
 ○大輔 前坊の乳母。
 ○後の宮 前坊の母藤原穩子。

○ゆゑ、しめて、かゝるめでたい折に涙は思はしいといつて大輔を物陰に隠した。

○今はと物を、今ははや前坊の御事は思ふまいと思ふが。

○かの男 女の本夫。

○他國の守 京より地方をさしていふ。

○たぐへやる 女に件はせやるわが魂。

○監の命婦 近衛將監なごの娘の命婦になつてゐる者、命婦は五位に任ぜられた女官の稱。

○中務官 元良親王

〔五〕 前坊の君失せ給ひにければ、大輔、限りなく悲しくのみ覺ゆるに、後の宮、後に立ち給ふ日になりければ、ゆゑ、しとて隠しけり。さりければ、詠みて出しける、

わびぬれば今はと物を思へども心に似ぬは涙なりけり

〔六〕 朝忠中將、人の妻にてありける人に、忍びて逢ひ渡りけるを、女も思ひ交して住みける程に、かの男、他國の守になりて下りければ、此も彼も、いとあはれと思ひけり。さて詠みて遣しける、

たぐへやる我が魂をいかにしてはかなき空にもて離るらむ

となむ、下りける日いひやりける。

〔七〕 男女、相知りて年経けるを、聊かなる事によりて離れにけり。飽く年もなくて、止みにしかばにやあらむ、男も哀れと思ひけり。かくなむ云ひ遣りける、

逢ふことは今は限りと思へども涙は絶えぬものにぞありける

女、いとあはれと思ひけり。

〔八〕 監の命婦の許に、中務宮おはしまし通ひけるを、「一方の塞がれば、今宵はえなむ参でぬ。」と宣へりければ、その御返り事に、

逢ふ事のかたはさのみぞふたがらむ一夜めぐりの君と思へば

とありければ、方塞りたりけれど、おはしましてなむ、大殿隠りにける。かくて又、久しく音もし給はざりけるに、「嵯峨の院に狩すとてなむ、久しく消息なども物せざりける。いかに覺束なく思ひつらむ。」など宣へりける御かへりごとに、

大澤の池の水ぐき絶えぬともなにか恨みむさかのつらさは

御返しはこれにや劣りけむ、人忘れにけり。

〔九〕 桃園の兵部卿宮うせ給うて、御はて九月晦日にし給ひけるに、俊子、かの宮の北の方に奉りける、

大かたの秋の終てだに悲しきに今日はいかでか君暮すらむ

限りなく悲しと思ひて、泣き居給へりけるに、かくいへりければ、

あらばこそ初めも終ても思ほえめ今日にも逢はで消えにしものを

となむかへし給ひける。

〔十〕 監の命婦、堤にありける家を、人に賣りて後、栗田といふ所に往きけるに、その家の前を渡りければ、詠みたりける、

○逢ふ事の 太白神が一夜づ、巡り行く如く君も通ふ處が多いのだから、逢はうとする方面は嗟かし塞るこゝであらうといふので、方塞ぎではなくて逢ふまいとするのだらうの意。
 ○嵯峨の院 山城國葛野郡にある。
 ○桃園の兵部卿官 宇多天皇の皇子敦固親王。
 ○北の方 醍醐天皇の皇女慶子内親王。
 ○大かたの秋 何事もない普通の秋。
 ○あらはこそ 我が身が消えないであれはこそ秋の終てこそ初めとも知りもしようの意。
 ○堤 賀茂川の堤。

○ふる里 縁故のある所。こゝはかの賣つた家。古今集雜下、伊勢「飛鳥川ふちにもあらぬわが宿もせに變り行くものにごありける」せには鏡。
 ○出房 太宰大貳廣敏孫、信濃孫興嗣子
 ○亭子院の若宮 韶子内親王。
 ○住の江の松 古今集に「われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松幾代經ぬらむ」久しい例に引く。
 ○大臣 こゝでは大納言をいふ。
 ○あくといへば 春の夜は短くて逢ふ程もなく明けるといふから、落著いた心もない宛ら夢だ。夢の如くに夜ばかり逢ふ事だよの意。

ふる里をかたと見つゝも渡るかな淵瀬ありとは宜もいひけり
 〔十一〕 故源大納言君、忠房のぬしの御女、東の方を、年比思ひて住み渡り給うけるを、亭子院の若宮につき奉り給うて程經にけり。子どもなどありければ、事も絶えず、同じ所になむ住み給うける。さて詠みてやり給うける。
 住の江の松ならなくに久しくも君と寝ぬ夜のなりにけるかな
 とありければ、かへし、
 久しくはおもほえねども住の江の松やふたたび生ひ代るらむ
 となむありける。

〔十二〕 同じ大臣、かの宮をえ奉りて、帝のあはせ奉り給へりけれど、はじめ頃忍びて、夜々通ひ給うける比、かへりて、
 あくといへばしづ心なき春の夜の夢とや君をよるのみは見む

〔十三〕 右馬允藤原千兼といふ人の妻に、俊子といふ人なむありける。子ども數多出で来て、思ひて棲みけるほどに、なくなりければ、限りなく悲しくのみ思ひ歩く程に、内の藏人にてありける一條君といひける人は、俊子をいとよく知れりける人なりけり。かくな

○一條の君 貞平親王の女。
 ○訪はぬ人の従者 一條の君の召使の女

りにける程にしも、訪はざりければ、怪しと思ひ歩く程に、訪はぬ人の従者の女なむ逢ひたりけるを見て、かくなむ、
 「思ひきや過ぎにし人の悲しきに君さへつらくならむものとは
 と聞えよ。」といひければ、かへし、

○本院 充大臣時平

なき人を君がきかくにかけじとて泣くく忍ぶほどな恨みそ

○猿澤の池の玉藻 拾遺集に「わきも子がねくれたれ髪を猿澤の池の藻屑に見るぞ悲しき。」

〔十四〕 本院の北の方の御おとうとの童名を、おほつほねといひいまそかりけり。陽成院の帝に奉りけるに、おはしまさざりければ、詠みて奉りける、
 あらたまの年は經ねども猿澤の池の玉藻は見つべかりけり

○よひの白玉 帝をたごへたのである。
 ○光見えさす 書きさす、云ひさすなどのさすで、その事をなしでけないで中途で置く意。こゝは帝の再び召さぬをいふ

〔十五〕 また鈞殿の宮に、若狭の御と云ひける人を召したりけるが、又も召しなかりければ、詠みて奉りける、
 數ならぬ身に置くよひの白玉は光見えさすものにぞありける

○すけの御 陽成院の女房であらう。

と詠みて奉りければ、見給うて、「あなおもしろの玉の歌よみや。」となむ宣ひける。
 〔十六〕 陽成院のすけの御、繼父の少將の許に、
 春の野ははるけながらも忘れ草生ふるは見ゆるものにぞありける

○はるけながらも
通けきながらもの意
○忘れ草 萱草。人
を忘れるこいふ意に
歌なきに多くよむ。
○故式部卿官 宇多
天皇の皇子敦慶親王
○出羽の御 式部卿
の官の女房たらう。
○すみけるを 通ひ
けるをの意。
○三條の御息所 醍
醐天皇の女御藤原善
子。
○若菜 正月七日に
七種の若菜を薬にし
てたべるこ、よく萬
病を除くこいふ。
○おなじ人 前の三
條の御息所。
○戀しきやなど 戀
もせぬ身の、かくす
ずろに悲しきは如何
なるこぞの意。

少將、かへし、

春の野に生ひじとぞ思ふ忘れ草つらき心の種しなれば

〔十七〕 故式部卿官の、出羽の御に、繼父の少將のすみけるを、離れて後、女薄に文をつ
けて遣りたりければ、少將、

秋風に靡く尾花は昔見し袂に似てぞ戀しかりける

出羽の御、かへし、

袂ともしのばざらまし秋風に靡く尾花の驚かさずば

〔十八〕 故式部卿官、三條の御息所に絶え給うて、又の年の正月の七日の日、若菜奉り給
うけるに、

ふるさとと荒れにし宿の草の葉も君が爲とぞまづは摘みける

とありけり。

〔十九〕 おなじ人、同じ親王の許に、久しくおはしまさざりければ、秋のことなりけり。

世に經れど戀もせぬ身の夕さればすろに物の戀しきやなど

とありければ、かへし、

○時雨におとらざり
けり 時雨に劣らぬ
程、涙に袖がぬれる
○桂の皇女 宇多天
皇の皇女孝子内親王
○月の身 月の如き
身。
○行くとも見えで
何處へ行くとも人に
は知られないで。
○良少將 良家職方
姓が良家で少將であ
るからかくいふ。
○柏木の森の下草
柏木は兵衛の異稱で
少將といひ、下草は
命婦自らをいふ。
○おいの世に 老い
の世までにの意。
○かゝる思ひ 上の
「身をいたづらにな
さずもあらなむ」を
うけて、徒らにする
ことはいさいつた
のである。

夕ぐれに物思ふ時は神無月われも時雨におとらざりけり

となむありける。心に入らで悪しく詠み給うけるとぞ。

〔二十〕 故式部卿官を、桂の皇女、切によび給うけれど、おはしまさざりける時、月の
いとおもしろかりける夜、御文奉り給へりけるに、

久方の空なる月の身なりせば行くとも見えで君は見てまし

となむありける。

〔二十一〕 良少將、兵衛佐なりける頃、監の命婦になむ住みける。女のもとより、

柏木の森の下草おいぬとも身を徒らになさずもあらなむ

かへし、

柏木の森の下草おいの世にかゝる思ひはあらじとぞおもふ

となむいひける。

〔二十二〕 良少將、太刀の緒にすべき革を求めければ、監の命婦なむ、我が許にありとい
ひて、久しく出さざりければ、

あだ人のたのめわたりしそめかはの色の深さを見でや止みなむ

○たのめ たのまし
めで、あてにさせる。

○そめかは 染革に
筑前の名所築川をか
けたのだ。伊勢物語
参照。

○陽成院の二の皇子
三品源正尹元平親
王。

○女五の皇女 宇多
天皇の皇女依子内親
王。

○せかなくに 堰か
ぬにの延語。

○山水の 山水の如
くの意。

○先帝 醍醐天皇。
○右大臣の女御 三
條の御息所。

○下待ち 心の底で
待つ。

○君まつ山 君を待
つといふを松にいひ
かけたので郭公は自
分をいつたのである
○室 僧房。

と詠めりければ、監の命婦めでくつがへりて、もとめてやりけり。

〔二十二〕 陽成院の二の皇子、俊蔭中將の女に、年比すみ給うけるを、女五の皇女を得奉り給ひて後、更に訪ひ給はざりければ、今はおはしますまじきなめりと思ひ絶えて、いと哀れにて居給へりけるに、いと久しくありて思ひがけぬほどに、坐しければ、え物も聞えで、逃けて戸の内に入りけり。歸り給うて、皇子あしたに、「などか、年比の事も申さむとて、まうで來たりしに、隠れ給ひにし。」とありければ、詞はなくてかくなむ、

せかなくに絶えと絶えにし山水のたれ忍べとか聲を聞かせむ

〔二十四〕 先帝の御時に、右大臣の女御、うへの御局にまうのほり給ひて、おはしましやすると、下待ち給うけるに、おはしまさざりければ、

日ぐらしに君まつ山の郭公問はぬ時にぞ聲をしまぬ
となむ聞えけり。

〔二十五〕 比叡の山に、念覺といふ法師の山籠りにてありけるに、師徳にてましくける大徳の早う死にけるが、室に松の木の枯れたるを見て、

主もなき宿の枯れたる松見れば千代過ぎにける心地こそすれ

と詠みければ、かの室に泊りたりける弟子ども、あはれがりけり。この念覺は俊子が兄なりけり。

〔二十六〕 桂の皇女、密に逢ふまじき人に逢ひ給うたりけり。男の許に、詠みておこせ給へりける、

それをだに思ふ事とて我が宿を見きとないひそ人のきかくに
となむありける。

〔二十七〕 かいせうといふ人法師になりて、山に住む間に、あらはひなどする人のなかりければ、親の許に、衣をなむ洗ひにおこせたりけるを、いかなる折にかありけむ、むづかりて、「親兄弟のいふ事も聞かで、法師になりぬる人は、かくうるさき事いふものか。」と言ひければ、詠みて遣りける、

今はわれいづち行かまし山にても世の憂き事は猶も絶えぬか

〔二十八〕 同じ人、かの父の兵衛佐、失せにける年の秋、家にこれかれ集りて、宵より酒飲みなどす。いますからぬことの哀れなる事を、客人も主人も戀ひけり。朝ほらけに霧立ち渡れりけり。客人、

○それをたに せめ
てわが宿を見たとい
ふことをでも。
○思ふ事とて われ
を思ふ事として、外
の話の序にも、わが
宿を見たなむと云つ
て下さるな、何か事
あり伊に人が聞くか
らの意。
○かいせう 後撰集
の作者戒仙か。
○あらはひ 洗濯。
○むづかりて 憤つ
て。
○今はわれ 古今集
雜下「世をすて、山
に入る人山にても猶
うき時はいづち行く
らむ」にあつて、か
は「かな」の意。
○いますからぬ 父
の兵衛佐のいままぬ
事の哀れな事を。

○ことならば同じ事なら晴れないでくれよの意。

○三條右大臣 藤原定方。

○類して 打連れて御遊び 特に奏樂をいふ。

○むかしの今日に式部卿宮のいらせられたその昔の今日を思ふ涙であらうの意。

○なりいづべき立身出世すべき。

○海松 みるめ、うみまつともいふ。わが身の立身出世したく、沈み勝ちなのを、石に生える海藻の海松に寄せて次の歌をよんだのである。

○沖つ風 ふけひの浦のふくにいひかけたのである。

朝霧の中に君ますものならば晴る、まにく嬉しからましと云ひけり。かいせう、かへし、

ことならば晴れずもあらなむ秋霧の紛れに見えぬ君と思はむ客人は、貫之、友則などになむありける。

〔二十九〕 故式部卿宮に、三條右大臣、他上達部など類して参り給ひて、棊うち御遊びなどし給うて、夜更けぬれば、此彼酔ひ給うて、物がたりし、かづけ物などせらる。女郎花をかざし給うて、右大臣、

女郎花折る手にかゝるしら露はむかしの今日にあらぬなみだかとなむありける。他人々のも多かれど、よからぬは忘れにけり。

〔三十〕 故右京大夫宗子君、なりいづべき程に、我が身のえなり出でぬことを思ひ給ひけるころほひ、亭子の帝に、紀伊國より石つきたる海松をなむ奉りたりけるを、題にて、人歌よみけるに、右京大夫、

沖つ風ふけひの浦に立つ浪のなごりにさへやわれはしづまむ
〔三十一〕 おなじ右京大夫、監の命婦に、

○夏の夜の はかない嘘にいつたので、

短い蓬瀬は、よそながら焦れてゐた時より尙ほかないといふのである。

○あはれてふ 古今集雜「紫の一本ゆゑに武藏野の草はみなから哀れぞ見る。」

○もりすぎぬらむ

時雨の漏り過ぎるを選に洩れていつ迄も同じ地位にあるに喩へていつたのである

○そうづ 僧都、誰ともわからぬ。

○堤中納言 藤原兼輔。

○大内山 嵯峨仁和寺の山。

よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

〔三十二〕 亭子の帝に、右京大夫よみて奉りける、

あはれてふ人もあるべく武藏野の草とだにこそ生ふべかりけれ
また、

しぐれのみ降る山里の木の下は居る人がらよりもすぎぬらむ

とありければ、顧み給はぬ心ばへなりけり。帝御覽じて、「何事ぞ、これを心得ぬ。」とて、そうづの君に見せ給うけると聞きしかば、「かひなくなむありし。」と語り給うける。

〔三十三〕 躬恆が、院に詠みて奉りける、

立ち寄らむ木のもともなき蔦の身は常磐ながらに秋ぞかなしき

〔三十四〕 右京大夫の許に、女、

色ぞとはおもほえずともこの花は時につけつ、おもひ出でなむ

〔三十五〕 堤中納言、内裏の御使にて、大内山に、院の帝おはしますに参り給へり。物心細けにておはします、いとあはれなり。高き所なれば、雲は下よりいと多く立ち昇るやうに見えければ、かくなむ、

○前齋宮 宇多天皇の皇女柔子内親王。
○吳竹の 竹の節と節との間をよこいふよりよの序とし齋宮の御住ひを竹の都といふ所からよの都とつづけたのである。

○出雲 出雲守。
○殿上して 昇殿を許されて。
○先帝の五の皇子 清和の皇子貞平親王。五は四の誤か。
○歎きほに擧げて 歎きの聲を高くあけるを船に帆をあけるに喩へていつたのである。
○伊勢守もろみち 不詳。

○正明 是忠親王の男源正明。

○うなる 鬢髪。子供。

白雲のこのへに立つ峯なれば大内山といふにぞありける
〔三十六〕 伊勢國に、前齋宮おはしましける時に、堤中納言、勅使にて下り給うて、
吳竹のよのみやこと聞くからに君は千年のうたがひもなし
御かへしは聞かず。かの齋宮のおはします所は、多氣の都となむいひける。
〔三十七〕 出雲が兄弟、一人は殿上して、我はえせざりける時に詠みたりける。
かく咲ける花もこそあれ我がために同じ春とやいふべかりける

〔三十八〕 先帝の五の皇子の御女は、一條君といひて、京極御息所の御許に候ひ給うけり。よくもあらぬ事ありて、罷出給うて、靱負督の妻にていますがりて、
たまさかに問ふ人あらばわたの原歎きほに擧げていぬと答へよ

〔三十九〕 伊勢守もろみちの女を、正明中將君にあはせたりける時に、其處なりけるうなるをば、右京大夫呼び出でて語りひて、朝に詠みておこせたりける、
置く露のほどをも待たぬ朝顔は見ぞぞなか／＼あるべかりける

〔四十〕 桂の皇女に、式部卿宮すみ給うけるととき、その宮に候ひけるうなるなむ、この男宮を、いとめでたしと思ひかけ奉りけるをも、え知り給はざりけり。螢の飛びありきける

○汗疹 童女などの初夏の上衣。
○曹司して 部屋を持つて。

○このむすめ姉にあたる 俊子の女で一番姉にあたる人。
○いひつゝも はかなきものさ今こそかうして口にいってゐるが、世はまことに果敢ないものであるから、私たつていつはかなくならんども限らぬ。その時には、せめてあはれと思はるべき形見を、ごうぞして君に残したいものだ。

○或人の御驗者 或婦人の爲に加持祈禱をした時。
○世の中に 惠秀とこの女と關係があるといふ噂が立つた。

を、「かれ捕へて。」と、この童に宣はせければ、汗疹の袖に螢を捕へて、包みて御覽せさす
とて、聞えさせける、

つゝめども隠れぬものは夏蟲の身よりあまれるおもひなりけり

〔四十一〕 源大納言君の御許に、俊子は常に参りけり。曹司して住む時もありけり。をか
しき人にて、萬の事を常に云ひ交し給ひけり。徒然なる日、このおとゞ、俊子、またこの
むすめ、姉にあたるあやつ子といひてありけり。母に似て心もをかしかりけり。又このお
とゞの許に、よぶ子といふ人ありけり。それも物の哀れ知りて、いと心をかしき人なりけ
り。これ四人集ひて、萬の物語し、世の中のはかなき事、世間の哀れなる事いひ／＼て、
かのおとゞの詠み給うける、

いひつゝも世ははかなきを形見には哀れといかで君に見えまし
と詠み給うければ、誰も／＼返しはせて、集りてよ、となむ泣きける。怪しかりける者と
もにこそはありけれ。

〔四十二〕 惠秀といふ法師の、或人の御驗者仕うまつりける程に、とかく世の中にいふ事
ありければ、詠みたりける、

○庭のしも 霜に下を云ひかけて女の高き身分の人なることを聞かせたのである

○心おひけむ 女を戀ふる心が萌したのたう。

○切懸 板を横に柱にきりかけた塀。

○籬する 切懸を造るをいふ。

○飛驒の匠 木工。

○たつき 鑄。刃の廣い斧。

○比叡を外山と 横川の山深い所に居るをいふ。比叡山を御山と見るときは。

○日 空なる目を時開の日にいひかけたのである。

里はいふ山には騒ぐしら雲の空にはかなき身とやなりなむとなむありける。又この人の御許に詠みたりける、

朝ほらけわが身は庭のしもながら何を種にて心おひけむ

この大徳、坊にしける所の前に、切懸をなむせさせける。そのけづり屑に書きつけける、

籬する飛驒の匠のたつき音のあなかしがましなぞや世のなか

などいひて「おこなひしに、深き山に入りなむとす。」といひて往にけり。程經て「何處にか

あらむと云ひて、深き山に籠り給ひぬとありしは、何處ぞ。」と云ひ遣り給ひたりければ、

何ばかり深くもあらず世の常の比叡を外山と見るばかりなり

となむいひたりける。横川といふ所にあるなりけり。

〔四十二〕 同じ人に、ある人、「山へのほり給ふべき日は遠くやある、いつぞ。」といへりければ、

登りゆく山の雲居の遠ければ日も近くなるものにぞありける

とぞいひ遣せたりける。かくのみ、よからぬ事の、あるがうへに出で來ければ、

のがるとも誰か著さらむぬれ衣あめの下にし住まむかぎりは

○十三の皇子の母 醍醐天皇の皇子章明親王の母藤原桑子。

○先帝 醍醐天皇。

○平仲 平定文、子は仲。

○閑院の御 源宗子の子。

○露のおきゐて 露の降るをおくさいふ所から、起きにつづけたのである。

○いそのかみ ふるの枕詞。こは唯古

き悉に用ゐて、私は君に古された身たがら、聞入れませんの意。

○先帝 宇多天皇。

○春日の影 春日の日の影だからたう。

○よそにのみして 官中をよそに、里に長閑に暮して居るのであらう。

○齋院の皇女 宇多の皇女君子内親王。

〔四十四〕 堤中納言君、十三の皇子の母御息所を、内裏に奉りける初めに、帝はいか

思し召すらむなど、いとかしこく思ひ歎き給ひけり。さて帝に詠みて奉り給ひける、

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな。

先帝いとあはれに思し召したりけり。御返しはありけれど、人え知らず。

〔四十五〕 平仲、閑院の御に絶えて後、程經て逢ひたりけり。さて後に云ひおこせたる、うちとけて君は寝つらむ我はしも露のおき居て戀にあかしつ

女、かへし、

白露のおきふし誰を戀ひつらむ我は聞きおはずいそのかみにて

〔四十六〕 陽成院の一條君、

奥山に心を入れてたづねずばふかき紅葉のいろを見ましや

〔四十七〕 先帝の御時、刑部君とて、候ひ給ひける更衣の、里にまかり出で給ひて、久しう参り給はざりけるに遣しける、

大空をわたる春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらむ

〔四十八〕 おなじ帝、齋院の皇女の御許に、菊につけて、

行きて見ぬ人のためにとおもはずば誰か折らまし我が宿の菊
齋院の御かへし、

我が宿に色をりとむる君なくばよそにもきくの色を見ましや

〔四十九〕 戒仙、山に登りて、

雲ならで小高き嶺にゐるものはうき世を背く我が身なりけり

〔五十〕 齋院よりうちに、

同じ枝をわきて霜おく秋なれば光もつらくおもほゆるかな

御かへし、

花の色を見ても知りなむ初霜の心わきてはおかじとぞ思ふ

これも、うちの御

わたつみの深き心をおきながらうらみられぬる物にぞありける

〔五十一〕 陽成院にありける、坂上のとほみちといふ男、同じ院にありける女、障る事ありて逢はざりければ、

秋の野をわくらむ鹿も我が如や繁きさはりに音をば鳴くらむ

○うちに 御門に。

○同じ枝を 御兄弟の御中に、隔てがおありになつて、かくは仰せられたのであらう。

○うちの御 みかどの御歌の畧。

○わたつみの わたつみは海で、その海の如き深きの意。おきは「置」に沖をきかせ、うらみ(恨)に捕をきかせたので、何れも海の縁語である。

○繁きさはり 草などの繁きをいつたのである。

○音をば鳴く 聲をたてて鳴く。

○博奕 ほくち。

○しをりして 責めさいなまれる意のしをりに、山路などで木の枝を折りかけて路のしるべにする意の葉をいひかけたのである。

○故郷 もと住みなれた地をいふ。

○もごし駒 駒は道を忘れぬものと古くよりいふ。重葎抄に韓子に曰く、「桓公孤竹を伐つ。春ゆきて秋歸る。迷ひて道を失ふ。管仲曰く、老馬の智用ふべし。則ち馬を放ちて從ひて歸りぬ。」

○心のくる 心から來たと思つたら駒に任せて來たのたの意。
○はふれて おちぶ

となむいひける。

〔五十四〕 越前權守兼盛、兵衛君といふ人にすみけるを、年比はなれて又往きけり。さてよみける。

夕されば道も見えねど故郷はもとこし駒にまかせてぞゆく

女、かへし、

駒にこそまかせたりければかなくも心のくると思ひけるかな

〔五十五〕 近江介平中興の女をいといたうかしつきけるを、親なくなりて後、とかくは

ふれて、他國にはかなき所にすみけるを、哀れがりて、兼盛が詠みておこせたりける、
をちこちのひと目まれなる山里に家居せむとは思ひきや君
と詠みてなむ遣せたりければ、返り事もせで、よ、とぞ泣きける。女もいとらうある人なりけり。

〔五十六〕 おなじ兼盛、陸奥國にて、閑院の三の皇子の女にありける人、黒塚といふ所にすみけり。その女どもにおこせたりける、

みちのくの安達の原のくろ塚に鬼こもれりと聞くはまことか

といひたりけり。かくて、「その女を得む。」といひければ、親「まだいとわかくなむある、今さるべからむ折にを。」と云ひければ、京にいくとて、山吹につけて、

花ざかり過ぎもやするとかはづ鳴く井手の山吹うしろめたしも

といひけり。かくて名取の御湯といふ事を、恆忠君の妻詠みたりけるといふなむ、この黒塚の主人なりける。

大空の雲の通ひ路見てしがなとりのみゆけばあとはかもなし

となむ詠みたりけるを、兼盛大君おなじ所を、

○らうある人 行き届いた人。

○閑院の三の皇子 清和の皇子貞元親王の第三子従五位下源兼信。

○安達の原 岩代國安達郡。鬼は戯れに美女をいつたのである。

○さるべからむ折にを 嫁してもよい折に。をは詠歌の助詞。

○井手の山吹 山城國相樂郡。山吹や蛙の名所。

○名取の御湯 陸前國名取郡にある温泉。

○ミりのみゆけば鳥のみ行けば、名取の御湯をかくしよんだのである。

○すなざりのみゆる 同じく名取の御湯をよみこんたのである。

○他男して 兼盛の心を寄せた女は恆忠の妻となつて京に上つたのである。

○うさは離れぬ 憂さに宇佐をかけたのである。

○五條の御 山蔭中納言の姪。

○君を思ひ 思ひのひに火をいひかけ、なま／＼し身は生々しき身である。

○河原院 六條鴨川の畔。もと源融の第宅であつたが、嵯後宇多法皇に奉る。

○一所の御曹子 京極の御息所たゞ一人お連れになつて。

○さう／＼しもの 足らずさびしい。

鹽釜の浦には海人や絶えにけむなどすなどりのみゆるときなき

となむよみける。さてこの心がけし女、他男して京に上りたりければ、聞きて、兼盛、「上

りものし給ふなるを、告げ給はせで。」と云ひたりければ、「井手の山吹うしろめたし。」とい

へりける文を、「これなむ陸奥國の土産。」とて、おこせたりければ、男、

半を経てぬれわたりつる衣手を今日の涙に朽ちやしぬらむ

といへりけり。

〔五十七〕 世の中を倦じて、筑紫へ下りける人、女の許におこせたりける、

忘るやと出でて來しかどいづくにもうさは離れぬ物にざりける

〔五十八〕 五條の御といふ人ありけり。男の許に我が像を繪に書きて、女の燃えたる像を書きて、烟をいと多く薫らせて、かくなむ書きたりける、

君を思ひなま／＼し身を焼く時はけぶり多かるものにざりける

〔五十九〕 亭子院に、御息所だち數多、御曹子して住み給ふ事、年比ありて、河原院のいと面白く作られたりけるに、京極の御息所、一所の御曹子をのみして渡らせ給ひにけり。

春の事なりけり。とまり給へる御曹子ども、いと思ひの外にさう／＼しき事をおもほしけ

○世の中の 古今集
雜下「世の中は何か
常なる飛鳥川きのふ
の淵ぞ今日は瀬にな
る」ふぢに淵をかけ
君龍の衰へたことを
よんだのである。

○うつろひにける
院の御心のうつろう
たことをいふ。

○淨藏 雲居寺の僧
三善清行の八男。

○思ふてふ 思ふと
いふ心は特に君に對
して持つてゐたのだ
その意。

○ゆくすゑの 行先
君とかやうに相思ふ
さいふ宿世のあるこ
とを知らぬ心には。
○のゝしりて 口や
かましくいつて。

○峰の嵐 嵐は親で
靡きし枝は女をいふ

り。殿上人なむ通ひ参りて、藤の花のいとおもしろきを、「これが盛りをだに御覽ぜで。」な
どいひて見ありくに、文をなむ結びついたりける。あけて見れば、

世の中の浅き瀬にのみなり行けば昨日のふぢの花とこそみれ
とありければ、人々見て、限りなくめで哀れがりけれど、誰が御曹子のし給へるともえ知
らざりけり。男どもの云ひける、

藤の花色のあさくも見ゆるかな移ろひにけるなごりなるべし

〔六十〕 のうさんの君といひける人、淨藏とはいと二なう思ひ交す中なりけり。限りなく
契りて、思ふ事をもいひかはしけり。のうさんの君、

思ふてふ心はことにありけるを昔の人になにをいひけむ
といひ遣せたりければ、淨藏大徳のかへし、

ゆくすゑの宿世を知らぬ心には君にかぎりの身とぞいひける

〔六十一〕 故右京大夫、人の女を忍びて得たりけるを、親聞きつけて、のゝしりてあはせ
ざりければ、侘びて歸りにけり。さて朝に詠みてやりける、

さもこそは峯の嵐は荒からめ靡きし枝をうらみてぞ來し

○いちはやく云ひけ
れは 本妻がきびし
く罵つたので。
○忘らるな 忘れ給
ふなの意。忘れやし
ぬるは、忘れやす
の意で反語。
○春がすみ 立ちに
かゝる序。

○南院の五郎 光孝
天皇の皇子是忠親王
の第五子今扶王。
○承香殿 光孝の女
源和子。

○うちをかくるは
簾を内外に懸けるこ
いふに、内裏といつ
たのはさいふ意をき
かせたのである。

○なけきのみ 歎き
ものきに木をいひか
く。
○いき難き 往きに
生きをいひかく。

〔六十二〕 平仲、にくからず思ふ若き女を、妻の許に率て来て置きたりけり。にくけなる
事どもを云ひて、妻遂に逐ひ出しけり。この妻に隨ふにやありけむ、らうたしと思ひなが
らえ留めず。いちはやく云ひければ、近くだにえ寄らで、四尺の屏風に寄りかゝりて、立
てりて云ひけり、「世の中の思ひの外にあること、異世界にもし給ふとも、忘れで消息し
給へ。おのれもさなむ思ふ。」といひけり。この女つゝみに物など入れて、車取りに遣りて
待つ程なり。いと哀れと思ひけり。さて女いにけり。とばかりありておこせたりける、

忘らるな忘れやしぬる春がすみ今朝立ちながら契りつること
〔六十三〕 南院の五郎、三河の守にてありける。承香殿にありける伊豫の御を懸想じけ
り。來むと云ひければ、御息所の御許に、「内裏へなむ参る。」といひ遣せたりければ、

玉すだれうちとかくるはいとゞしく影を見せじと思ふなりけり
といへりけり。又、

なけきのみ茂きみやまのほとゝぎす木がくれ居ても音をのみぞ鳴く
などいひけり。かくて來りけるを、「今はかへりね。」とやらひければ、
死ねとてやとりもあへずばやはらるゝといき難き心地こそすれ

○我はさは 我はさは

○あけぬ板戸は 板戸をあけないのは。

○こで消えぬの意か さいふので、消えは雪の縁語である。

○いなおほせ鳥 秋渡る鳥で、雁、鶺鴒、椋鳥の類。

○こほれたる家 隠れた家。

○君を思ひひまなき 君を思ふ思ひに隙のないさいふこを屋根の葺き目なごの隙なきにいひかけたのである。

○枇杷殿 左大臣仲平。

○ならしは 檜柴。馴らしの序。

○かしは木に 柏木も檜柴も同種類の木で、葉守の神は樹木を守る神である。俊子に千兼さいふ主のあるの知らないで折りにやつたさいふ事をいつたのである

○忠文 藤原忠文。天慶三年平将門の謀反にあたり、征夷大將軍に拜されて東國に下つた。

○めさりぐり 所所持つて染めるので所謂絞染をいふ。

○狩衣 武官の禮服

返し、をかしかりけれどえ聞かず。又雪の降る夜來たりけるを、物は云ひて、「夜更けぬ、歸り給ひね。」といひければ、歸りける程に、戸を鎖してあげざりければ、

我はさば雪ふる空に消えねとや立ちかへれどもあけぬ板戸は

となむ云ひてゐたりける。かく歌も詠みあはれに云ひるたれば、いかゞせましと思ひて、のぞきて見れば、顔こそ猶いと悪けなりしかとなむ、語りしとか。

〔六十四〕 俊子、千兼を待ちける夜、來ざりければ、

小夜更けていなおほせ鳥の鳴きけるを君が叩くと思ひけるかな

〔六十五〕 又俊子、雨の降りける夜、千兼を待ちけり。雨にや障りけむ、來ざりけり。こほれたる家にて、いたく漏りけり。「雨のいたく降りしかば、え參らずなりにき。さる所にいかで物し給ひつる。」といへりければ、俊子、

君を思ひひまなき宿と思へども今宵の雨は漏らぬ間ぞなき

〔六十六〕 枇杷殿より、俊子が家に柏木のありけるを、折りにたまへりけり。折らせて書きつけて奉りける、

我がやどをいつかは君がならしはのならし顔には折りにおこせる

御かへし、

かしは木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りした、りなさるな

〔六十七〕 忠文が、陸奥の將軍になりて下りける時、それが息子なりける人を、監の命婦忍びてあひ語らひけり、餞別に、めとりぐりの狩衣、桂、幣などやりたりける。この得たる男、

よひくゝに戀しさまさる狩衣心づくしのものにぞありける

とよみたりければ、女めでて泣きけり。

〔六十八〕 同じ人に、監の命婦、楊梅を遣りたりければ、

みちのくの安達の山ももろとも越えばわかれの悲しからじを

となむいひける。さて堤なる家に住みける。さて鮎をなむ取りて遣りける。

賀茂川の瀬にふす鮎のいを取りて寢でこそあかせ夢に見えつや

かくてこの男、陸奥國へ下りける便りにつけて、哀れなる文ども遣せけるを、道にて病しとなむ死にけると聞きて、女いと哀れとなむ思ふける。かく聞きて後、篠束驛といふ所より、便りにつけて、哀れなる事どもを書きたる文をなむ持て來たりける。いとかなしく

○うまや／＼ 驛々に今や／＼をかけたのである。

○重にて殿上して殿上童といつて、攝政關白の子弟が、元服以前に殿上に奉仕するをいふ。

○冠して 元服して

○金の使かけて 陸

奥の貢金使を兼ねて

○人の世よりは 宮

は花の散るのも待た

ないで薨ぜられたれ

はかくいふのである

○三條の右大臣 藤

原定方

○物ら ものなぞ。

て、「これは何時のぞ。」と問ひければ、使の久しくなりてもて來たるになむありける。女、篠束のうまや／＼と待ちわびし君は空しくなりぞしにける

と詠みてなむ泣きける。童にて殿上して、大七といひけるを、冠して、藏人所におりて、金の使かけて、親の供に往くになむありける。

〔六十九〕 故式部卿宮失せ給ひける時は、二月の晦日、花の盛りになむありける。堤中納言の詠み給うける、

咲きにほひ風まつほどの山櫻人の世よりは久しかりけり

三條の右大臣の御かへし、

春々の花は散るとも咲きぬべしまた逢ひがたき人の世ぞ憂き

〔七十〕 同じ宮おはしましける時、亭子院に住み給うけり。この宮の御許に、兼盛参りけり。召し出でて、物ら宣ひなどしけり。亡せ給うて後、かの院を見るにいとあはれなり。池のいとおもしろきに、哀れなりければ詠みける、

池はなほ昔ながらの鏡にてかけ見し君がなきぞかなしき

〔七十一〕 人の國の守にて下りける 餞別を、堤中納言して待ち給ひけるに、暮る、まで

○待ち遠にのみ 櫻

の枯れかゝつたのを

花の遅いやうにいつ

たのである。

○越の白山 しらや

ましらねともさつづ

け、更にゆきのまに

まにの語を出し、雪

に行きをかけて、君

が踏んで行くその雪

の足跡のまゝに、跡

を尋ねて私も行かう

といつたのである

○喜種 源長祿の子

で清和天皇の孫。

○涙の川 涙の多く

流れ出づるを、川に

たこへていふ。

來ざりければ、云ひ遣り給うける、

別るべきこともあるものを終日に待つとてさへも歎きつるかな

とありければ、まどひ來にけり。

〔七十二〕 おなじ中納言、かの殿の寢殿の前に、少し遠く立てりける櫻を、近く掘り植ゑ給うけるが、枯れざまに見えければ、

宿近くうつして植ゑしかひもなく待ち遠にのみ見ゆる花かな

〔七十二〕 同じ中納言、藏人にてありてける人の、加賀の守にて下りけるに、わかれ惜し

みける夜、中納言、

君が行く越の白山知らねどもゆきのまに／＼あとは尋ねむ

となむ詠み給うける。

〔七十四〕 桂の皇女の御許に、喜種が來たりけるを、母御息所聞きつけ給うて、門を鎖させ給うければ、夜一夜立ち煩ひてかへるとて、「かく聞え給へ。」とて、門の間よりいひ入れける、

こよひこそ涙の川にゐる千鳥なきてかへると君は知らずや

○永き夜を 立ち明
す思ひ(火)に燃える
煙いふべきを、あ
かしの浦で焼く鹽の
煙にいひかけたので
ある。

○よ、に泣きつ、
上句は、竹取物語の
故事をよんだので、
下の君は亭子院をさ
す。

○威儀の命婦 儀式
の指圖をする命婦。
○うちつけに 卒爾
端的、俄にの意で、
うちつけに感ふ心は
また慰めることも容
易だらうの意。

○こりすまの 怒り
すまにこいふ副詞を
須磨の浦にいひかけ
たので、怒りもしな
いで同じ事をつづけ
るをいふ。

○南院の君達 是忠
親王の御子達。

これも同じ皇女に、おなじ男、

永き夜をあかしの浦に焼く鹽のけぶりは空に立ちやのほらむ

かくて忍びて逢ひ給うける程に、院に八月十五夜せられけるに、「参り給へ。」とありけれ
ば、参り給ふに、院にては逢ふまじければ、「せめて今宵はな参り給ひそ。」と留めけり。さ
れどめしなりければ、え留まらでいそぎ参り給うければ、喜種、

竹取がよ、に泣きつ、留めけむ君はきみにとこよひしも行く

〔七十五〕 監の命婦、朝拜の威儀の命婦にて出でたりけるを、彈正の親王見給うて、俄に
感ひ懸想し給うけり。御文ありける御返り事に、

うちつけに感ふ心と聞くからに慰めやすくおもほゆるかな
親王の御歌はいかゞありけむ、忘れにけり。また同じ親王に、おなじ女、

こりすまの浦にかづかむ浮海松は浪さわがしくありこそはせめ

〔七十六〕 宇多院の花おもしろかりける比、南院の君達、これかれ集りて歌よみなどしけ
り。右京大夫宗于、

来て見れど心もゆかずふるさとは昔ながらの花に散れども

○故后官 醍醐の皇
后様子。

○故權中納言 敦忠
左大臣時平の男。

○忘れじと その人
は恙なく無事と承る
につけて、忘れじと
頼みに思はせられた
そのお言葉は、何地
へいつてかくつれな
くなられたのだから

○栗隈の山に 山城
久世郡にある山。上
の句は「かり」といふ
言葉の序で、狩に假
をかけて、かりにも
お逢ひになることは
あるまいと思つたの
に、かく消息を賜は
るこよの意。

○頭 藏人頭

他人のもありけらし。

〔七十七〕 季繩少將の女右近、故后宮に候ひけるころ、故權中納言の君おはしける。頼
め給ふ事などありけるを、宮に参る事絶えて、里にありけるに、更に訪ひ給はざりけり。

内裏邊の人來たりけるに、「いかにぞ参り給ふや。」と問ひければ、「常に候ひ給ふ。」といひけ
れば、御文奉りける、

忘れじと頼めし人はありと聞くいひし言の葉いづちいにけむ

となむありける。

〔七十八〕 同じ女の許に、更に音もせで、雉子をなむ遣せ給へりける、返り事に、

栗隈の山に朝立つ雉よりもかりにはあはじと思ひしものを

〔七十九〕 同じ女、内裏の曹司にすみける時、忍びて通ひ給ふ人ありけり。頭なりければ
殿上に常にありけり。雨の降る夜、曹司の葺のつらに立ちより給へりけるも知らで、雨の
漏りければ、筵を引きかへすとて、

思ふ人雨と降りくるものならば我がもる床はかへさざらまし

となむうち云ひければ、哀れと聞き給うて、ふと這ひ入り給ひにけり。

〔八十〕 同じ女、男の忘れじと、萬の事をかけて誓ひけれど、忘れにける後にいひやりける、

忘らる、身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな
かへしはえ聞かず。

〔八十一〕 おなじ右近、桃園宰相君なむ、すみ給ふなど云ひの、しりけれど、虚言なり
ければ、かの君に詠みて奉りける。

よし思へ海士のひろはぬうつせ貝空しき名をば立つべしや君
となむありける。

〔八十二〕 正月の朔日ごろ、大納言殿に兼盛参りたりけるに、物など宣はせて、すゞろに
「歌よめ」と宣ひければ、ふと詠みたりける、

今日よりは萩の焼原かき分けて若菜つまむと誰をさそはむ
とよみたりければ、二なくめで給ひて、御かへし、

片岡にわらび萌えずば尋ねつゝ心やりにや若菜つままし
となむよみ給うける。

○忘らる、人に忘れられた自分の身の事はなにも思はないで、命をかけても忘れぬと誓ひを立てた事だから、その神罰で忘れた人の命があるまいが、あゝその人の命が惜しいといふのである。
○桃園宰相 中納言源保光。宰相は参議。
○うつせ貝 空貝で實がないから、海士のひろはぬといつて空しきの序としたのである。
○大納言 藤原顯忠。時平の男。
○萩の焼原 萩の野火に焼けた所。野遊びの季節が来たが、若菜摘みにと誰を誘はうの意。
○片岡 大和國葛下郡二上の山東の丘陵

〔八十三〕 但馬國に通ひける兵庫頭なりける男の、かの國なりける女をおきて、京へ上りければ、雪の降りけるに云ひ遣せたりける、

山里に我を留めてわかれ路のゆきのまに／＼深くなるらむ
と云ひたりければ、

山里に通ふこゝろも絶えぬべし行くもとまるも心細さに
となむ返したりける。

〔八十四〕 同じ男、紀伊國に下るに、寒しとて、衣をとり遣せたりければ、女、
紀のくにのむろの郡に行く人は風の寒さもおもひ知られじ
かへし、男

紀の國の牟婁の郡に行きながら君とふすまのなきぞかなしき

〔八十五〕 修理の君に、右馬頭すみける時、方の塞りければ、「方違へにまかるとて、え参りこぬ。」といへりければ、

これならぬことも多く違ふれば恨みむ方もなきぞわびしき
かくて、右馬頭行かずなりにける比、詠みて遣せたりける、

○ゆきのまに／＼ 自分を疎んずる心が愈深くなるだらうといふ意を、道が雪に降り埋められる意にいひかけたのである。
○心細さに 細い者は絶える所から、心細さに、今は山里に通ふ心も絶えるといつたのである。
○むろの郡 牟婁郡の牟婁に室をかけたので室は産籠で温かいから寒さも知るまいといつたのである。
○ふすま 上の歌をうけて、母す間に衾をかけたのである。
○修理の君 内匠允藤原道行の女。
○網代の水魚 網の代りに竹や木を編んだ物を川の瀬にかけてよつて来る水魚をさるのである。それで何によりてかさいつたのである。
○うちの人 水魚の産地、宇治に内をかけたのである。

○霧立ちぬ 夜の明けたことをいふ。
○我は消えなむいかにしてか白露の如く我は消えてしまひたいの意。

○もの思ふことは心は君に止めて来たのだから、君を思ふ事はもはやない筈だ然るをなほ物の思はれるのは、我が身の事なんたらうかの意

○故兵部卿宮 陽成天皇の皇子元良親王

○吳竹の 吳竹に親王をきかせ、竹の縁から一節二節といつて一夜二夜をきかせふしといひ、一夜二夜のあだし契りはなにかはせんといつたのである。

いかでなほ網代の氷魚にこととはむ何によりてか我を訪はぬと
といへりければ、かへし、

網代より外には氷魚のよるものか知らずば宇治の人に問へかし
〔八十六〕 又おなじ女に通ひける時、つとめて詠みたりける、

明けぬとていそぎもぞする逢坂の霧立ちぬとも人に聞かすな
男はじめごろ詠みたりける。

いかにして我は消えなむ白露のかへりて後のものは思はじ
かへし、

垣ほなる君があさがほ見てしがな歸りてのちは物や思ふと

おなじ女に、氣近く物など云ひて、歸りて後に詠みてやりける、

心をし君にとめて來にしかばもの思ふことは我にやあるらむ
修理がかへし、

たましひはをかしき事もなかりけり萬のものは骸にぞありける

〔八十七〕 同じ女に、故兵部卿宮御消息などし給ひけり。「おはしまさむ。」と宣ひければ聞

えける。

高くとも何にかはせむ吳竹のひとよふたよのあだのふしをば

〔八十八〕 三條右大臣、中將にいますかりける時、祭の使にさされて出で立ち給うけり。

通ひ給うける女の、絶えて久しくなりにけるに、「かゝる事になむ出で立つ。扇持たるべかりけるを、騒がしうてなむ忘れにける。一つ賜へ。」と云ひ遣り給へりけり。よしある女なりければ、よくて遣せてむと思ひ給うけるに、色などもいと清らなる扇の、香などもいとかうばしうて遣せたり。引き返したる裏の、端の方に書きたりける、

ゆゝしとて忌むとも今はかひもあらじ憂きをばこれに思ひよせてむ
とあるを見て、いと哀れと思して、かへし、

ゆゝしとて忌みける物を我が爲になしといはぬは誰がつらきなる

〔八十九〕 故權中納言、左大臣の君をよび給ふ年の十二月の晦日に、

物思ふと月日のゆくも知らぬ間に今年も今日にはてぬとか聞く
となむありける。又かくなむ、
いかにしてかく思ふてふことをだに人傳てならで君にかたらむ

○ゆゝしとて 扇は夏は愛されるが、やがて秋風が吹くま捨てられてしまふ。それで男女の間には扇を贈ることを思むのである。ゆゝしは思しでいまはしい意
○左大臣の君 小野宮實頼の女。
○物思ふと 物思ふとてで、物思ひに耽つて、月日の過ぎるのも知らぬ間にいふのだ。

○今日そへにそへには、いふ迄もなく、勿論の意。今日たつて勿論暮れる。暮れたら逢はうと思ふがそれがたまらない心地がするといふのである。

○齋宮の皇女 醍醐天皇の皇女雅子内親王。

○伊勢の海 皇女が齋宮に立たれた所から、まづ伊勢海のこ

いひ起し、效に貝を掛けて、今はいかに戀ひ慕つてもそのかひが無いといつたのである。

○故中務官 源保光の父代明親王。

○何かはさもこ 何かは苦しがるべき、さもすべしの意。

かくいひくつて、遂に逢ひにけるあしたに、

今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり

〔九十〕 これも同じ中納言、齋宮の皇女を年ごろよばひ奉り給うて、今日明日あひなむとしける程に、伊勢齋宮の御占に合ひ給ひにけり。言ふ效なく口惜しと、男思う給うけり。さてよみて奉り給うける。

伊勢の海ちひろの濱に拾ふとも今はかひなくおもほゆるかな
となむありける。

〔九十一〕 故中務官の北の方亡せ給うて後、小き君達を引き具して、三條の右大臣殿にすみ給うけり。御忌など過しては、遂に一人は過し給ふまじかりければ、かの北の方の御弟九の君を馳得給はむと思しけるを、何かはさもと親兄弟も思したりけるに、如何ありけむ、左兵衛督君、侍従に物し給うける比、その御文持て來となむ聞き給うける。さて心づきなしと思しけむ、もとの宮になむ渡り給ひにける。その時に、御息所の御許より、なき人の巢守にだにもなるべきに今はとかへる今日のかなしさ
宮の御かへし、

巢守にと思ふ心はとむれどかひあるべくもなしとこそ聞け

となむありける。

〔九十二〕 おなじ右大臣の御息所、帝おはしませなりて後、式部卿宮なむすみ奉り給うけるを、いかありけむ、おはしませざりける比、齋宮の御許より、御文奉り給へりけるに、御息所、宮のおはしませぬ事など聞え給うて、奥に、

白山にふりにし雪のあと絶えていまは越路の人も通はず

となむありける。(御かへしあれど、本になしとあり。)

かくて九の君、侍従の君にあはせ奉り給うてけり。同じ比、御息所を、宮おはしませずなりにければ、左大臣の右衛門督におはしける比、御文奉り給うけり。かの君増どられ給ひぬと聞き給うて、大臣、御息所に、

浪の打つ方も知らねどわたつみのうらやましくも思ほゆるかな

〔九十三〕 太政大臣の北の方うせ給うて、御はての月になりて、御わざの事急がせ給ふ比、月のおもしろかりけるに、端に出でる給うて、物のいと哀れにおほされければ、
隠れにし月はめぐりて來にしかど影にも人は見えすぞありける

○左兵衛督 忠平の子、藤原師尹。
○御息所 右大臣の娘、女御善子。
○巢守にだにも 卵のかへらないで、巢に残つてゐるをいふ。
○式部卿官 宇多天皇の皇子敦實親王。
○齋宮 敦實親王の妹柔子内親王。
○侍従の君 師尹。
○左大臣 師尹の兄藤原實賴。
○浪の打つ 浪の打つ方は御息所の心の寄る方をいつたので。わたつみの浦から羨しに續けて、師尹が九の君の増なつたのを羨んだのである。
○太政大臣 忠平。
○影にも人は 人は北の方をいふ。

○菅原君 宇多天皇の皇女。母は菅原道真の女。

○うち 醍醐天皇。

○蘇芳襲 表が赤で裏が深紅なるをいふ

○ぬぐをのみ 喪服をぬぐので、亡き人の名残と思へばぬぐのが悲しいのである

○小倉山峯のもみぢは 峯の紅葉はよみ呼びかけたので、近い内に今上の行幸もあらうから、それまで散らすに待つてくれよといふのである
○花おもしろくなりなは 花は山吹である。

〔九十四〕 同じ太政大臣、左大臣の御母、菅原の君かくれたまひにける。御服はて給ひにける比、亭子の帝、うちに御消息聞え給うて、色聴され給うける。さりければ、大臣いと清らに蘇芳襲など著給うて、后宮にまゐり給うて、院の御消息のいと嬉しく侍りて、かく色聴され侍ることなど聞え給ふ。さて詠み給うける、

ぬぐをのみ悲しと思ひしなき人のかたみの色は又もありけり
とてなむ泣き給うける。その程は中辨になむ物し給うける。

〔九十五〕 亭子の帝の御供に、太政大臣、大井に仕うまつり給へるに、紅葉小倉山に、いろいろいと面白かりけるを、「限りなくめで給うて、行幸もあらむに、いと興ある所になむありける。必ず奏してせさせ奉らむ。」など申し給うて、ついでに、

小倉山峯のもみぢば心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ

となむありける。かくて歸り給うて奏し給うければ、いと興ある事なりとて、大井の行幸といふ事はじめ給うける。

〔九十六〕 大井に季繩少將すみける比、帝宣ひける、「花おもしろくなりなば、必ず御覽ぜむ。」とありけるを、おぼし忘れておはしまさざりければ、少將、

散りぬればくやしきものを大井川きしの山吹今日さかりなり

とありければ、いたう哀れがり給ひて、急ぎおはしましてなむ御覽じける。

〔九十七〕 おなじ少將、病にいたう煩ひて、少しおこたりて、内裏に参りたりけり。近江守公忠君、掃部助にて藏人なりける比なりけり。その掃部助に逢ひて云ひけるやう、

「亂り心地はまだおこたりはてねど、いとむつかしう、心許なく侍ればなむ参りつる。後は知らねど、かくまで侍る事、罷り出でて、明後日ばかり参り來む、よきに奏し給へ。」など云ひ置きて罷出ぬ。三日許りありて、少將の許より、文をなむ遣せたりけるを見れば、悔しくぞ後に逢はむと契りける今日をかぎりといはましもものを

とのみ書きたり。いとあさましくて、涙をこぼして、使に問ふ、「いかゞ物し給ふ。」と問へば、使も、「いと弱くなりたまひにたり。」といひて泣くを聞くに、更にも聞えず、「みづから只今参りて。」と云ひて、里に車とりにやりて待つほどいと心もとなし。近衛御門に出で立ちて、待ちつけて乗りて馳せゆく。五條にぞ少將の家あるに、往きつきて見れば、いといみじう騒ぎの、しりて門鎖しつ。死ぬるなりけり。消息いひ入るれど何のかひなし。いみじう悲しくて、泣くく歸りにけり。かくてありけることを、上の條奏しければ、帝も限

○おこたりて 快癒して。
○亂り心地 病に煩ふをいふ。
○いとむつかしう 心のはれぬししないこと。
○心許なく侍れば 気が、りなのをいふ
○後は知らねど 今後の事はわからぬが今日まではかうして生きながらへたといふのである。
○悔しくぞ 明後日また参つて御目にかからうと契つた事が返すくも悔しい。かうも知つたら、明後日といはず今日を限りといふのであつたにの意。
○里に車をとりにやりて 公忠がわが家に車をとりにやつて
○近衛御門 陽明門をいふ。
○上の條 前條の次第。

○行く人は 出て行く人は、その時やがて歸つて来ますといつて出て行くのに、自分は今日の別れはこれが最後と思へば心細い。

○市に行きけり 集り来る人々を見に。○故后官の御達 皇后温子の女房達。○百敷の 后官の御達は大勢見たけれど、さいふので、おもひのひに群をかけて、特に武藏守の女を想ふ由をいつたのである。

○播磨 表裏共に紅 ○その夜下待ちけれど 来すといふ語を補つてみるのである。

○ありて 結局、ミジのつまり、今まで多くの人に靡かないで来てミジのつまりがこんな人に逢ひ給うて、よしなき愛き目を見給ふさいふのである。

○人には知らせで 平仲に逢つた事は人に知らせないで。○こゝろを逢ふも 又ほかの人に逢ふこともかゝりけるやうはかうなつた次第は○司長官 當時平仲は左兵衛尉たつたら左兵衛督をいふ。○よりいまして 司長官が平仲の處へ立寄つて

○寄り臥したりける を 平仲が物によりかゝつて寝てゐたのを。○おひ起して 無理に起して。○今まで寝たりける 司長官の言葉で、そのいつまでも寝てゐたのを呆れたのである。

○夜更けて歸り給ふ 院が還啓になるをいふ。

りなく哀れがり給うける。

〔九十八〕 土佐守にありける酒井人真といひける人、病してよわくなりて、鳥羽なりける家に行くとして詠みける。

行く人はそのかみ来むといふものを心ほそしや今日の別れは

〔九十九〕 平仲が色好みけるさかりに市に行きけり、中比は、よき人々市に行きてなむ、色好むわざはしける。それに故后官の御達、市に出でける日なむありける。平仲色好みかかりて、二なう懸想じけり。後に文をなむ遣せたりける。女ども「車なりし人は多かりしを、誰にある文にか。」となむ云ひやりける。さりければ男の許より、

百敷のたもとのかずは見しかどもわきておもひの色ぞ戀しき

といへりけるは、武藏守の女になむありける。それなむいと濃き搔練著たりける。それをも思ふなりけり。さればその武藏なむ、後は返り事はしていひつきにける。かたち清けに髪長くなどして、よき若人になむありける。いと痛う人々懸想じけれど、思ひあがりて男などもせでなむありける。されど切によばひければ逢ひにけり。その朝文をも遣せず、夜まで音もせず。心憂しと思ひ明して、又の日待てど文も遣せず。その夜下待ちけれど、朝

に、つかふ人など、いとあだにものし給ふと聞きし人を、ありて、かく逢ひ奉り給うて、自らこそ暇もさはり給ふ事ありとも、御文をだに奉り給はぬ、心憂き事などこれかれ云ふ。心地にも思ひるたることを人も云ひければ、心憂く悔しと思ひて泣きけり。その夜もしやと思ひて待てど又来ず。又の日も文も遣せず、すべて音もせで五六日になりぬ。この女、音をのみ泣きて物も食はず、使ふ人など大方は「な思しそ、かくてのみ止み給ふべき御身にもあらず。人には知らせでやみ給うて、ことわざをもし給ひてむ。」と云ひけり。物もいはでこもり居て、つかふ人にも見えて、いと長かりける髪をかい切りて、手づから尼になりにけり。つかふ人集りて泣きけれど、いふかひもなし。「いと心憂き身なれば、死なむと思ふにも死なれず。かくだになりて、行をだにせむ。かしがましくかくな人々いひ騒ぎそ。」となむいひける。かゝりけるやうは、平仲その逢ひける翌朝、人遣せむと思ひけるに、司長官、俄に物へいますとて、よりいまして寄り臥したりけるを、おひ起して、「今まで寝たりける。」とて、逍遙しに遠き所へ率ていまして、酒飲みの、しりて、更に歸し給はず、辛うじて歸る儘に、亭子の帝の御供に、大井に率ておはしましぬ。其所に又二夜候ふに、いみじう酔ひにけり。夜更けて歸り給ふに、この女の許いかむとするに、方の

○類して 連れて。
○嵐の君に 武藏守の女の許から使が来て、手仲に物申すさいふのである。

○あまの川 天に尼をきかせて、天(尼)の川は我が目の前の涙であつたんだといつたのである。

○世をわぶる 如何に世をわぶる涙の堰きあへず流れればさて、さう早く天の川さならう筈はないといふので、天に尼をきかせて、つきつめた女心に、早くも尼となつたのをいぶかる由にいつたのである。

塞りければ、大方みな違ふ方へ、院の人々類していけり。この女、いかに覺束なく怪しと思ふらむと戀しきに、今日だに日も疾く暮れなむ、行きて有様もみづからいはむ、かつ文を遣らむと、酔ひ覺めて思ひけるに、人なむ来てうち叩く「誰そ。」と問へば、猶「尉の君に物聞えむ。」といふ。さしのぞきて見ればこの家の女なり。胸潰れて「此方來。」と云ひて文を取りて見れば、いと香しき紙に、切なる髪を少し搔いわがねて包みたり。いと怪しうおほえて、書いたる事を見れば、

あまの川そらなるものと聞きしかど我が目の前の涙なりけり

と書きたり。尼になりたるなるべしと見るに、目もくれぬ。心肝をまどはして、この使に問へば、「早う御髪おろし給うてき。かゝれば御達も、昨日今日いみじう泣き惑ひ給ふ。下種の心地にも、いと胸痛くなむ。さばかりに侍りし御髪を。」といひて泣く時に、男の心地いといみじ、なでふかゝる色好歩きをして、かく侘しき目を見るらむと思へどかひなし。泣く／＼返り事書く。

世をわぶる涙ながれてはやくとも天の川にはさやはなるべき

いとあさましきに、え物も聞えず、「みづから只今参りて。」となむ云ひたりける。かくて即

○塗籠 今の納戸。家の奥の方にあつて厚く上で塗り籠め、器財を納め置く處。

○滋幹 大納言國經の男。

○戀しさに 君故に私はやがてこがれ死に死にます。若し私の事を思ひ出して人が聞いたならば、あれは死んでしまつたさ答へて下さいの意。○我きたりてへ 我來たりさいへ。○人さかくいひけり 二人の間に何かわけがある様に噂した。○なほしもはたあらざりけり 事實無根さいふわけでもなかつた。

ち來にけり。そのかみ女は塗籠に入りけり。事のあるやう、さばかりを、使ふ人々に云ひて泣くことかぎりなし「物をだに聞えむ。御聲をだにし給へ。」といひけれど、更に答へをだにせず。「かゝるさはりをば知らで、なほ只いとほしさに、いふとや思ひけむ。」とてなむ、男は世にいみじきことにしける。

〔百〕 滋幹少將に、女、

戀しさに死ぬる命を思ひ出でて問ふ人あらば無しと答へよ

少將かへし、

骸にだに我きたりてへ露の身の消えばともにと契り置きてき

〔百一〕 中興の近江介が女、物の怪に煩ひて、淨藏大徳を驗者にしける程に、人とかくいひけり。なほしもはたあらざりけり。忍びてあへりて後、人の物いひなどもうたてあり。猶世に經じなど思ひ云ひてうせにけり。鞍馬といふ所に籠りて、いみじう行ひ居り。さすがにいと戀しう覺えけり。京を思ひやりつゝ、萬の事いと哀れにおほえて行ひけり。泣く泣くうち伏して、傍を見れば、文なむ見えける。何ぞの文ぞと思ひて取りて見れば、この我が思ふ人の文なり。書けることば、

○墨染の 墨染のく
らから鞍馬にいひか
け、たゞるこつかけ
て、折々は忍んで都
へも歸り給へといつ
たのである。

○さても君 やつこ
の事で思ひ忘れたの
にこいつた淨藏の言
葉をうけて、鶯の聲
に思ひ出したはそ
れでは君は私の事を
忘れたのだといつた
のである。

○我が爲に 自分
つらい人を怨みこそ
すれ何の罪もない世
を憂しのわびしを
怨むことはいない
ふのだ。

○親も見ず 親まで
が見捨てた。
○兵部卿官 元良親
王。

○萩の葉の 萩の葉
が風のまにまに靡く
様に、いづ方へもう
つろひ易き女の心を
怨んだのである。

墨染のくらの山に入る人はたどるくもかへり來なむ
と書けり。いとあやしく誰して遣せつらむと思ひ居り。持て來べき便もおほえず、いと怪
しかりければ、又一人惑ひ來にけり。かくて又山に入りにけり。さておこせたりける、
からくして思ひ忘る、戀しさをうたて鳴きつる鶯の聲
かへし、
さても君忘れけりかし鶯の鳴く折のみやおもひ出づべき
となむいへりける。又淨藏大徳、
我が爲につらき人をば置きながら何の罪なき世をや怨みむ
ともいひけり。この女は二なくかしづきて、皇子たち上達部よばひ給へど、帝に奉らむと
てあはせざりけれど、この事出で來ければ、親も見ずなりにけり。
〔百二〕 故兵部卿官、この女のかゝること、まだしかりける時、よばひ給うけり。親王、
萩の葉のそよぐことにぞ恨みつる風にうつりてつらき心を
これも同じ宮、
あさくこそ人は見るらめ關川の絶ゆる心はあらじとぞ思ふ

○絶えぬべくのみ
岩間をくぐる水の浅
く絶えぬなる如き
御心を、さうして淺
く思はずに居られま
せうやの意。

○物聞えなすれど
物聞えなすはする
がしかし、しみん
ごお逢ひ申す事はし
ない。

○忘らるゝ、いくら
怨んたつて怨みきれ
ないから、せめて罪
なくて捨てられたそ
の罪を我が身に著て
なりと、君を怨まう
といふのである。

○ゆゑしくも 男女
のなからひを世とい
ふ。人ごまにかく疎
まれる世なんだから
私もやつぱりその數
に漏れぬたらう、そ
れがいまゝしい。

かへし、
せき川の岩間をくぐる水浅み絶えぬべくのみ見ゆるこゝろを
かくて、この女出でて物聞えなどすれど、逢はでのみありければ、親王おはしましたりけ
るに、月のいと明かりければ、詠み給うける、
夜なくに出づと見しかどはかなくて入りにし月といひてやみなむ
と宣ひけり。かくて扇を落し給へりけるを取りて見れば、知らぬ女の手にてかく書けり、
忘らるゝ身はわれからのあやまちになしてだにこそ君をうらみめ
と書けりけるを見て、その傍に書きつけて奉りける、
ゆゑしくも思ほゆるかな人ごまに疎まれにける世にこそありけれ
となむ。又この女、
忘らるゝ常磐の山のねをぞなく秋野の蟲のこゑに亂れて
かへし、
なくなれどおほつかなくぞ思ほゆる聲聞くことの今はなければ
又同じ宮、

○雲居にて 雲居は禁中をいふ。經るに降るをかけて五月雨につまげ、雨を受け天の下につまげたのである。

○逢ふことの はじめの内は絶えず御たづね下さつて寧ろうるさくも思つたのに、今は御つてこちらから御出でを願ふやうになつて、空しくお歸し申した時が戀しい。

○かりそめに 夏とくに床を、根に寝を、枯れに離れをかけて、根が枯れ果てたのにさうして花が咲いたらうさいふので、離れ果て給へるに、さうして戀しいのだからと思ふ意をかかせたのだ。

雲居にて世をふる頃は五月雨のあめの下にぞ生けるかひなきかへし、

降ればこそ聲も雲居に聞えけめいと、はるけき心地のみして同じ宮に、こと女、

逢ふことの願ふばかりになりぬればたゞに歸しし時ぞこひしき

〔百二〕 南院の今君といふは、右京大夫宗于君の女なり。それ太政大臣の尙侍君の御かたに候ひけり。それを兵衛君、あや君と聞えける時、曹司にしばくおはしけり。おはし絶えにければ、床夏の枯れたるにつけて、かくなむ、

かりそめに君がふしみし床夏の根も枯れにしをいかで咲きむとなむありける。

〔百四〕 同じ女、巨城が牛を借りて、又後に借りたりければ、「奉りし牛は死にき。」と云ひたりける返り事に、

我が乗りしことをうしとや消えにけむ草にかゝれるつゆの命は〔百五〕 同じ女、人に、

○大空は 經るに降るをかけて、逢はな

いで年を經る歎きに袖も涙にぬれるさいふのである。

○縣井戸 一條の北東洞院の西角。

○信明 源公忠の男

○別れ路の淵瀬 三途の川をいふ。三途

の川を渡る時は始めて逢つた男に手を引

かれるさいふ。さてかやうに捨てられて

了つて見れば、此の世はさにかく、三途

の川はさうして渡らうさいふのである。

○雨もよにはた 雨の降るのを男の來るにたこへて、よもや來る事はなからうさ

いふのである。

大空は曇りすながら神無月としの經るにもそでは濡れけり

〔百六〕 大膳大夫公平の女ども、縣井戸といふ所に住みけり。おほい子は、后宮に少將の御といひて候ひけり。三にあたりにけるは、備前守信明、まだ若男なりける時になむ、初

めの男にしたりける。住まざりければ、詠みて遣りける、この世にはかくてもやみぬ別れ路の淵瀬をたれに問ひて渡らむとなむありける。

〔百七〕 おなじ女、後に兵衛尉庶忠に逢ひて、詠みて遣せたりける。風吹き雨降りける日のことになむ、

こち風はけふ日暮しに吹くめれど雨もよにはたよにもあらじなとよみけり。

〔百八〕 兵衛尉離れて後、臨時の祭の舞人にさされて行きけり。この女ども、物見に出でたりけり。さて歸りて詠みてやりける、

昔著てなれしをすれる衣手をあなめづらしとよそに見るかなかくて兵衛尉、山吹につけて遣せたりける、

○ひざりをりうき
居りに折りをかけて
一緒に居た當時を思
ひやつてよんだので
ある。

○女通ひける時に
兵衛尉が通つて居た
時に女がよんだとい
ふのである。

○逢ふことの 逢ふ
ことは無しといふべ
きを波にいひかけた
のである。水がくれ
ては水に隠れてで、
逢ふことなくて音の
み泣かれるといつた
のである。

○桂の皇女 季子内
親王。

○少貳の乳母 村上
天皇の御乳母。

○袖に涙の かゝる
にいひかけたのであ
る。

もろともに井出の里こそ戀しけれひとりをりうき山吹の花
となむ。かへしは知らず。かくてこれは、女通ひける時に、
大空もたゞならぬかな神無月我のみ下にしぐると思へば
これも同じ人、

逢ふことのなみの下草水がくれてしづ心なく音こそなかるれ

〔百九〕 桂の皇女、七夕の比、忍びて逢ひ給へりけり。さて遣り給へりけり。
袖をしもかさざりしかど七夕のあかぬ別れにひぢにけるかな

〔百十〕 右大臣、頭におはしける時に、少貳の乳母の許に詠みて給うける、
秋の夜を待てとたのめし言の葉に今もかゝれる露のはかなさ
となむ。

秋も來ず露も置かねど言の葉は我がためにこそ色かはりけれ

〔百十一〕 公平の女、死ぬとて、

ながけくも頼みけるかな世の中を袖に涙のかゝる身をもて

〔百十二〕 桂の皇女、よしたねに、

露しけみ草のたもとを枕にて君まつむしの音をのみぞなく

〔百十三〕 閑院のおほい君、

むかしより思ふころはありそ海の濱のまさごは數も知られず

〔百十四〕 同じ女に、陸奥國の守にて死にし藤原眞樹が、詠みて遣せたりける。病いと重
くしておこたりける比なり。「いかで對面給はらむ。」とて、
からくして惜しみとめたる命もて逢ふことをさへやまむとやする

といへりければ、おほい君、かへし、
諸共にいざとはいはで死出の山などは一人越えむとはせし

といひたりけり。さて來たりける夜も逢ふまじき事やありけむ、え逢はざりければ、歸り
にけり。さて朝に男の許より云ひ遣せたりける、
あかつきはゆつけ鳥のわび聲におとらぬ音をぞ鳴きて歸りし

おほい君、かへし、
あかつきの寢覺の耳に聞きしかど鳥よりほかの聲はせざりき

〔百十五〕 太政大臣は、大臣になり給ひて年比おはするに、枇杷大臣は、えなり給はであ

○閑院のおほい君
源宗子の女。

○ありそ海 ありそ
はあらいその約であ
りにいひかけ、思ふ
心は限りなき由をい
いつたのである。

○逢ふことをさへや
まむとやする 止ま
んに病まんをかけた
のである。

○おほい君 大君で
長姉をいふ。

○ゆつけ鳥 木綿
付鳥で鶴をいふ。

○あかつきの 鳥の
わび聲にも劣らぬ音
を泣いたと仰せられ
るが、鳥より外に更
に聲も聞えなかつた
といふのである。

○太政大臣 忠平。

○枇杷大臣 忠平の
兄仲平。

○たが植ゑおきし
皆これ先考基經公の
しおかれた御蔭たご
いふのである。

○齋宮 柔子内親王

○三條の右大殿の女

御 三條の右大臣定

方の女善子。

○もしぎり もしぎ

らひ(年嫌)の約で菓

樹が年によつて實を

結ばぬをいふ。

○左の大臣の中納言

小野官實頼がまた

中納言の時をいふ。

○笛たけの ひさよ

の序で、一節に一夜

をかけたのである。

○こまはのふき 詞

のいひなしの意。笛

の縁でかくいふ。

○こちく 胡竹に此

方來の意をきかせた

のである。

りわたりけるを、つひに大臣になり給うける御悦びに、太政大臣、梅を折りてかざし給うて、

遅く疾くつひに咲きける梅の花たが植ゑおきし種にかあるらむ

とありけり。その日の事どもを、歌など書きて、齋宮に奉り給ふとて、三條右大殿の女御、やがてこれに書きつけ給ひける。

いかでかく年ぎりもせぬ種もがなあれゆく庭の陰とたのまむ

とありけり。その御返し、齋宮よりありけり。忘れにけり。かくて願ひ給うけるかひありて、左大臣の中納言、渡り住み給うければ、種皆ひろごり給うて、陰多くなりけり。さりける時に、齋宮より、

花ざかり春は見に来む年ぎりもせずといふ種は生ひぬとか聞く

〔百十六〕 實任少貳といひける人のむすめの男、

笛たけのひとよも君と寝ぬときは千種のこゑに音こそなかるれ

といへりければ、女かへし、

千々の音はことばのふきか笛竹のこちくの聲も聞え來なくに

○はし殿 御殿の端の方。

○かつく はつは

つに、まあくなど

の意で、何もなく物

の思はれること。

○本院 藤原時平。

○北の方 時平の妻

在原棟梁の女。初め

國經に嫁したが、時

平が奪つて妻にした

○帥の大納言 時平

の叔父藤原國經。

○春の野に 上の句

は我が君實の實の序

で、君實は本妻をい

ふ。わが本妻として

行末を頼まうと思ふ

が如何の意。

○の、しり給うける

時 評判の高い時。

〔百十七〕 俊子が志賀にまうでたりけるに、増基君といふ法師ありけり。それは比叡にすむ院の殿上もする法師になむありける。それこの俊子の詣でたる日、志賀にまうであひにけり。はし殿に局をしてゐて、萬の事をいひかはしけり。今は俊子歸りなむとしけり。それに増基の許より、

逢ひ見ても別る、事のなかりせばかつく物は思はざらまし

かへし、俊子、

いかなればかつく物を思ふらむ名残もなくぞわれは悲しき

となむありける。詞もいと多くなむありける。

〔百十八〕 同じ増基君、遣れる人の許は知らず、かう詠めりけり、

草の葉にかゝれるつゆの身なればや心動くになみだ落つらむ

〔百十九〕 本院の北の方、まだ帥大納言の妻にいますかりける折に、平仲が詠みて聞えける、

春の野にみどりにはえるさねかづら我が君實とたのむいかにぞ

といへりける。その後左大臣の北の方にて、の、しり給うける時、詠みて遣せたりける、

○ゆくすゑの宿世
時平の妻なる宿縁
○泉の大將 藤原定
圖。

○故左大臣 時平。
○かさぎの 橋の
渡せる橋におく霜の
白きを見れば夜ぞ更
けにけるの歌によつ
て夜の更けた事を知
らせ、ほかへ行つた
序ではなく、この夜
更にわざ／＼参つた
のだといふ事をいつ
たのである。

○我が宿の 女を薄
にたさへ、女の小く
てまたその時にあら
ぬを結びぎきにはま
たしかりけりといつ
たのである。結び時
は婚期をいふ。

○檜垣の御 太宰府
に住んでゐた白拍子
○勢あり 物馴れて
○野大貳 小野好古
○ぬはたまの 黒髪
の白くなつたのをし
ら川にいひかけ、白
川の水を汲むまでに
衰へた意をみづはぐ
むにかけたので、み
づはぐむは老人の齒
のぬけて、更に小齒
のはえるのをいふ。
○鹿の音は 木の葉
は鹿の鳴く頃紅葉す
る所からかくよんだ
ので、紅に染めるに
は、衣を染草の水に
入れて、幾度も振り
動かして濃く染めつ
けた所から、ふりこ
つめたのである。
古今集に「思ひ出づ
るときは山の時鳥
唐紅にふり出でてな
く。」

ゆくすゑの宿世も知らず我がむかし契りしことはおもほゆや君
となむいへりける。その返し、それより前々も、歌は多かりけれど、え聞かず。

〔百二十〕 泉大將、故左大臣に参で給へりけり。ほかにて酒などまると酔ひて、夜いたく更けて、ゆくりもなくものし給へり。大臣驚き給うて、「何處にもものし給へる便にかあらむ。」など聞え給うて、御格子あけ騒ぐに、壬生忠岑御供にあり、御階の下に松ともしながら、ひざまづきて御消息申す。

「かさぎの渡せる橋の霜の上を夜半に踏み分けことさらにこそとなむ宣ふ」と申す。主人の大臣いとあはれにをかしと思して、その夜一夜、大御酒まり遊び給うて、大將にものかづけ、忠岑も祿賜はりなどしけり。

〔百二十一〕 この忠岑が女ありと聞きて、或人なむ得むといひけるを、いと善き事なりといひけり。男の許より、「かのたのため給ひし事、この比の程となむ思ふ。」といへりける返り事に、

我が宿のひとと薄うら若み結びどきにはまだしかりけり
となむ詠みたりける。誠にまだいと小さき女になむありける。

〔百二十二〕 筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いと勢あり、をかしくて世を経けるものになむありける。年月かくてあり渡りけるを、純友が騒ぎに遭ひて家も焼け滅び、物具もみなとられ果てて、いとみじうなりにけり。かゝりとも知らで、野大貳追討使にくだりたまうて、それが家のありし邊を尋ねて、「檜垣の御と云ひけむ人に、いかで逢はむ。何處にか住むらむ。」と宣へば、「この邊になむ住み侍りし。」など、供なる人もいひけり。「あはれかゝるさわぎに、いかになりにけむ。尋ねてしかな。」と宣ひける程に、頭白き姫の水汲めるなむ、前より怪しきやうなる家に入りける。ある人ありて、「これなむ檜垣の御。」と云ひけり。あはれがり給うて呼ばすれど、恥ぢて來で、かくなむいへりける。

ぬはたまの我が黒髪はしら川のみづはぐむまでなりにけるかな
と詠みたりければ、あはれがりて、著たりける柏一襲脱ぎてなむ遣りける。
〔百二十三〕 又同じ人、大貳の館にて、秋の紅葉を詠ませければ、
鹿の音はいくらばかりの紅ぞふり出づるからに山の染むらむ
この檜垣の御、歌なむ詠むといひて、すき者ども集りて、「詠みがたかるべき末をつけさせむ。」とて、かくいひけり。